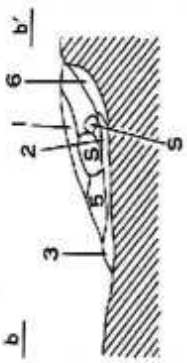
鹿角市文化財調査資料　22

高市向館跡発掘調査報告書

1982－3

秋田県鹿角市教育委員会

高市向館跡　正誤表

ページ	行	誤 → 正
挿図目次	第 12 図	第10号竪穴遺構実測図 → 第10号住居跡および
1ページ	9 行 目	乳井館 → 乳牛館
3ページ	No. 74	乳井 → 乳牛
5ページ	17 行 目	天台院 → 天台宗
13ページ	カマド注記 2層	岩化物 → 炭化物
48ページ	カマド注記 2層	(5YR) → (5YR5/1)
50ページ	第 35 図	カマド断面図 層序番号漏れ 
55ページ	9 行 目	(第 図6) → (第38図6)
64ページ	16 行 目	第Ⅳ属 → 第Ⅳ層
74ページ	31 行 目	図版 → 削除
80ページ	18 行 目	図版 → 図版16
	22 行 目	図版 → 図版16
88ページ	12 行 目	竪穴住居跡27棟地 → 竪穴住居跡27棟他

序

高市向館遺跡は，米代川右岸の舌状台地に位置する中世の館でありますが，学校建築にともない，その一部が消失するおそれが生じました。このため，発掘調査を実施し，記録保存する事となったものです。

この度，調査されたV郭からは古代から中世に至る多数の遺構が検出されました。本書が，いささかでも文化財保護並びに研究の一助となれば幸いです。

最後に，調査について御指導・御協力いただいた関係各位に対し心から感謝申し上げます。

昭和57年３月

鹿角市教育委員会

教育長　柳　沢　源　一

例　　言

1．本報告書は，鹿角市花輪字高市向に所在する高市向館遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書の報筆は各調査員，補助員の分担により，文責は各々の文末に明記してある。

3．本報告書の文中，用語の主たるものは統一するように努めたが数次にわたり使用されるものは簡略されている場合もある。なお挿図，表等で下記のような記号を用いた。

ＳＩ……竪穴住居跡　　ＴＰ……溝状土壙
ＳＫ……土壙　　Ｐ……柱穴・ピット
ＳＴ……竪穴遺構　　Ｓ……石器・石製品
ＳＤ……溝状遺構　　Ｆ……金属製品

4．本報告書に使用した挿図のスケールについては，各々に示している。なお写真図版は任意の縮尺としている。

5．挿図中のスクリーントーンは次のように使いわけた。

……焼土範囲　　……地山

6．土層および出土遺物の色調記載には，農林省農林水産技術会議事務局監修財団法人日本色彩研究所　色票監修「新版　標準土色帖」を使用した。

7．発掘調査・報告書作成にあたっては，下記の方々から御指導，御助言をいただいた。（敬称略）

岩見誠夫，桜田　隆，小玉　準，橋本高史，小林　克（秋田県教育委員会）　磯村朝次郎（秋田県立博物館）

本　文　目　次

序
例　言
本文目次
挿図目次
表　目次

第Ⅰ章　遺跡の環境 …… 1
　1．遺跡の位置と立地 …… 1
　2．歴史的背景 …… 4
　3．遺跡の層位 …… 6

第Ⅱ章　調査の概要 …… 7
　1．調査に至るまでの経過 …… 7
　2．調査要項 …… 7
　3．調査の方法 …… 8
　4．調査経過 …… 9

第Ⅲ章　検出遺構と出土遺物 …… 11
　1．縄文時代の遺構とその出土遺物 …… 11
　2．平安時代の遺構とその出土遺物 …… 12
　3．古代・中世の遺構とその出土遺物 …… 57
　4．遺構外出土遺物 …… 80

第Ⅳ章　小結 …… 83

第Ⅴ章　調査のまとめ …… 88

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図 …… 1
第２図　高市向館と調査区 …… 6
第３図　基本層位 …… 6
第４図　グリッドおよび遺構配置図 …… 10
第５図　第１号竪穴住居跡およびカマド実測図 …… 13
第６図　第２号竪穴住居跡およびカマド実測図 …… 14
第７図　第２号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 15
第８図　第３号竪穴住居跡およびカマド実測図 …… 16
第９図　第４号竪穴住居跡およびカマド実測図 …… 18
第10図　第５・６竪穴住居跡およびカマド実測図 …… 20
第11図　第９号竪穴住居跡および第１・13号竪穴遺構実測図 …… 22
第12図　第10号竪穴遺構実測図第７・21号竪穴遺構実測図 …… 23
第13図　第10号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 24
第14図　第12号竪穴住居跡およびカマド実測図 …… 25
第15図　第13号竪穴住居跡実測図 …… 27
第16図　第14号竪穴住居跡およびカマド第16・20号竪穴遺構実測図 …… 28
第17図　第15号竪穴住居跡実測図 …… 30
第18図　第15号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 31
第19図　第16号竪穴住居跡実測図 …… 32
第20図　第17号竪穴住居跡およびカマド実測図 …… 33
第21図　第17号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 34
第22図　第18号竪穴住居跡およびカマド実測図 …… 35
第23図　第19号竪穴住居跡およびカマド実測図 …… 37
第24図　第21号竪穴住居跡および第11・12号竪穴遺構，第11号竪穴遺構炉実測図 …… 38
第25図　第21号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 39
第26図　第22号竪穴住居跡およびカマド実測図 …… 40
第27図　第23号竪穴住居跡実測図 …… 42
第28図　第23号竪穴住居出土遺物実測図 …… 42
第29図　第24号竪穴住居跡実測図 …… 43
第30図　第25号竪穴住居跡実測図 …… 45
第31図　第26号竪穴住居跡およびカマド実測図 …… 46
第32図　第27号竪穴住居跡およびカマド実測図 …… 48
第33図　第28号竪穴住居跡および第２号溝状土壙実測図 …… 49

第34図　第28号竪穴住居跡
出土遺物実測図……50
第35図　第29号竪穴住居跡および
カマド実測図……50
第36図　第30号竪穴住居跡実測図……51
第37図　第31号竪穴住居跡および
カマド実測図……53
第38図　第31号竪穴住居跡
出土遺物実測図……54
第39図　第１号土壙実測図　……55
第40図　第２・３号土壙実測図　……56
第41図　第１号竪穴遺構出土遺物実測図
……58
第42図　第２号竪穴遺構および出土遺物
と第１号土壙実測図……58
第43図　第３号竪穴遺構実測図　……60
第44図　第４号竪穴遺構実測図　……61
第45図　第５号竪穴遺構および
出土遺物実測図……62
第46図　第６号竪穴遺物実測図　……63
第47図　第７号竪穴遺構および
出土遺物実測図……65
第48図　第８号竪穴遺構実測図　……66
第49図　第９号竪穴遺構実測図　……67
第50図　第10号竪穴遺構実測図　……68
第51図　第11号竪穴遺構出土遺物実測図
……70
第52図　第14号竪穴遺構実測図　……72
第53図　第15号竪穴遺構実測図　……73
第54図　第17号竪穴遺構実測図　……75
第55図　第19号竪穴遺構実測図　……77
第56図　第18・22号竪穴遺構実測図
……79
第57図　第22号竪穴遺構出土遺物実測図
……80
第58図　遺構外出土遺物実測図1……81
第59図　遺構外出土遺物実測図2……82

表　目　次

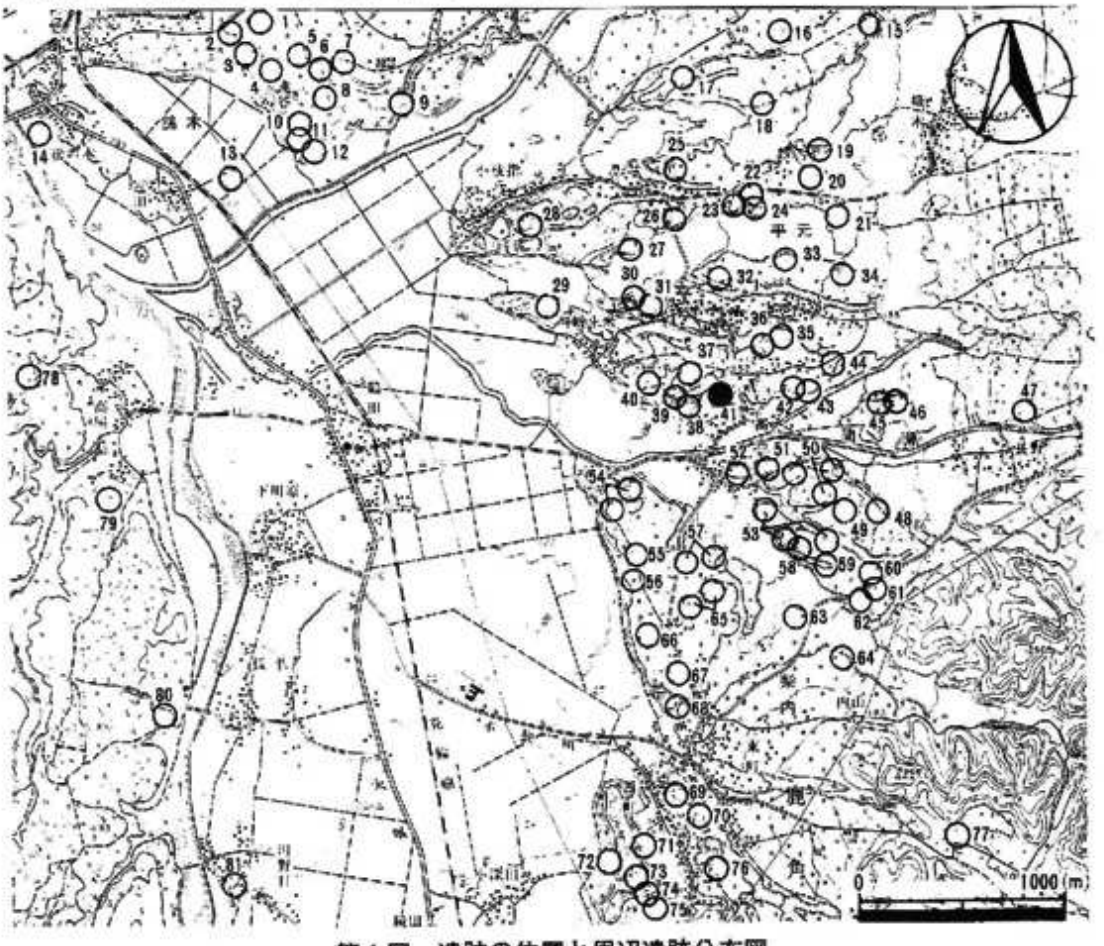
第１表　周辺の遺跡一覧表　……２
第２表　浮石粒の混入，堆積別一覧表
……84

第Ⅰ章　遺跡の環境

1．遺跡の位置と立地　　第1・2図

鹿角盆地を北流する米代川右岸には，奥羽山派の西麓から半島状にのびた舌状台地が数多く発達している。これらの台地先端部には自然地形を巧みに利用した館が構築されているが，高市向館もその一つである。鹿角市内にはいわゆる鹿角四十二館といわれる中世の館を含め，50ヵ所以上の館跡が確認されているが，当該地域は館跡の密集する地域として注目される。豊真木沢川から不動川までのわずか3.55kmの範囲だけでも小枝指館，小平館，新斗米館，高市向館，高市館，万谷野館があり，不動川以南は柴内館，乳井館と続く。

高市向館は，西流する間瀬川の北岸台地に位置する。国鉄花輪線柴平駅の東方1.6kmの距離である。館は標高150～152mの西方にのびる台地を空堀により区切った多郭連続式で，台地先端から本発掘郭(Ⅴ郭)まで5個の郭状地形が並んでいる。またⅣ郭の南西には2条の空堀と土塁状地形により区切られた丘状地形もみられる。県道大湯一花輪線の東側にあたる現花輪二中敷



第1図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図

地内校舎南東部にも一部沢状地形がみられ，高市向館の範囲をここまでとする見方もあるが，詳細は不明である。

高市向館の北西には新斗米館が近接し，南東には高市集落を経て高市館がある。また南西側には間瀬川を挟んで万谷野館が対峙している。

発掘対象となったⅤ郭は不整形を呈し，その規模は南北115.0m，東西187.5mで，５郭中最も大きい。Ⅳ郭とは空堀により区切られ，東方の台地とは現在県道により分離されているが，当時はやはり空堀により区切られていたものと考えられる。郭南側は急傾斜をなし，郭下宅地との比高は約22mである。しかし，北側は台地先端部で深かった沢（水田・湿地）も浅くなり，比高は４m程度である。

郭上面はほぼ平坦で，現在まで畑地，果樹園（りんご）として利用されていた。

（秋元信夫）

第１表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	遺跡の種類	時代・時期	遺構・遺物	備考
1	物見坂Ⅳ	十和田錦木字物見坂12	遺物包含地	古代（奈良～平安）		
2	物見坂Ⅲ	十和田錦木字物見坂５	遺物包含地	縄文後期 古代（奈良～平安）		
3	物見坂Ⅱ	十和田錦木字物見坂26・31・32， 字泉森３・４・１	遺物包含地	縄文晩期 古代（奈良～平安）		
4	泉森Ⅰ	十和田錦木字泉森５－７２・ ７－３・14・15	遺物包含地	古代（奈良～平安）		
5	物見坂Ⅰ	十和田錦木字物見坂20・21・22	遺物包含地	古代（奈良～平安）		
6	泉森Ⅱ	十和田錦木字泉森９・10・11	遺物包含地	古代・古墳		
7	鹿角沢Ⅲ	十和田錦木字桜草坂30・31 花輪字鹿角坂60・61	遺物包含地	古代（奈良～平安）		
8	桜草坂Ⅱ	十和田錦木字桜草坂20・21－１・ 21－２	遺物包含地	弥生，古代 （奈良～平安）		
9	栄花	花輪字栄花17	遺物包含地			
10	曲谷地Ｂ	十和田字曲谷地	古墳			
11	曲谷地Ａ	十和田字曲谷地	古墳			
12	桜草坂	十和田錦木字桜草坂	古墳		曲玉，ガラス玉，金具，武刀，土師器，須恵器	
13	沖田	十和田錦木字沖田面	遺物包含地			
14	宗田	十和田錦木字宗田	遺物包含地			
15	小坂野Ⅱ	花輪字小坂野３－53・54・55	遺物包含地	縄文，古代 （奈良～平安）		
16	土水	花輪字土水20・17・16・21・ ７－２・４・７－１	遺物包含地	古代（奈良～平安）		
17	一ツ森	花輪字一ツ森10－１・10－２ 10－３	遺物包含地	古代（奈良～平安）		
18	一ツ森	花輪字小坂野３～86	遺物包含地	古代（奈良～平安）		
19	谷地中	花輪字谷地中60の３	遺物包含地		縄文土器片（中期），土師器，須恵器	
20	山道	花輪字山道６の２	遺物包含地		土師片	
21	源田平Ⅲ	花輪字源田平44・45・47・48	遺物包含地	古代（奈良～平安）		
22	源田平Ⅱ	花輪字源田平29・30・31	遺物包含地	古代（奈良～平安）		
23	源田平Ⅰ	花輪字源田平27・28	遺物包含地	古代（奈良～平安）		
24	恵田平	花輪字源田平35	遺物包含地	縄文文期	竪穴住居跡	鹿角市教育委員会「鳥野遺跡発掘調査報告書」1978年３月
25	鳥野	花輪字鳥野83			土師器片，竪穴住居跡	鹿角市教育委員会「鳥野遺跡発掘調査報告書」1978年３月
26	平元館Ⅰ	花輪字恵田平６	遺物包含地		縄文土器片（後期）大洞式	

27	四ツ谷	花輪字四ツ谷28－1～2	遺物包含地	古代（古墳～平安）江戸		
28	小枝指館	花輪字古館，神館，八幡館	館跡		縄文土器片（中期）円筒上層A・B式，古銭，木器，鉄片，陶器片	江上波夫編著 東北地方における墓原地の研究 東京大学出版会 1967年
29	新斗米館	花輪字新斗米36	館跡	縄文時代（前期）		鹿角市教育委員会 『新斗米館跡Ⅱ次発掘調査報告書』 1981年3月
30	小平下館Ⅰ	花輪字館40	館跡	古墳期～古代（平安）		
31	小平下館Ⅱ	花輪字館34・35	館跡	古墳期～古代（平安）		
32	小平八幡平Ⅰ	花輪字八幡平4の7・4の9・5・10の3				
33	八幡平	花輪字八幡平36・37	遺物包含地	縄文～弥生		
34	上寺野	花輪字上寺野51－2・52・53	遺物包含地	縄文，古代		
35	平元向平Ⅰ	花輪字平元向平18－4・8・9	遺物包含地	古墳期～古代（平安）		
36	平元向平Ⅱ	花輪字平元向平18－1・19－2・5	遺物包含地	古墳期～古代（平安）		
37	大切沢	花輪字大切沢28・29	遺物包含地	縄文時代		
38	高市向Ⅰ	花輪字高市向119	館跡	縄文時代～古代（平安）		
39	高市向Ⅱ	花輪字高市向115・117	館跡	縄文～古代（平安）		
40	高市向Ⅲ	花輪字高市向129－35	館跡	古墳期～古代（平安）		
41	小平館	花輪字高市向6－1～129	館跡	中世		高市向館遺跡
42	高市	花輪字高市5－8・6－2・17－1－2	遺物包含地	縄文時代古墳期～中世		
43	高市向Ⅳ	花輪字高市向5－1～2・8・9	遺物包含地	古墳期～中世		
44	高市向Ⅴ	花輪字高市向3－1～2	遺物包含地	縄文前期		
45	近江谷地	花輪字近江谷地85－1～384－1～2	遺物包含地	縄文時代（古墳～平安）		
46	藤谷地	花輪字藤谷地19・20・21・22・23	遺物包含地	縄文晩期古墳～古代（平安）		
47	長野	花輪字長野37－1～2	遺物包含地	縄文時代		
48	餅野Ⅱ	花輪字餅野1～41	遺物包含地	縄文時代～古代（平安）		
49	餅野Ⅰ	花輪字餅野1－47	遺物包含地	古墳期～古代（平安）		
50	高沢Ⅲ	花輪字高沢60－1，65，151	遺物包含地	古代（奈良）～中世		
51	高沢Ⅱ	花輪字高沢43，50，51，52	遺物包含地	古代（古墳～平安）		
52	高沢（高沢Ⅰ）	花輪字高沢27－2，25，26	館跡	縄文時代～古代		
53	高沢Ⅳ	花輪字高沢121，113，99	遺物包含地	縄文後期古代（奈良～鎌倉）		
54	万谷野Ⅳ	花輪字万谷野305	遺物包含地	縄文時代（晩期）		
55	万谷野Ⅰ	花輪字万谷野57	遺物包含地	縄文時代（前期～後期）		
56	万谷野Ⅱ	花輪字万谷野58，81－1，82－1	遺物包含地	縄文時代（古代～平安）		
57	万谷野Ⅴ	花輪字万谷野76－1，93－2	遺物包含地	縄文時代		
58	餅野Ⅳ	花輪字餅野1－7	遺物包含地	古代（奈良～平安）		
59	餅野Ⅲ	花輪字餅野1－31	遺物包含地	古墳期～古代（平安）		
60	餅野Ⅱ	花輪字餅野1の内	遺物包含地		縄文土器片（早期末），住居跡	
61	餅野Ⅳ	花輪字餅野1	遺物包含地		縄文土器片，土師器片，住居跡	
62	餅野Ⅱ	花輪字赤長根1－32の内	遺物包含地		土師器片，須恵器片	
63	餅野Ⅰ	花輪字長根1－32の内	遺物包含地		土師器片，須恵器片，絡絡縄文土器片	
64	平中	花輪字平中59－6	遺物包含地	縄文時代～古代（平安）		
65	観音平	花輪字観音平20－2，43，44－2	遺物包含地	古墳期～古代（平安）		
66	万谷野	花輪字万谷野37	遺物包含地		小坂X式土器片	
67	万谷野Ⅰ	花輪字万谷野90	遺物包含地	古代（奈良～平安）		
68	地蔵野	花輪字地蔵野7－13	遺物包含地	古代（奈良～南北朝）		
69	柴内本館	花輪字西町32－1	館跡	古代（奈良～南北朝）		
70	柴内南館	花輪字西町55	館跡	古代（奈良～鎌倉）		
71	万松寺Ⅱ	花輪字西町万松寺	弥生時代？			
72	西町Ⅱ	花輪字西町	遺物包含地	縄文時代？		秋田県教育委員会 東北縦貫自動車道分布調査報告書 No28遺跡
73	西町Ⅰ	花輪字西町	遺物包含地	縄文時代？		秋田県教育委員会 東北縦貫自動車道分布調査報告書 No27遺跡
74	乳井	花輪字下乳井	遺物包含地	縄文時代		秋田県教育委員会 東北縦貫自動車道分布調査報告書 No26遺跡
75	西町	花輪字西町156－1	遺物包含地		縄文土器片（晩期）	
76	深沢Ⅱ	花輪字深沢61	遺物包含地	古墳期～古代（平安）		
77	宮ノ平	花輪字宮ノ平1－31	遺物包含地	縄文後期古代（奈良～平安）		
78	高屋B	花輪字高屋	遺物包含地		縄文土器片（後期）宮戸式系，弥生式土器片，石器	
79	高屋館	花輪字館の沢12－38	館跡	中世		
80	前平	花輪字前平43－2	遺物包含地		土師器片	
81	原野Ⅱ	花輪字江野川川向1の内	遺物包含地		須恵器片	

（秋田県埋蔵文化財遺跡地名表より）

2．歴史的背景

高市向館は，東から西へ細長く舌状に延びる新斗米一向平台地の中部南縁字高市向に位置している。この館名は，発掘調査の時点で，字名をとって呼称したもので，本来はおそらく新斗米館の連続する多くの郭の一部であったろうと思われる。すなわち同じ台地上の西 600mを隔てて昭和55・56両年に亘り発掘調査された新斗米館主郭部と想定される郭があり，その間に空掘によって整然と画された５～６の郭が介在している。

この一帯は中世館跡の密集しているところで，北側に新斗米一向平台地とわずか幅30m程度の狭い小谷（水田）をへだてて小平館の連続郭があり，小平館のすぐ北に，昭和30年に東京大学東洋文化研究所によって発掘調査された小枝指館（七ツ館）が望まれる。小枝指館の東方に土師器，須恵器を伴出する古代住居跡の発見された鳥野遺跡，源田平遺跡がある。また南側は，間瀬川によって開かれた低地を隔てて高市館がある。高市向の地名もこの高市館に相対していることから起こったのであろう。さらにその南に万谷野，柴内，乳牛と中世館群が続いている周辺台地は土師器の散布地としても知られる。

新斗米館はその調査結果から，小枝指館と同じく16世紀後半まで降（くだ）る城館として確認されている。高市向館を新斗米館の連続する郭群の一画とみるとき，当然この新斗米館の年代があてはまるものと考えられる。しかし高市向館における各遺構・出土遺物の多くは，年代的に中世以前の特徴をより強く示し，かつ城館としての性格以上に日常生活の場である集落跡の色彩が濃厚である。このことから高市向館が最も盛んに利用されたのはむしろ古代であり，中世には新斗米館を居館とする豪族によって，主郭を中心とした連続郭の一画として第二次的，三次的に利用されたものと推定される。

この地域における豪族分奠の状況を伝える初見史料は，天文５年（1536）の『津軽郡中名字』である。「鹿角三百町ハ四人ノ国人也所謂奈良，成田，阿部（一本に安部），秋元四人ナリ」として鹿角四氏をあげ，さらに四氏が分れて十五の村を支配していることを述べている。高市向館の周辺にかかわる奈良氏と阿部（安保である）氏についてみると，奈良氏は「大湯・小坂・小平・小江刺（小枝指）」に分かれ，阿部（安保）氏は「大里・柴内・鼻和（花輪）」に分かれている。この時点では，また新斗米，高市などの村名はあらわれてこない。その後の村々について，近世初期成立の『鹿角由来記』から関係部分を引くと，次のようになる。

一，柴内村　　柴内弥治郎領知本名阿保知行千三百石なり

一，中柴内村　中柴内八郎領知本名阿保なり柴内弥治郎一門館有

一，高市村　　高市玄番領知本名成田館有

一，新斗米村　新斗米左近領知本名奈良館有

一，小平村　　小平彦次郎領知本名奈良也小枝指之末弟也館有

一，小枝指村　小枝差左馬領知本名奈良也館有（ママ）

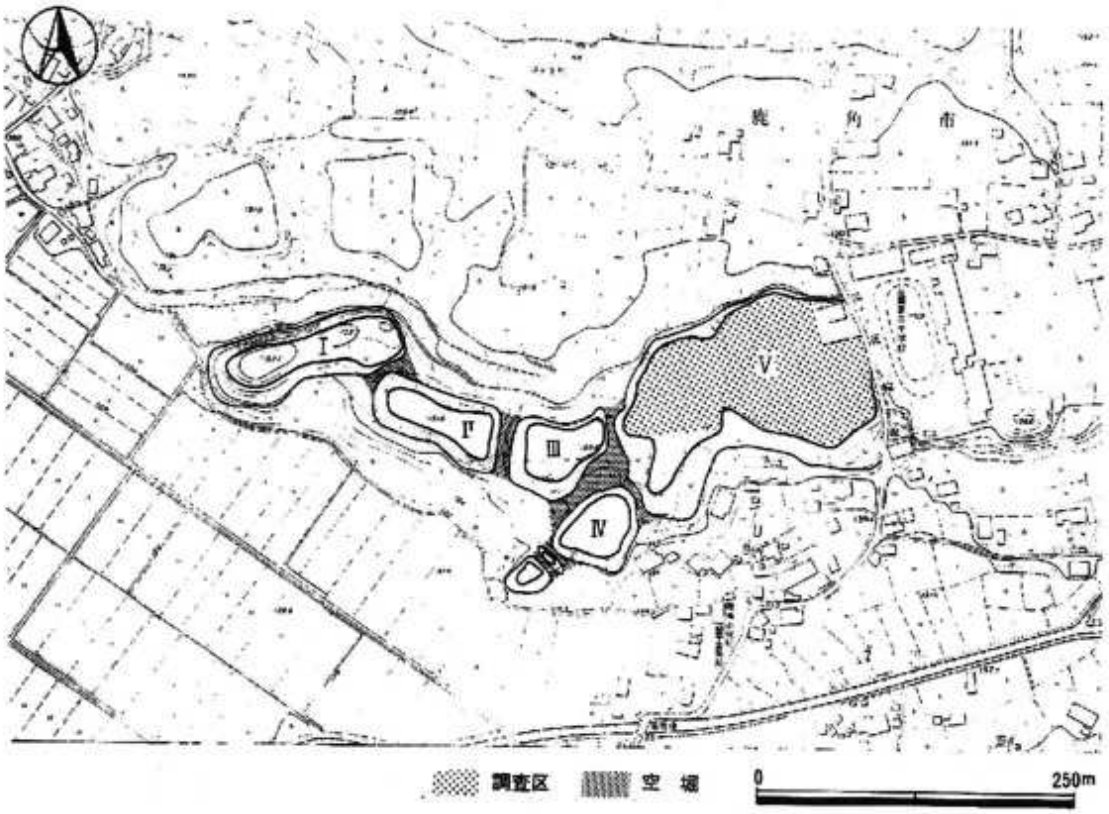
この地域における各館がいちじるしく近接している理由の一つには，例えば以上の新斗米，小平，小枝指各氏が奈良一族であるといった事情によるものであろう。もともと成田，奈良，安保三氏は同族関係にあったといわれ，一旦非常の場合には，各館が連繋して共通の敵に当たったと思われる。

新斗米一向平台地の台上に名付けられた小字名は，西から新斗米，天王平，大坊沢，高市向，向平と続く。字高市向の西に接する字大坊沢について，石川理紀之助『適産調旧蹟考』は「大坊沢，山伏の居りし処也」と記している。大坊という地名は毛馬内の月山の麓にもあり，菅江真澄『錦木』(文化４年）に「この母耶（もや）の山の麓に一位大坊の故蹟がある。大同年間に此処に住んでいたという。武田の家来に和田兼蔵といって非凡の人物がいた。蝦夷人が蜂起して押し寄せて来るとき，その打手に立ち向って負けて虜になって蝦夷の国に引かれて行き，長い年月を経てからやっとの事で危い生命を助かって津軽郡の藤崎村にのがれ，大聖院という僧侶の家に学んで修験道を修行して藤崎坊と称していたが，ふたたび狭布郡に来て毛馬内の武田氏の命にしたがって大坊一位の家を興しこれを継ぎ(略)」（伊藤裕，現代語訳『菅江真澄遊覧記』）と記され，その子孫が不動院祐歓で，今も大坊館という字名を残している。字高市向に北接して字向平があり，小谷を隔てて字元村に続く。「小平の元村は上ハ町という処にありと云」(前掲『旧蹟考』)われ，その元村の黒瀧山文珠院の縁記に「天台院羽黒山霊林院末寺，縁記ニ建久八年当寺開山笈指坊清歓と申す者毛馬内不動院先祖大坊一位之弟子ニ御座候而代々号笈指坊連綿仕来罷在候処慶長九年八月羽州羽黒山へ入峰総目仕文珠院寛光ト補仕該社別当職並ニ祈祷法式相勤罷在候(略)」と書上げられている。字大坊沢の地名は，この大坊一位の弟子文珠院との関係から起こったものかも知れない。

また，字大坊沢の北に接して字天王台がある。天王台は，天王社，八坂神社を祀ることから名づけられた。元は十一面観世音菩薩を本尊とし，文化元年円福寺十一世の創建した観音堂であったと伝えている。この天王社の北，小谷を挟んで50mほどの所に曹洞宗永久山円福寺が建つ。大湯大円寺末で，永禄元年の創立，正安三年の銘のある銅仏阿弥陀像を伝えている。

新斗米館および新斗米氏については，第Ⅱ次発掘調査報告書『新斗米館跡』のうち「第Ⅱ章新斗米館の歴史的環境」を参照されたい。

（安村二郎）

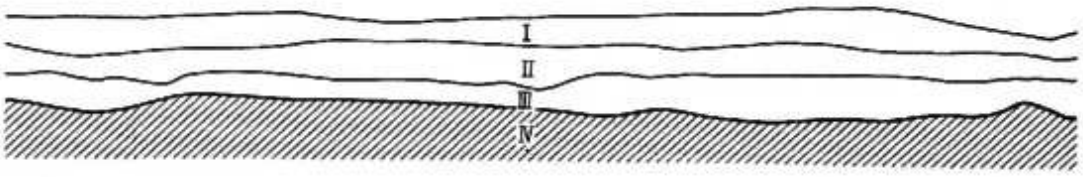


第２図　高市向館と調査区

３．遺跡の層位　　第３図

このたびの調査は種々の事情より，Ⅴ郭上面に限られた。郭上面は，ほぼ平坦で，地表の標高は概ね 152mである。地表から地山（下位火山灰層）までの深さは46cm程度であり，基本的にⅠ～Ⅲ層に分層できる。

第Ⅰ層は耕作土層であり，地表から約20cmの範囲である。暗褐色土で，小礫を多量混入している。



Ⅰ層　暗褐色土（Hue10YR3/3　　耕作土，しまりなし，粘性若干有，小礫多量混入
Ⅱ層　黒　色　土（Hue10YR2/1　　ややしまり有，粘性なし
Ⅲ層　にぶい黄橙色土（Hue10YR5/4　　ローム粒多量混入
Ⅳ層　明黄褐色土（Hue10YR6/6）　　下位火山灰，地山（ローム層）

0　2m

第３図　基 本 層 位

第Ⅱ層は耕作土層下から地山直上のにぶい黄褐色土層（Ⅲ層）までの黒色を呈する土層である。鹿角地方では一般にこの黒色土層中に大湯浮石層（上位火山灰層）が存在するが，本遺跡では四地に部分的にみられるにすぎない。

第Ⅲ層は地山（下位火山灰層）直上の層で，にぶい黄褐色を呈し，ローム粒（下位火山灰）を多量混入している。

なお第Ⅲ層以下は鳥越軽石質火山灰層であり，その上部は褐色～黄褐色の火山灰（いわゆるローム）であり，下部は灰白色～白色の軽石・火山礫を多量に混入した層である。

（秋元信夫）

第Ⅱ章　調査の概要

1．調査に至るまでの経過

花輪第二中学校は，昭和24年に建築された木造校舎で，老朽化が著しく，改築は地元住民の強い要望であった。昭和53年12月，市教育委員会は同じく老朽化の進んでいる花輪第一中学校を含め，両校統合による改築と単独による改築案を市当局に提案した。数回にわたる協議の結果，名々の学校に適した面積を確保し，単独改築することとなり，以後その準備が進められた。新花輪第二中学校の建築位置としては，学区の問題，及び現在地の有効利用により，現校舎に隣接する場所に限定された。現校舎付近の地形及び現況より，最終候補地としては，県道をはさんだ西側の台地が選択され，土地取得の交渉が進められた。昭和56年３月には21,000㎡の用地の取得が完了し，同地への学校建築計画は大幅に前進した。

一方，この地域は中世の館（市遺跡登録No. 400小平館となっているが，その後の調査で，小平館は新斗米館北側に位置する館であり，本館は名称不明の館であることが判明し，便宜的に位置する字名をとって高市向館とした）の一郭であり，埋蔵文化財保護の立場から学校用地として不適であることが，研究者や文化財保護団体等から指摘された。市教育委員会では種々の事情から，この地域が学校建築場所として最適であることを主張，発掘調査による記録保存という形で遺跡を残すことで協議が成立した。

当初，昭和56年度に発掘調査及び土地造成をし，昭和57年度学校建築という予定であったが学校建築補助金の関係で，昭和56年度中で調査から学校建築までという発掘調査にとっては非常にきびしい立場に追いこまれた。

このため，４月早々から発掘調査の準備が進められ，５月初旬より本格的な調査が開始された。

2．調査要項

1．遺跡名　　高市向館（鹿角市埋蔵文化財遺跡地名表No. 400小平館に相当）

2．所在地　　鹿角市花輪字高市向6－1～129

3．調査期間　　昭和56年5月6日～7月11日

4．発掘調査対象面積　11,000㎡

5．発掘調査面積　　7,600㎡

6．調査主体者　　鹿角市教育委員会

7．調査担当者　　秋元信夫（鹿角市教育委員会　社会教育課）

8．調査参加者

調査指導員　　富樫泰時（秋田県教育庁文化課　学芸主事）

調　査　員　　安村二郎（鹿角市立十和田中学校　校長）

鎌田健一（秋田県立十和田高校　教諭）

大里勝蔵（　　〃　　）

調査補助員　　佐藤　樹

菊池　明

調査協力員　　倍賞昌雄

豊田　巌

十和田高校社会科同好会

作　業　員　　浅水サダ，浅水トメ，倍賞ミキ，小館チエ，兎沢ハギ

倍賞コヨ，倍賞栄子，小鳴テイ，小館セツ子，古館ナカ

倍賞忠治，倍賞忠次，米田良子，金沢フヂエ，浅水八重

金沢実津子，佐々木まさ子，兎沢キヨエ，黒沢サヨ，斎

藤テル，倉岡ミキ，豊田喜姫，奈良友子，児玉イソ

9．社会教育課

課　　長　　阿部節雄（本務　教育次長）

課長補佐　　安田孝司

文化財係長　　柳沢悦郎（庶務担当）

主　　事　　秋元信夫（調査担当）

臨　　職　　目時キミ子

10．調査協力機関　　秋田県教育委員会，鹿角市農林課，鹿角市建設課

3．調査の方法

調査対象区は11,000㎡と調査体制・期間のわりに広く，調査方法には特段の考慮を必要とした。このため，まず遺跡の概要を把握するため試堀調査を実施し，その結果に基づいて，最も

適した調査方法を選択することとした。試堀調査は，各地点の層の深さ，遺物の出土状況，遺物の有無の確認を主目的に対象区に十字に設定されたトレンチ内において実施された。

この結果，遺跡の基本層序は３層からなり，Ⅱ層までは遺物の出土がほとんどないこと，遺構はほぼ全域に広がることが予想された。このため，全域の遺構の検出に主力を注ぐこととし，表土除去にはバックホーを使用することとした。

グリッドの設定には地形を考慮し，N－4°－Eを基準線とし，10m四方を１単位とした。さらに南北方向をアルファベット，東西方向を算用数字とし，アルファベットと算用数字を組み合わせて名々のグリッドを呼ぶこととした。

遺物の取り上げは，遺構外のものは層ごと・グリッド一括で取り上げ，遺構内のものは１点づつの図化・レベル実測の後取り上げた。

遺構等の実測は簡易遣り方測量を用い，遺構は1/20，炉・カマド等は1/10の縮尺で図化した。

4．調査経過

先に述べたとおり，調査体制・期間等発掘調査としては，きわめてきびしい状況であった。このため，有効な調査方法を強いられた。４月早々から発掘調査の準備が進められ，４月末まで調査計画，機材・用具の準備，作業員の手配等がなされた。

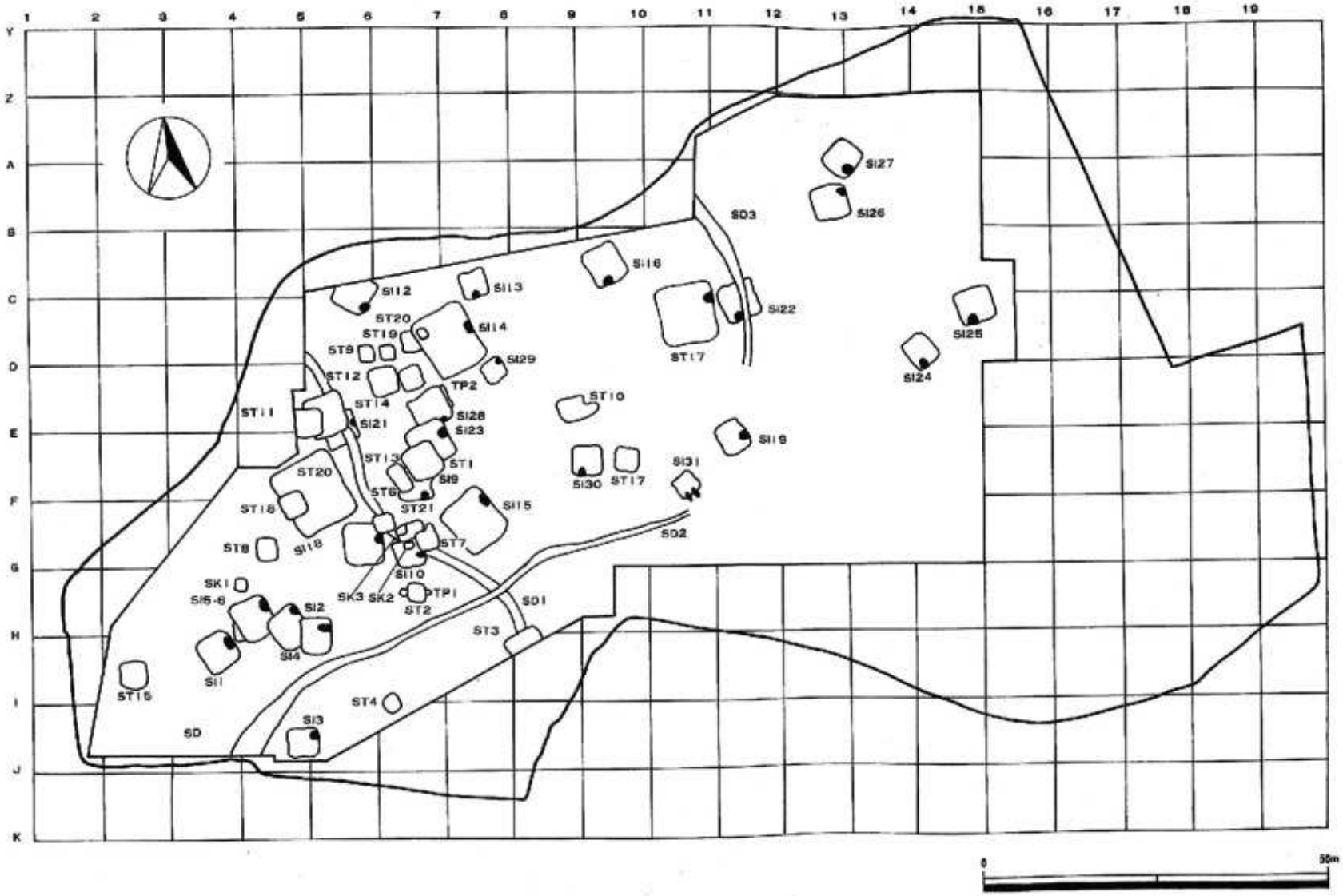
試掘調査は，連休あけの５月６日から開始され，11日まで続けられた。発掘区に「＋」字に設定されたトレンチのほぼ全域から遺構が検出され，調査は全域について実施することとし，また，遺物の出土の少ないⅠ～Ⅱ層はバックホーで除去することとした。

調査は，土の搬出等の関係で西側から進められた。バックホーの後を追うように粗掘，遺構確認という作業が続けられ，５月18日より西端の遺構から精査にかかった。５月末日までに，対象区の½の表土除去が終了し，17軒の竪穴住居跡，20軒の竪穴遺構等が確認された。６月中旬には，対象区の60％にあたる 6,600㎡ の範囲で，23軒の竪穴住居跡，22軒の竪穴遺構，３条の溝が確認された。

６月８日～11日及び６月25日～27日には，花輪第二中学生による発掘調査（体験学習）が実施され，埋蔵文化財に対する意識高揚に一役をかった。

当初，調査期間は６月30日までであったが，６月末になっても調査終了のめどがたたず，10日間の調査延長となった。

７月には雨天候にもかかわらず，終盤の調査に追われ，７月11日，遺跡近景，全体写真の撮影で一応の調査の終了を向えることとなった。発掘調査 7,600㎡ で，対象面積の70％であった。７月13日，機材等の搬出をおこない，最終的に遺跡を後にした。　（秋元信夫）



第4図　グリッドおよび遺構配置図

第Ⅲ章　検出遺構と出土遺物

発掘調査区内において検出された遺構は縄文時代の溝状土壙２基，古代の竪穴住居跡27棟，土壙３基，溝状遺構３条，中世の竪穴遺構22棟の計55遺構である。

本書では生活施設（カマド等）の存在するものを竪穴住居跡と，形態は方形を呈するが生活施設等が存在しないもの，柱穴を有するものさらに張り出し施設をもつものを一括して竪穴遺構として述べる。また，これまでＴピット，陥し穴状遺構などと呼ばれてきたものを形態的な名称として溝状土壙とした。

これら検出された遺構は第４図のような配置であり，郭を南北に二分するように走る溝状遺構を中心として多くの遺構が重複し，構築されている。

１．縄文時代の遺構とその出土遺物

(1) 溝状土壙

第１号溝状土壙（ＴＰ１）　第42図　図版11

〈遺構の位置と確認〉　調査区南西寄りに位置し，Ｇ－６グリッド第Ⅳ層地山上面および第２号竪穴遺構貼床除去後に確認した。

〈形態〉　長軸3.8m×短軸0.4m，深さ1.14mの溝状を呈する。横断面形は「Ｖ」字状を示し，長軸方向はＮ－85°－Ｗを指す。

〈覆土〉　７層に分層され，自然堆積を示していた。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

第２号溝状土壙（ＴＰ２）　第33図　図版14

〈遺構の位置と確認〉　調査区西側のＤ－６・７グリッドに位置する。第28号竪穴遺構と重複しており，本遺構が古い。

〈形態〉　長軸2.96m×短軸0.48m，深さ0.9mの溝状を呈する。横断面形は「Ｕ」字状，縦断面形は末広がりに掘り込まれている。長軸方向はＮ－20°－Ｗを指す。

〈覆土〉　自然堆積を示していた。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

2．平安時代の遺構とその出土遺物

(1) 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡　（SI1）　第5図　図版4

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄り，G－3，H－3グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸6.27m×短軸5.24mの方形を呈する。占地面積は23.9㎡，主軸方向はN－67°－Eを示す。

〈壁・床〉　東壁20cm，西壁26cm，南壁24cm，北壁26cmを測り，各壁とも床よりほぼ垂直に立ち上がる。床はわずかな凹凸を示し，堅くしまっている。

〈カマド〉　東壁中央に位置する。袖部は自然石を芯材としたものと思われ，付近に火熱を受けた石が存在した。煙道部は壁とともに立ち上がる。

〈付属施設〉　カマド部分を除き，幅30～35cm，深さ22cm程の壁溝が一巡する。

〈柱穴・ピット〉　遺構内に16個のピットを検出した。壁隅においてピットを検出できなかったが，P1，11，19が柱穴と思われる。

第1号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規模	30×38	28×14	13×6	24×22	18×16	11×6	20×12	16×12	16×12	30×13	23×21	20×18
深さ	35	7	13	19	16	15.1	12	8	9	16	21	17
Pit No.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
規模	23×21	20×18	23×30	27×10	22×19	12×12	24×21	18×18	16×11	17×16	16×12	19×16
深さ	21	17	37	6	24	9	33	6.5	6	11	10	27
Pit No.	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
規模	24×19	18×17	25×22	16×15	20×18	19×17	18×17	19×15				
深さ	11	8	25.2	12.4	20	11	19	6				

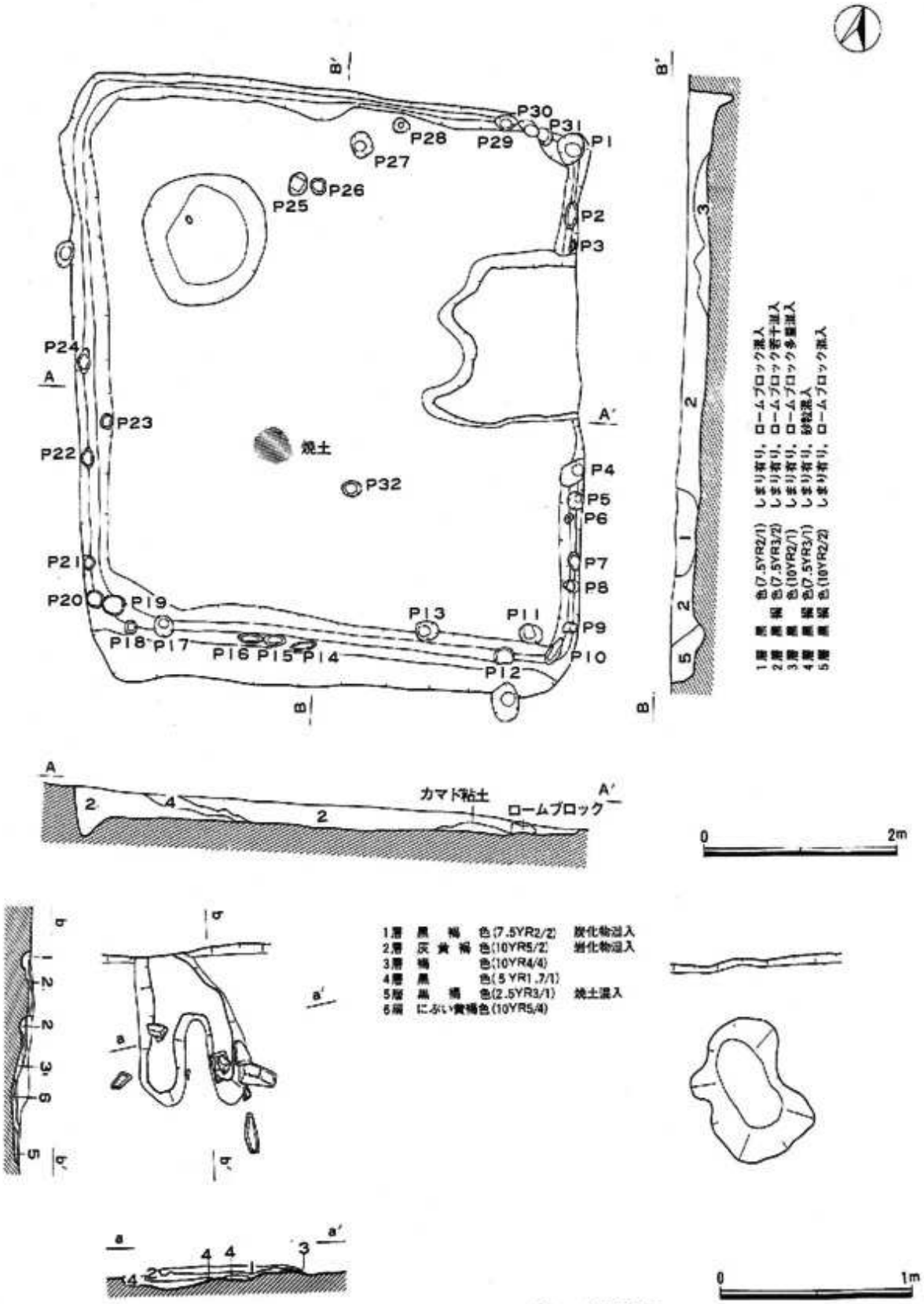
〈覆土〉　5層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　遺物は出土しなかった。

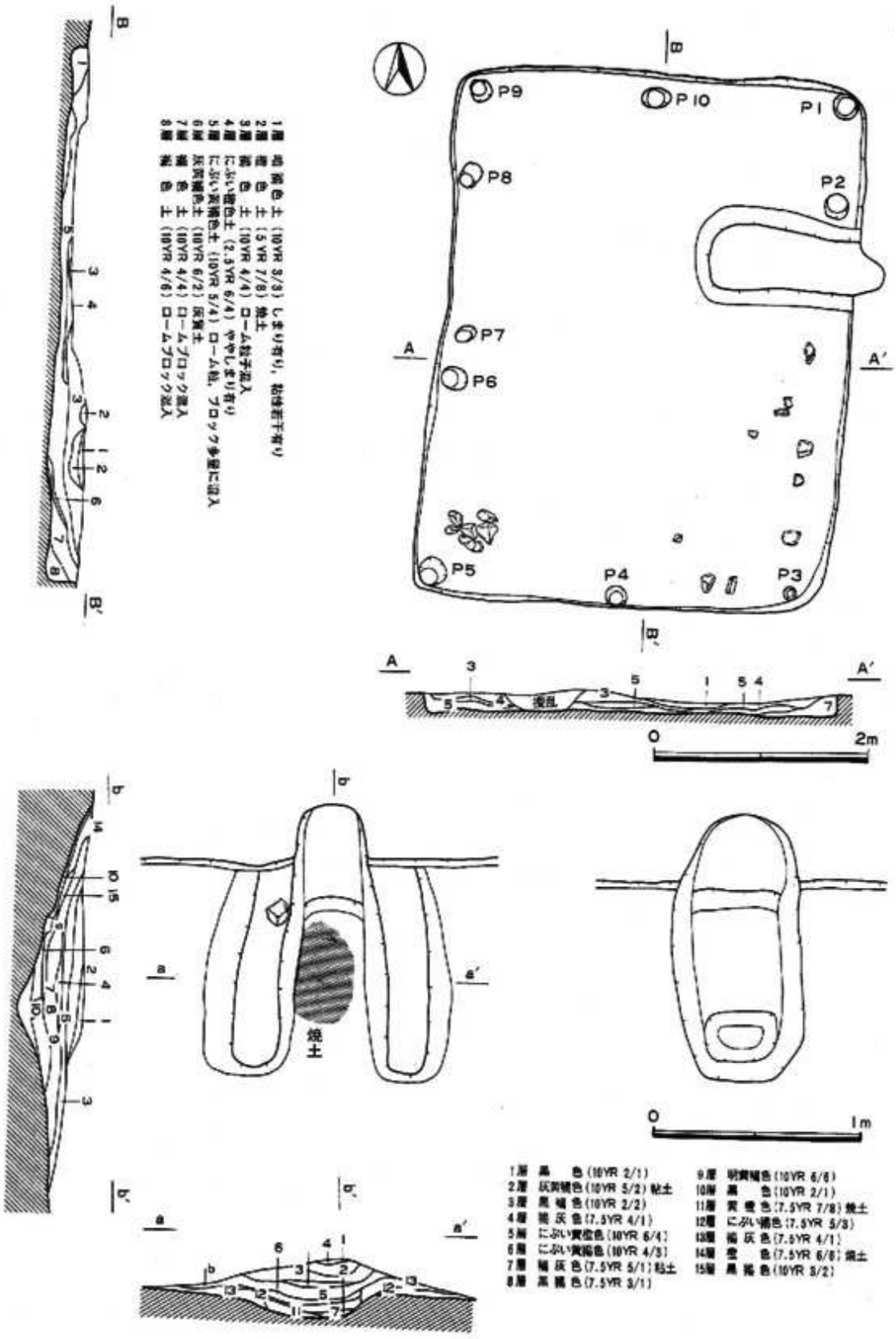
第2号竪穴住居跡　（SI2）　第6図　図版4

〈遺構の位置と確認〉　調査区南西側，G－4・5，H－4・5グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面において黒色土または黒褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸5.02m×短軸3.90mの方形を呈する。占地面積は19.6㎡，主軸方向はN－4°－Eを示す。



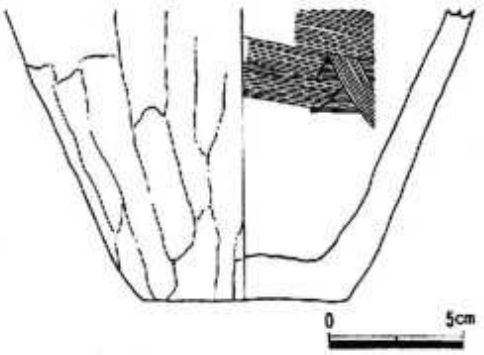
第5図　第1号竪穴住居跡およびカマド実測図



第6図　第2号竪穴住居跡およびカマド実測図

〈壁・床〉　各壁とも床よりほぼ垂直に立ち上がり，東壁15cm，西壁17cm，南壁29cm，北壁13cmを測る。床はゆるやかな凹凸を示し，堅くしまっている。

〈カマド〉　東壁北寄りに存在する。袖部は芯材として自然石を使用したものと考えられカマド付近に火熱を受けた自然石がある。煙道部は燃焼部より一段高まり，その後ゆるやかに立ち上がるものである。



第７図　第２号竪穴住居跡出土遺物実測図

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　壁際に16個のピットが存在する。ピットは相対するものであるが，Ｐ７・８に対しては存在しない。

第２号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	23×23	24×22	13×12	20×16	27×26	23×21	20×13	21×18	21×20	26×20
深　さ	31	37	26	43	35	31	53	21	25	20

〈覆土〉　８層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　遺構・カマド内より多くの土師器片が出土した。器形は甕形土器と思われる。口縁部は，ゆるやかに外反するものと，ほぼ垂直に立ち上がるものが存在する。

第７図－１，口縁部から胴部中半を欠損するもので，胴部中半にはヘラナデ，下半にはヘラキリ，内面には刷毛目，底面はヘラナデ調整が施される。

第３号竪穴住居跡　（Ｓ１３）　第８図　図版４

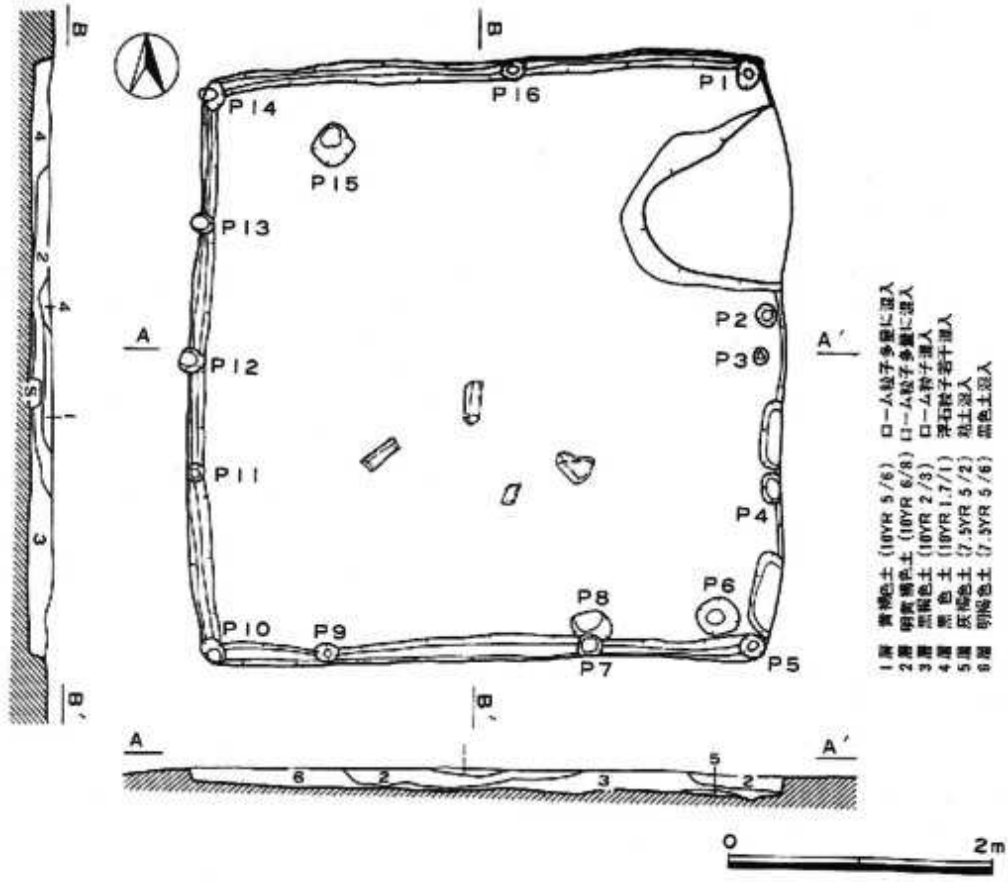
〈遺構の位置と確認〉　調査区の南端，Ｉ－４・５グリッドに位置し，第Ⅳ層地山上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。

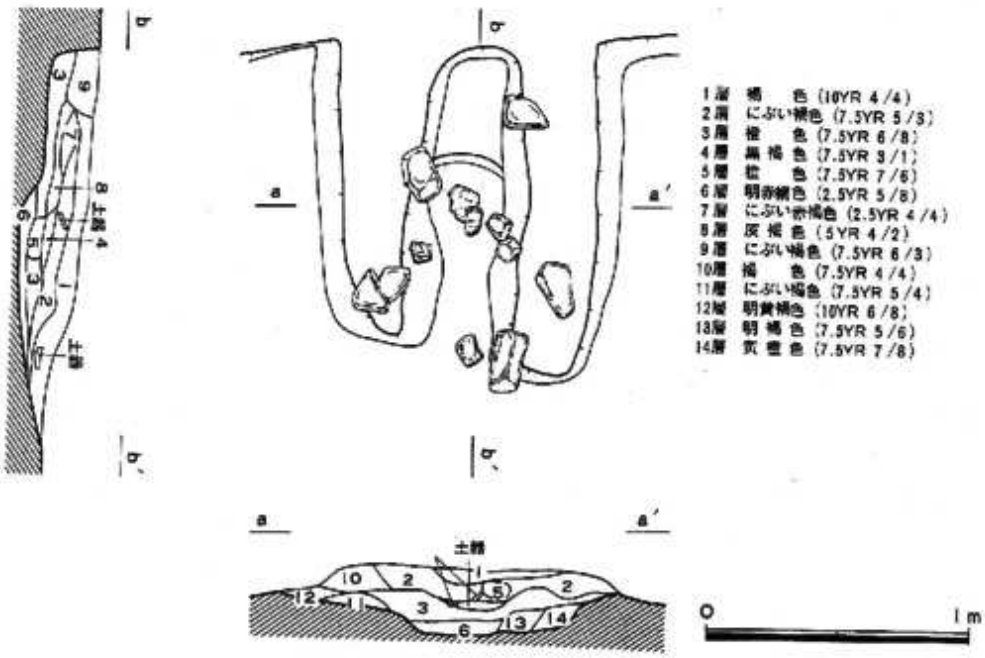
〈形態〉　長軸2.53m×短軸2.50mの方形を呈する。占地面積は6.3㎡で，主軸方向はＮ－５°－Ｗを示す。

〈壁・床〉　各壁とも床よりほぼ垂直に立ち上がり，東壁14cm，西壁11cm，南壁18cm，北壁13cmを測る。床はゆるやかな凹凸を示し，堅くしまっている。床中央部には砂質土の貼床が施されていた。

〈カマド〉　東壁北寄りに位置する。袖部は自然石を芯材としたものである。燃焼部は掘りくぼめられ，煙道部は壁とともに立ち上がる。

〈付属施設〉　東壁を除き，幅15cm程，深さ10cm程の壁溝が存在する。





第8図　第3号竪穴住居跡およびカマド実測図

〈柱穴・ピット〉　遺構内に16個のピットが存在する。壁溝内に存在するＰ１，２，４，５，７，９，10～14，16が柱穴と考えられ，特にＰ１，５，10，14は他のものより深く主柱穴と考えられる。

第３号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	22×21	18×17	12×10	22×14	18×17	30×29	18×18	28×22	19×16	22×16	13×13	20×19
深　さ	44	9	8	11	48	10	31	10	24	50	38	22
Pit No.	13	14	15	16								
規　模	17×16	19×16	29×28	19×14								
深　さ	34	49	9	35								

〈覆土〉　６層に分層された，１・２層は地山土が多量に混入しており人為堆積と思われる。

〈出土遺物〉　住居内からの遺物出土量は少なく，しかも小破片である。推定される器形はすべて甕形土器である。口縁部はやや強く外反するもので，胴部には粗いヘラケズリが施されて，輪積み痕が観察される。

第４号竪穴住居跡　（ＳＩ４）

〈遺構の位置と確認〉　調査区西側，Ｇ・Ｈ－４グリッドに位置し，第Ⅳ層地山上面において確認した。第２，４，５号竪穴住居跡と重複しており，新旧関係は第５号竪穴住居跡⟶本住居跡⟶第２号竪穴住居跡である。

〈形態〉　長軸5.74ｍ×短軸5.04ｍの方形を呈する。北西壁と南東壁隅を欠くが推定占地面積は28.9㎡で，主軸方向はＮ－61°－Ｅを示す。

〈壁・床〉　北西壁と東壁隅を欠く。地山面からの掘り込みが浅く，北東壁６cm，南西壁９cm，南東壁５cmを測る。床はわずかな凹凸を示し，堅くしまっている。

〈カマド〉　確認面からの掘り込みが浅いため，残存状態は非常に悪い。北東壁北寄りに位置する。袖部，天井部とも芯材として自然石を使用したものと考えられる。

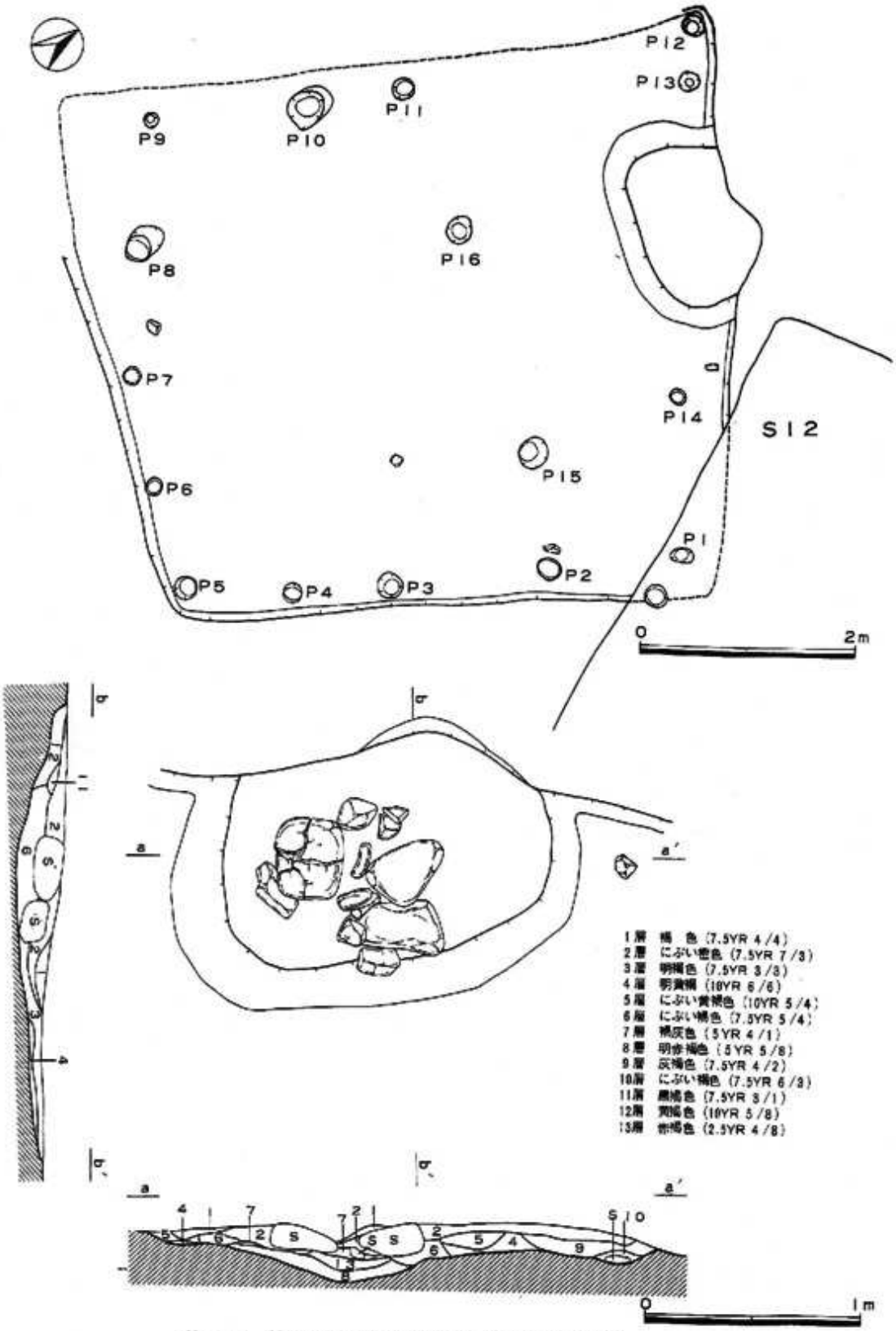
〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　壁際に14個，床に２個の計16個のピットが存在する。壁際に存在するＰ１～14が柱穴と考えられる。

第４号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	22×14	23×20	20×20	16×15	22×22	16×14	17×17	40×27	14×12	43×31	20×20	20×19
Pit No.	13	14	15	16								
規　模	18×18	16×15	29×26	26×24								

〈覆土〉　遺構確認の時に床面まで掘り下げたため観察できなかった。



第9図　第4号竪穴住居跡およびカマド実測図

〈出土遺物〉　カマド内より多くの土師器片を出土した。土器片より推定される器形は甕形土器で，胴部がやや張るもの，寸胴のものがある。

第５号竪穴住居跡　（Ｓ１５）　第10図　図版５

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄り，Ｇ－３・４，Ｈ－３・４グリッドに位置する。本住居跡は第６号竪穴住居跡と重複しており，本住居跡が新しい。

〈形態〉　長軸6.02m×短軸5.44mの方形を呈する。占地面積は32.7㎡で，主軸方向はN－24°－Eを示す。

〈壁・床〉　確認面から床までの掘り込みが浅く，東壁10cm，西壁13cm，南壁10cm，北壁７cmを測る。床は平坦で堅くしまっている。

〈カマド〉　東壁北寄りに位置する。袖部は明黄褐色粘土で作くられており，煙道は壁とともに立ち上がる。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　壁に沿って，または床に22個のピットが存在する。ピットの位置からみて壁際に沿って存在するＰ１～12が主柱穴，補助穴であろう。

第５号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	17×14	16×15	23×23	26×21	41×25	16×15	15×13	22×17	15×14	17×14	15×13	17×15
深　さ	28	30	66	23	20	50	35	70	15	65	46	11
Pit No.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22		
規　模	16×12	25×22	20×18	14×14	32×31	19×18	18×14	32×30	19×17	23×19		
深　さ	64	46	59	37	63	58	59	51	67	55		

〈覆土〉　10層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　カマド内より土師器片を１点出さした。甕形土器口縁部のもので，口縁はわずかに外反する，内面には輪積み痕が観察された。

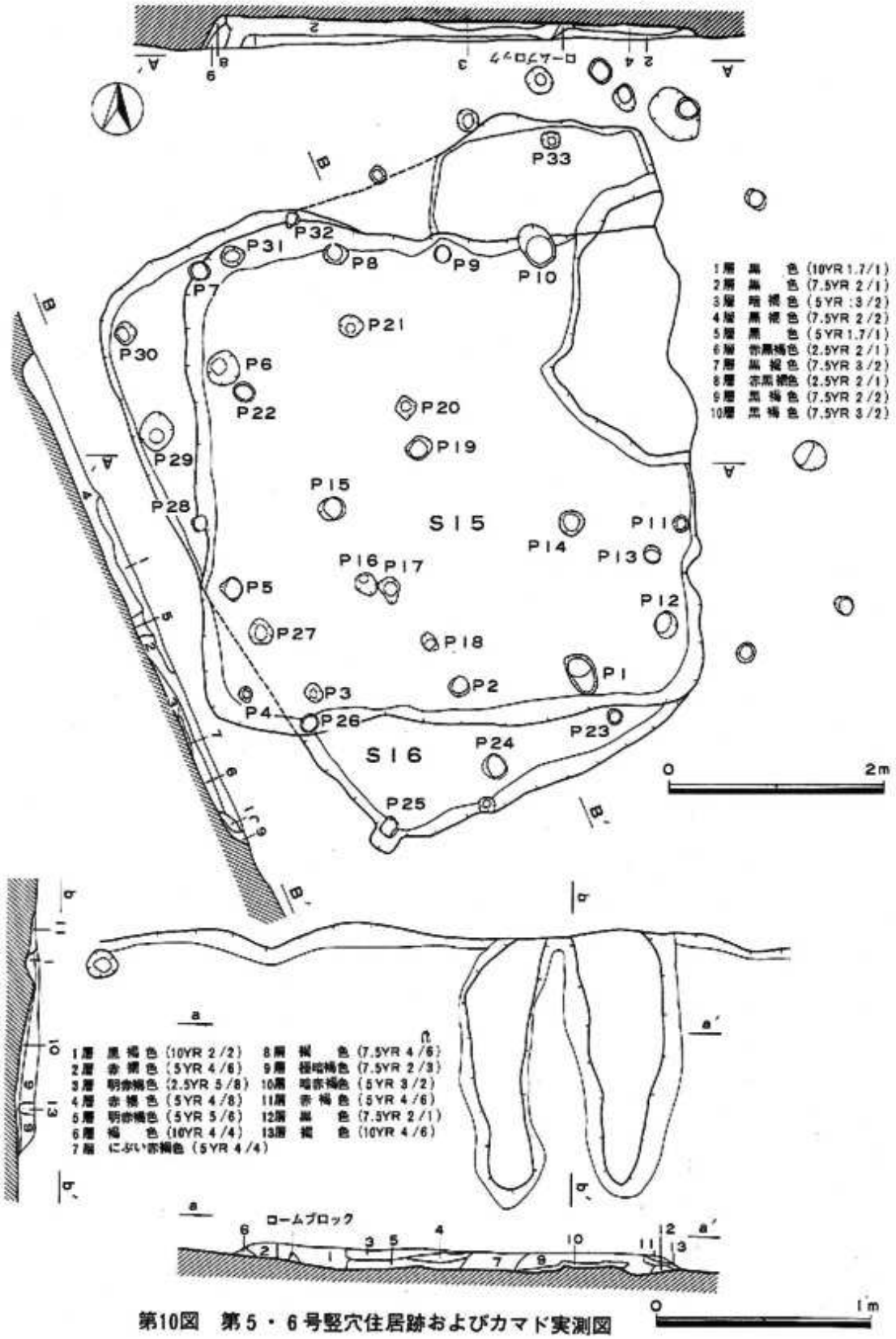
第６号竪穴住居跡　（Ｓ１６）　第10図　図版５

〈遺構の位置と確認〉　調査区西側の，Ｇ－３・４，Ｈ－３・４グリッドに位置し，第５号竪穴住居跡と重複されて確認された。本遺構が古い。

〈形態〉　長軸4.78m×短軸4.66mの方形を呈する。占地面積は22.3㎡で，主軸方向はN－４°－Eを示す。

〈壁・床〉　東壁10cm，西壁13cm，南壁13cm，北壁７cmと浅い。床よりやや外反して立ち上がるものと思われる。床は平坦で堅くしまっている。

〈カマド〉　東壁北寄りに位置するものと思われるが，第５号竪穴住居跡のカマド付近を中心



第10図　第5・6号竪穴住居跡およびカマド実測図

として重複しており，詳細は不明である。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　壁際，床にP23～49の計27個のピットが存在する。壁際に存在するP23～33が主柱穴，補助穴であろう。

第6号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
規　模	16×10	22×20	16×14	15×14	41×31	17×11	22×21	18×17	23×19	22×20	22×20	22×17
深　さ	56	48	43	37	31	63	24	27	43	61	37	22
Pit No.	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46
規　模	13×13	19×20	18×18	17×16	30×28	16×15	17×16	23×21	18×15	18×16	53×41	26×20
深　さ	54	57	61	29	47	11	45	74	67	49	70	18
Pit No.	47	48	49									
規　模	23×20	25×25	23×19									
深　さ	15	30	25									

〈覆土〉　遺構確認の時，床面まで掘り下げを行なったため確認できなかった。

〈出土遺物〉　なし

第9号竪穴住居跡　（S I 9）　第11図

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄りのE－6グリッドにおいて，第1・13号竪穴遺構と重複して確認された。本遺構が古い。

〈形態〉　長軸5.08m×短軸4.64mの方形を呈する。占地面積は23.6㎡で，主軸方向はN－2°－Wを示す。

〈壁・床〉　東壁30cm，西壁30cm，南壁43cm，北壁20cmを測り，しっかりとした作りで床よりやや外反して立ち上がる。床は平坦で堅くしまっている。

〈カマド〉　南壁やや東寄りに位置する。崩壊が著しい。

〈付属施設〉　幅30～60cm，深さ16cm程の壁溝が断続的に存在する。

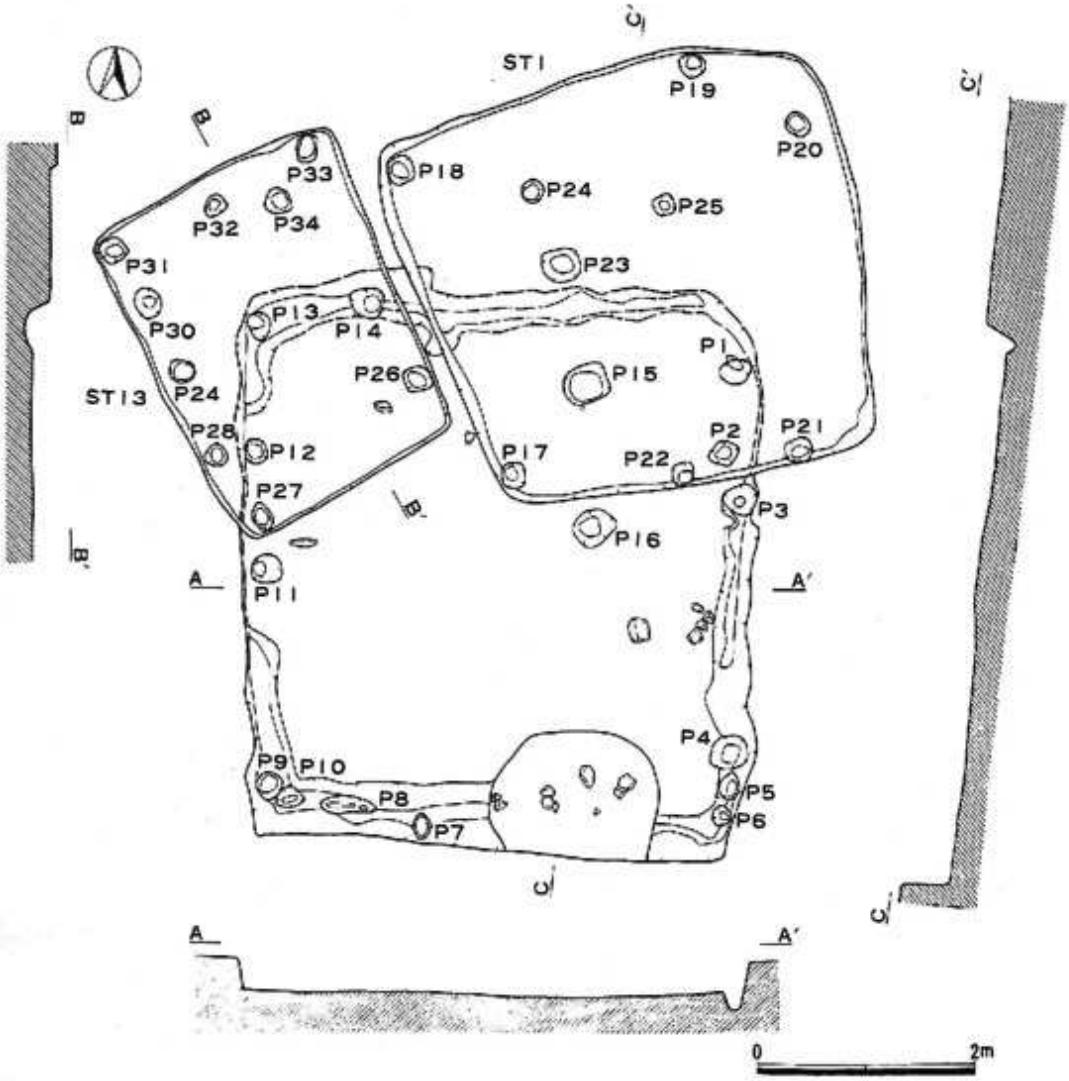
〈柱穴・ピット〉　壁に沿って，または床に計16個のピットが存在する。各壁隅にあるP1，6，9，13が柱穴と考えられる。

第9号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	30×22	28×25	32×30	34×32	24×20	20×20	25×17	50×17	25×20	26×24	28×27	23×20
深　さ	50	52	42	24	17	59	17	20	26	27	7	15
Pit No.	13	14	15	16								
規　模	25×20	30×28	42×35	40×36								
深　さ	58	34	27	16								

〈覆土〉　8層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　出土量は極めて少ない。出土土師器片から推定される器形は甕形土器である。



第11図　第９号竪穴住居跡および第１・13号竪穴遺構実測図

第10号竪穴住居跡　（Ｓ１10）　第12図　図版５

〈遺構の位置と確認〉　調査区南西寄りの，Ｆ－５・６，Ｇ－５・６グリッドにおいて，黒褐色土の落ち込みを確認した。本住居跡は第７・21号竪穴遺構，第１号溝状遺構，第３号土壙と重複している。新旧関係は，第３号土壙→第21号竪穴遺構→本住居跡→第７号竪穴遺構・第１号溝状遺構である。

〈形態〉　長軸6.00m×短軸5.68mの方形を呈する。占地面積は34.1㎡で，主軸方向はN－87°－Wである。

〈壁・床〉　各壁ともやや外反して立ち上がる，東壁13cm，西壁20cm，南壁27cm，北壁24cmを

測る。床はゆるやかな凹凸を示し，東壁に向けなだらかに傾斜する。

〈カマド〉　東壁南寄りに位置する。カマド袖部は第１号溝状遺構により切られて存在しない。

〈付属施設〉　西壁寄りに張り出し施設がある。

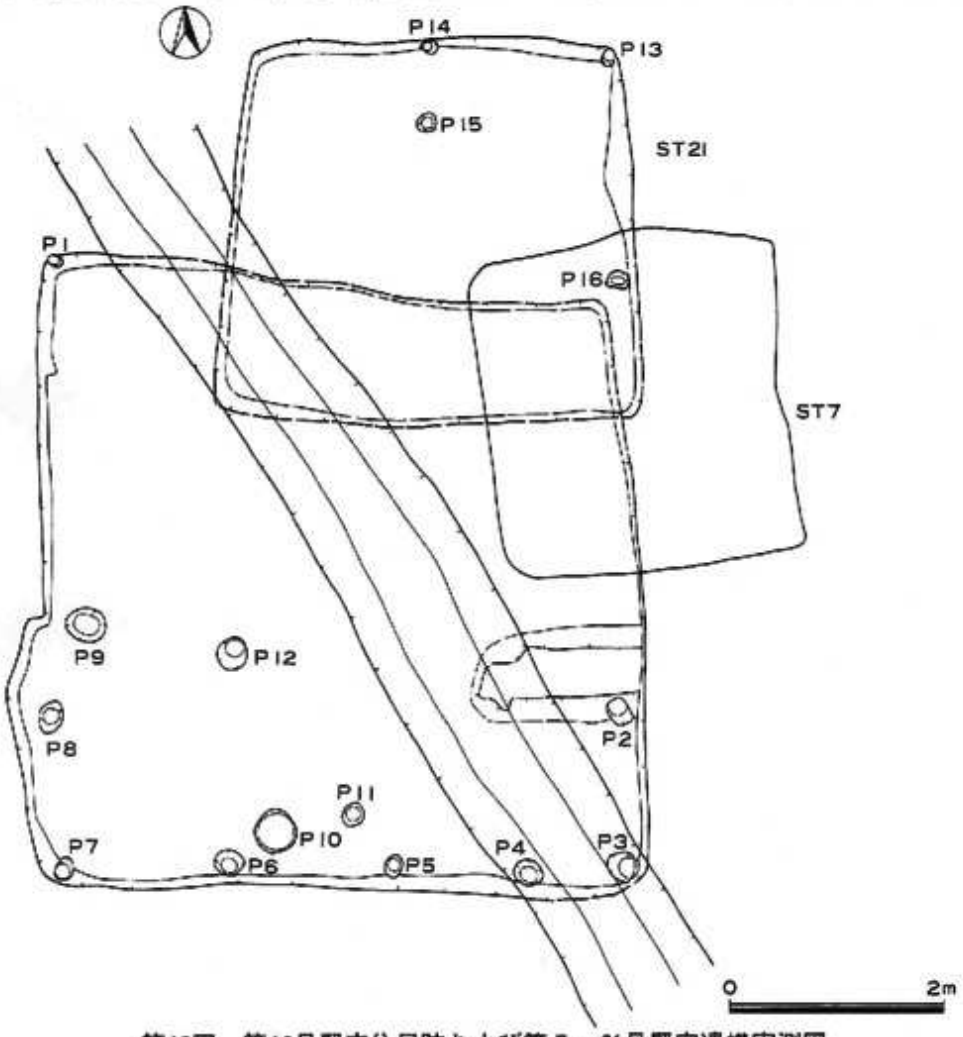
〈柱穴・ピット〉　壁に沿って，床に計12個のピットを検出した。Ｐ１，３，７が主柱穴，Ｐ４．５．６が補助穴と考えられる。

第10号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

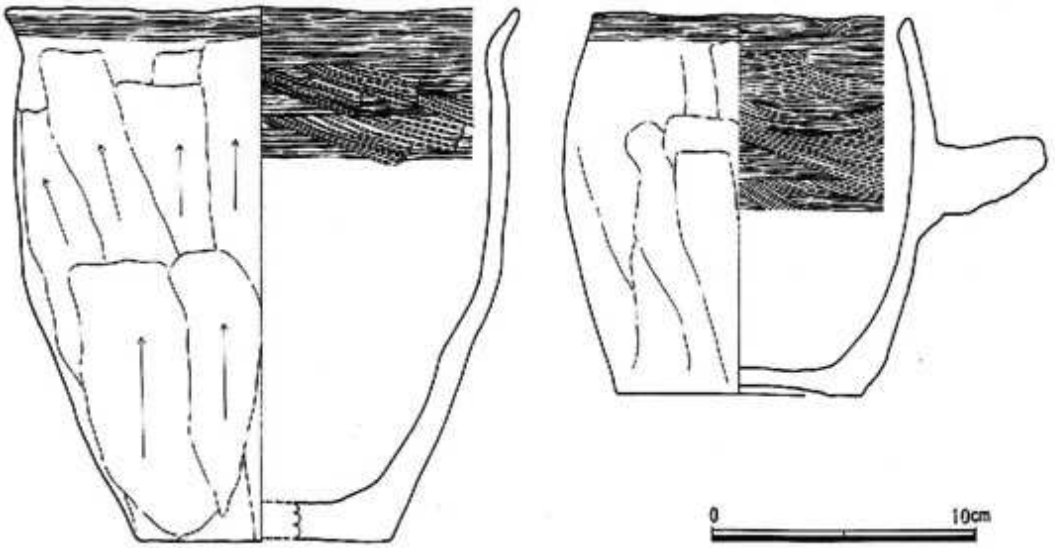
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	14×10	26×20	30×28	28×24	23×16	30×24	24×19	33×23	38×30	43×43	24×22	30×27
深　さ	30	13	34	24	40	36	54	36	20	3	20	39

〈出土遺物〉　カマド内より多量の土師器片，須恵器１点が出土している。

土師器甕（第10図１　図版16）　口径19.5cm，底径9.6cm，器高20cmを測る。口縁部はやや強く外反するもので，内・外面ともユビナデが施される。胴部内面は刷毛目状工具，



第12図　第10号竪穴住居跡および第７・21号竪穴遺構実測図



第13図　第10号竪穴住居跡出土遺物実測図

外面には粗いヘラナデ調整が施される。

土師器甕（第10図２　図版16）　口径12cm，底径9.4cm，器高14.3cmを測る。胴部中半がふくらむもので，この部分に把手が付けられたものである。口縁部外面はユビナデ，胴部外面はヘラナデ，器内部は刷毛目調整が施される。本遺構内より把手付着部分の破片がこのほかに１点出土している。

第12号竪穴住居跡　（ＳＩ12）　第14図　図版５

〈遺構の位置と確認〉　調査区北西寄り，Ｂ－５・６，Ｃ－５グリッドにおいて，黒褐色土の落ち込みを確認した，遺構北西隅は調査区外のため精査できなかった。

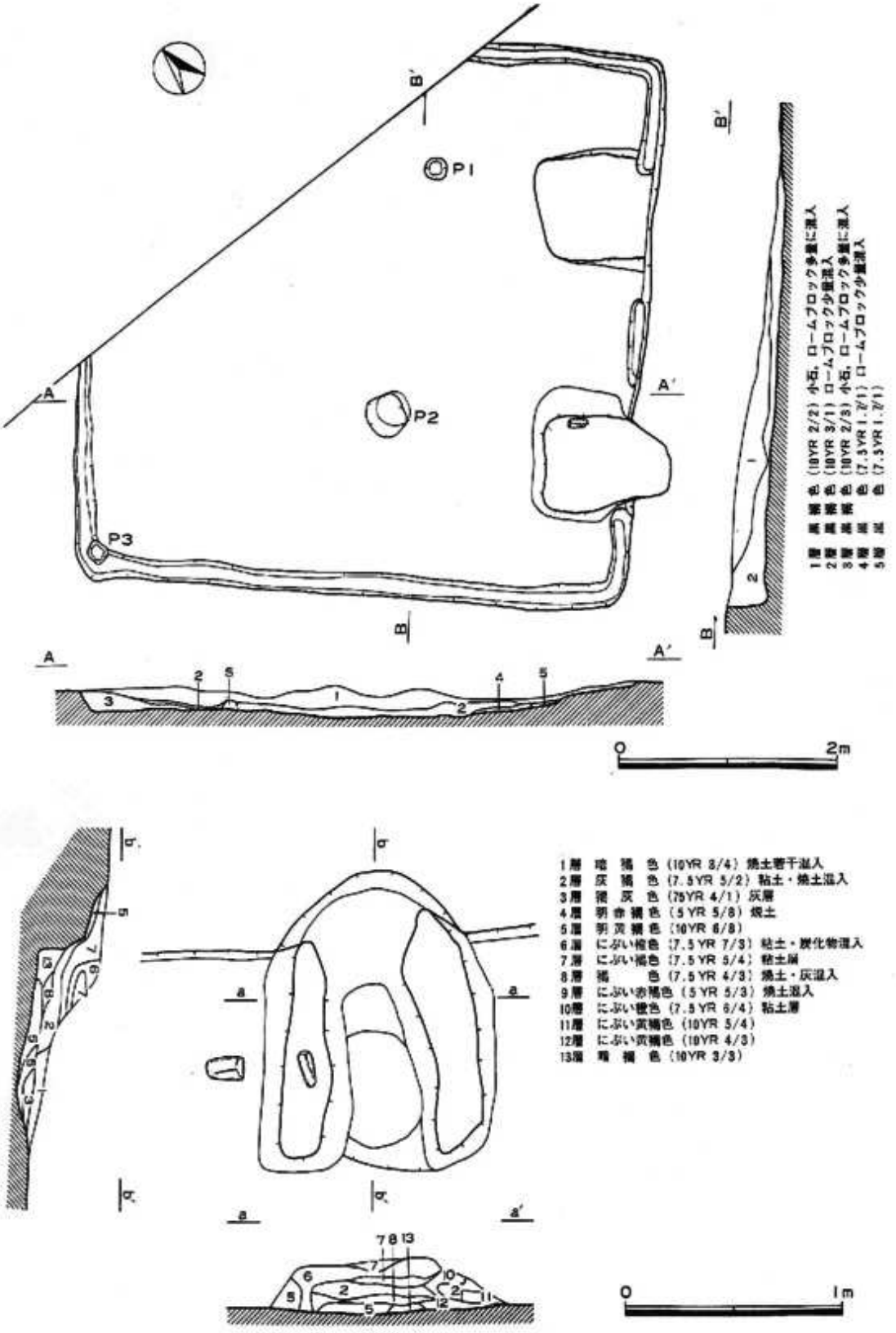
〈形態〉　長軸5.20m×短軸5.13mの方形を呈する。占地面積は推定で26.7㎡で，主軸方向はＮ－50°－Ｗである。

〈壁・床〉　北東壁10cm，南西壁37cm，南東壁15cm，北西壁21cmを測り，床よりほぼ垂直に立ち上がる。床は平坦で堅くしまっている。

〈カマド〉　南東壁南寄りに存在する。袖部は自然石を芯材としたもので，煙道部は燃焼部から一度壁とともに立ち上がり，のちゆるやかに張り出している。

〈付属施設〉　幅20cm程，深さ25cm程で，カマド，南東壁の一部を除き一巡する。また南東壁北寄りに階段状の施設がある。

〈柱穴・ピット〉　床にＰ１，２，壁溝内にＰ３が存在する。いずれも柱穴と思われる。



第14図　第12号竪穴住居跡およびカマド実測図

第12号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3
規　模	20×19	36×36	20×18
深　さ	26	33	30

〈覆土〉　5層に分層された，覆土中の混入土から人為堆積と考えられる。

〈出土遺物〉　土師器片が3点出土した。土器片より判断して甕形土器である。

第13号竪穴住居跡　（S I 13）　第15図　図版6

〈遺構の位置と確認〉　調査区北寄りの，B－7・C－7グリッド第Ⅳ層地山上面において黒色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸3.70m×短軸3.50mの方形を呈する。占地面積は13.0㎡で，主軸方向はN－5°－Wを示す。

〈壁・床〉　壁は床よりほぼ垂直に立ち上がり，東壁19cm，西壁14cm，南壁24cm，北壁20cmを測る。床はわずかに凹凸を示すが，堅くしまっている。床面直上には大形の自然石が存在した。

〈カマド〉　南壁ほぼ中央に存在する。袖部は自然石を芯材としたものである。カマド西側に径55cm×70cm（焼土1），径30cm（焼土2）が存在する。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　床に3個のピットが存在する。

第13号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3
規　模	20×19	23×20	18×18
深　さ	53	16	12

〈覆土〉　5層に分層された。人為堆積である。

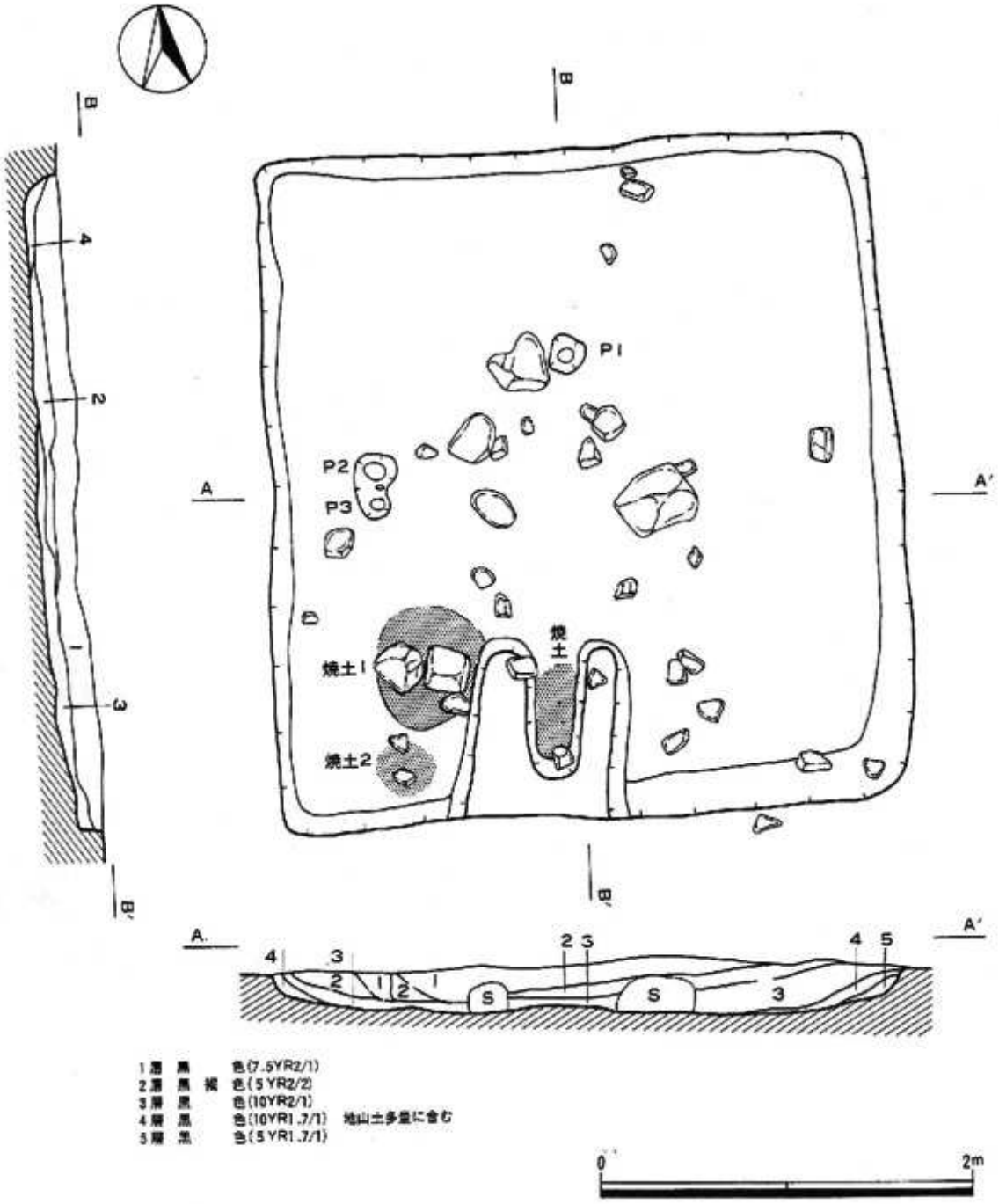
〈出土遺物〉　3点の土師器片が出土した。器形は甕形土器である。

第14号竪穴住居跡　（S I 14）　第16図　図版6

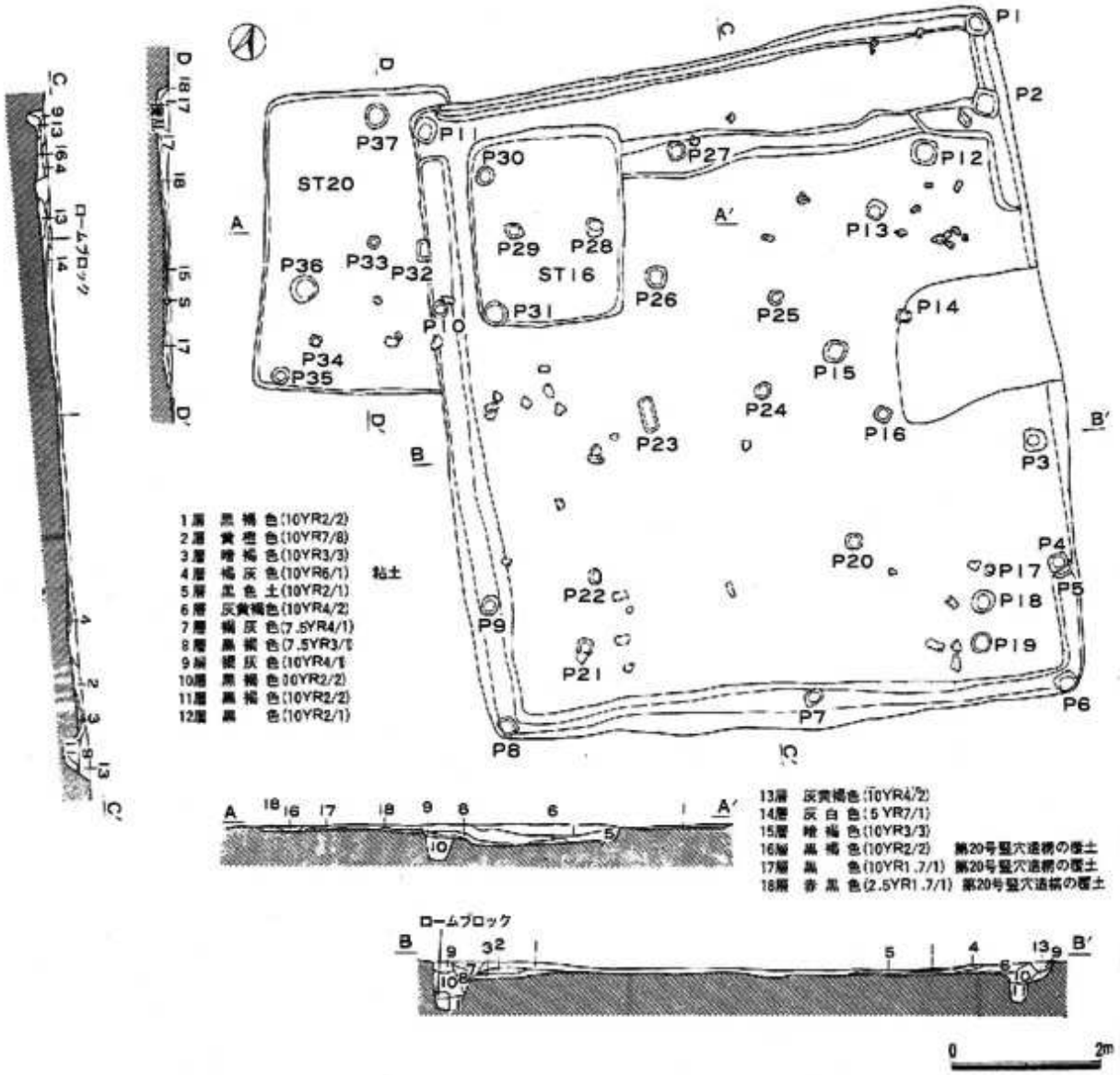
〈遺構の位置と確認〉　調査区やや北西寄り，C－6・7，D－6・7グリッド第Ⅳ層地山上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は第16・20号竪穴遺構と重複しており，第16号竪穴遺構より古く，第20号竪穴遺構より新しい。

〈形態〉　長軸9.36m×短軸8.24mの方形を呈し，確認された竪穴住居跡中もっとも大きいものである。占地面積は77.1㎡で，主軸方向はN－26°－Wを示す。

〈壁・床〉　床よりほぼ垂直に立ち上がり，北東壁16cm，南西壁25cm，南東壁14cm，北西壁9cmを測る。床は平坦で堅くしまっている。



第15図　第13号竪穴住居跡実測図



第16図　第14号竪穴住居跡および第16・20号竪穴遺構実測図

〈カマド〉　北東壁やや北寄りに位置する。崩壊が著しく袖部は存在しなかった。

〈付属施設〉　カマドとその周辺を除き，幅41cm程，深さ23cm程の壁溝が一巡する。また北西壁から約1m程離れ，これに平行して幅43cm程，深さ26cm程の壁溝が存在する。

〈柱穴・ピット〉　壁溝内と床に28個のピットを検出した。P1～4，6～11，13，17，18，20，21，27が柱穴，補助穴と考えられる。

第14号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	29×28	36×35	30×29	26×25	27×21	29×24	26×20	36×21	26×23	23×20	33×29	35×33
深　さ	27	71	47	54	40	48	45	36	51	42	33	21
Pit No.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
規　模	26×24	20×18	32×31	22×21	16×12	32×29	29×27	22×22	23×20	21×16	47×20	25×21
深　さ	63	12	18	9	42	46	9	42	57	36	12	9
Pit No.	25	26	27	28								
規　模	19×19	29×28	24×23	26×21								
深　さ	6	21	35	39								

〈覆土〉　15層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　40数点の土師器片がカマド内より出土した。器形は大形・小形の甕形土器である。また覆土中より小刃1点出土した。

〈備考〉　床面に存在する壁溝からみて本遺構は2時期に渡るものと思われる。

第15号竪穴住居跡　（S I 15）　第17図　図版6

〈遺構の位置と確認〉　調査区南西寄り，E・F－7グリッド第Ⅳ層地山上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸7.88m×短軸7.60mの方形を呈する。占地面積は59.9㎡で，主軸方向はN－40°－Wを示す。

〈壁・床〉　壁は床よりやや外反して立ち上がり，北東壁39cm，南西壁26cm，南東壁32cm，北西壁26cmを測る。床はゆるやかな凹凸を示し，堅くしまっている。

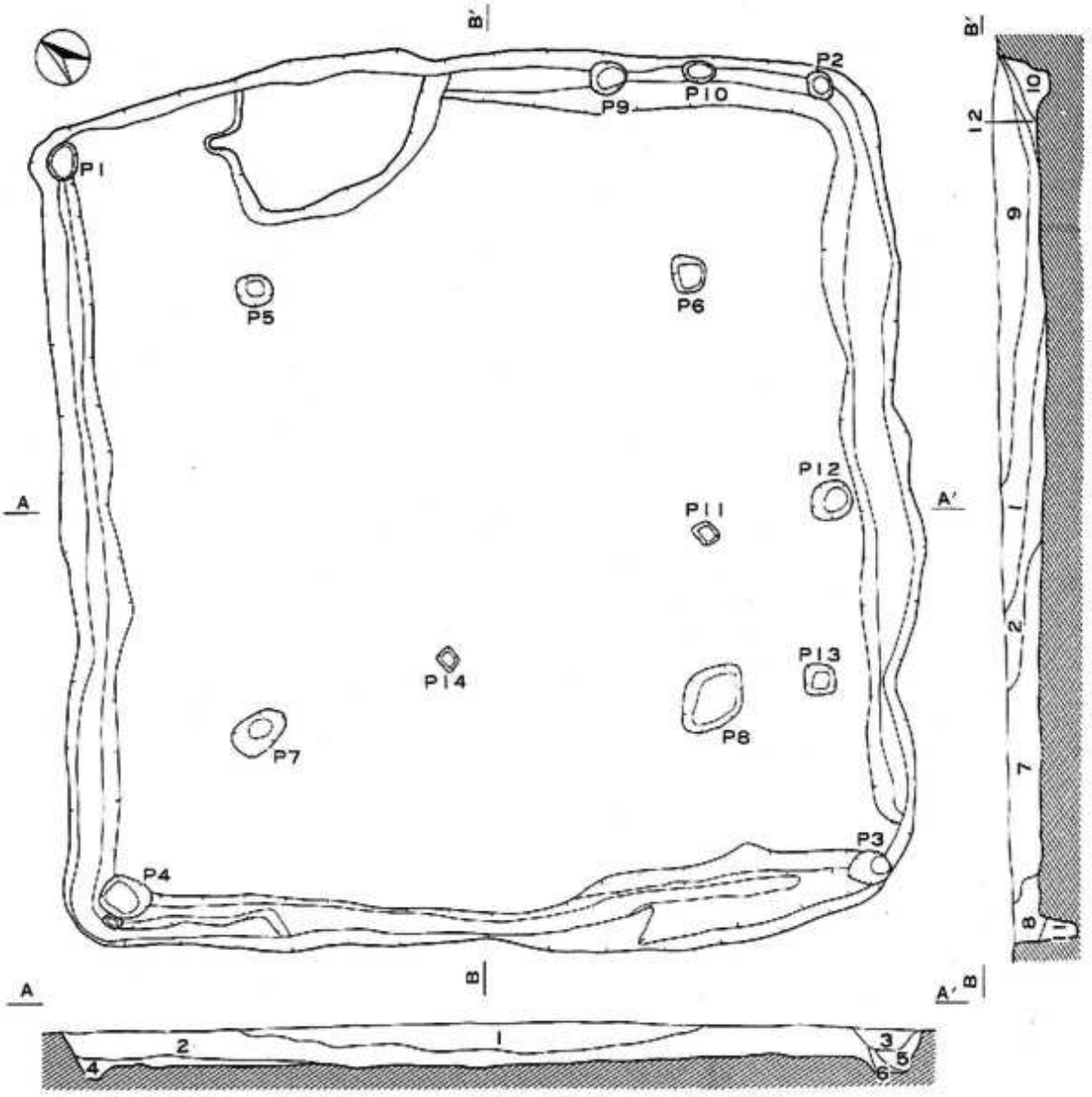
〈カマド〉　北東壁やや北寄りに位置する。

〈付属施設〉　カマド側を除き，幅12cm～42cm，深さ12cm～37cmでほぼ一巡する。

〈柱穴・ピット〉　壁溝内，床に14個のピットが存在する。P1～8が柱穴であろう。

第15号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	37×28	26×24	40×30	47×40	34×30	35×30	52×33	72×50	34×30	30×24	22×20	38×36
深　さ	62	39	72	32	55	61	59	40	36	30	5	29
Pit No.	13	14										
規　模	30×28	20×17										
深　さ	22	20										



1層 黒褐色(10YR3/2) ロームブロック多量混入
2層 黒褐色(5YR2/2)
3層 黒色(7.5YR2/1)
4層 黒色(5YR2/1) 炭化物多量混入
5層 黒褐色(10YR2/3) ローム粒子多量混入
6層 黒褐色(10YR2/2)
7層 黒褐色(10YR3/2) ロームブロック多量混入
8層 黒褐色(5YR2/1) ロームブロック多量混入
9層 黒褐色(10YR2/2)
10層 黒褐色(7.5YR2/2)
11層 褐色(7.5YR4/6)
12層 暗褐色(10YR3/3) 浮石粒子混入

0 2m

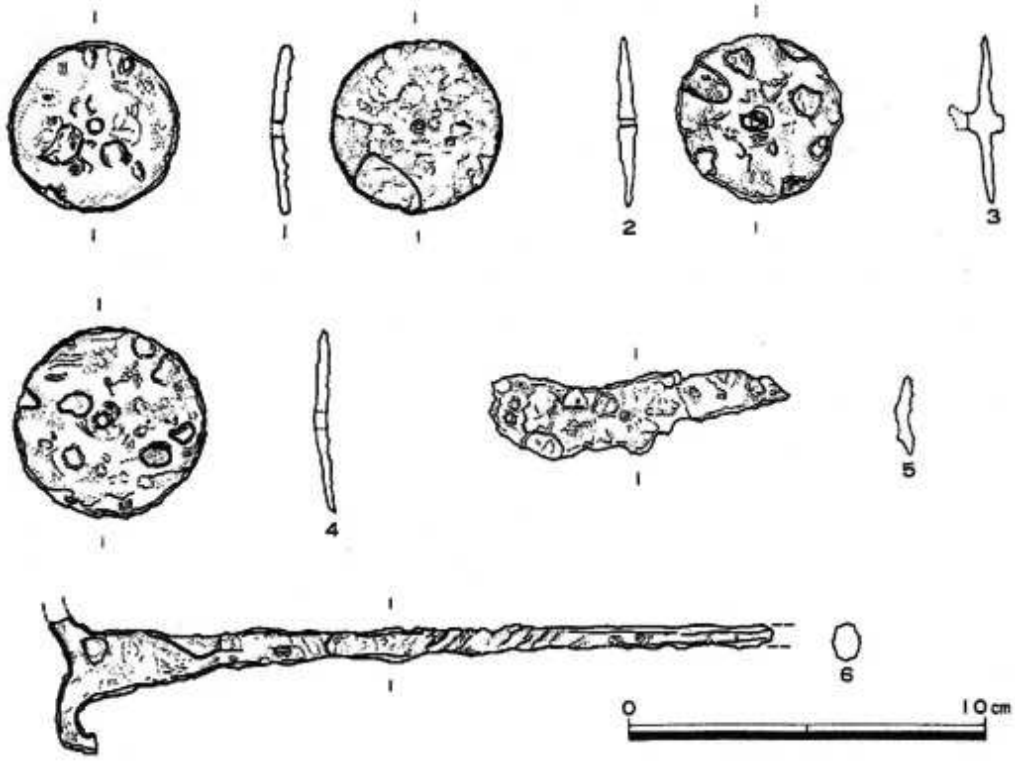
第17図　第15号竪穴住居跡実測図

〈覆土〉　12層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　鉄製品が6点出土した。内訳は紡錘車4点，火箸1点，不明1点である。

第16号竪穴住居跡　（S I 16）　第19図

〈遺構の位置と確認〉　調査区北寄りに位置する，B－9グリッド第Ⅳ層地山上面において黒色土の落ち込みを確認した。



第18図　第15号竪穴住居跡出土遺物実測図

〈形態〉　長軸5.27m×短軸5.06mの方形を呈する。占地面積は26.7㎡で，主軸方向はN－22°－Wを示す。

〈壁・床〉　北東壁11cm，南西壁12cm，南東壁11cm，北西壁16cmを測り，床よりやや外反して立ち上がる。床はゆるやかな凹凸を示し，堅くしまっていた。

〈カマド〉　南東壁西寄りに位置する。崩壊が著しい。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　南西壁に1個検出した。　P1　規模　20cm×20cm，深さ13cm

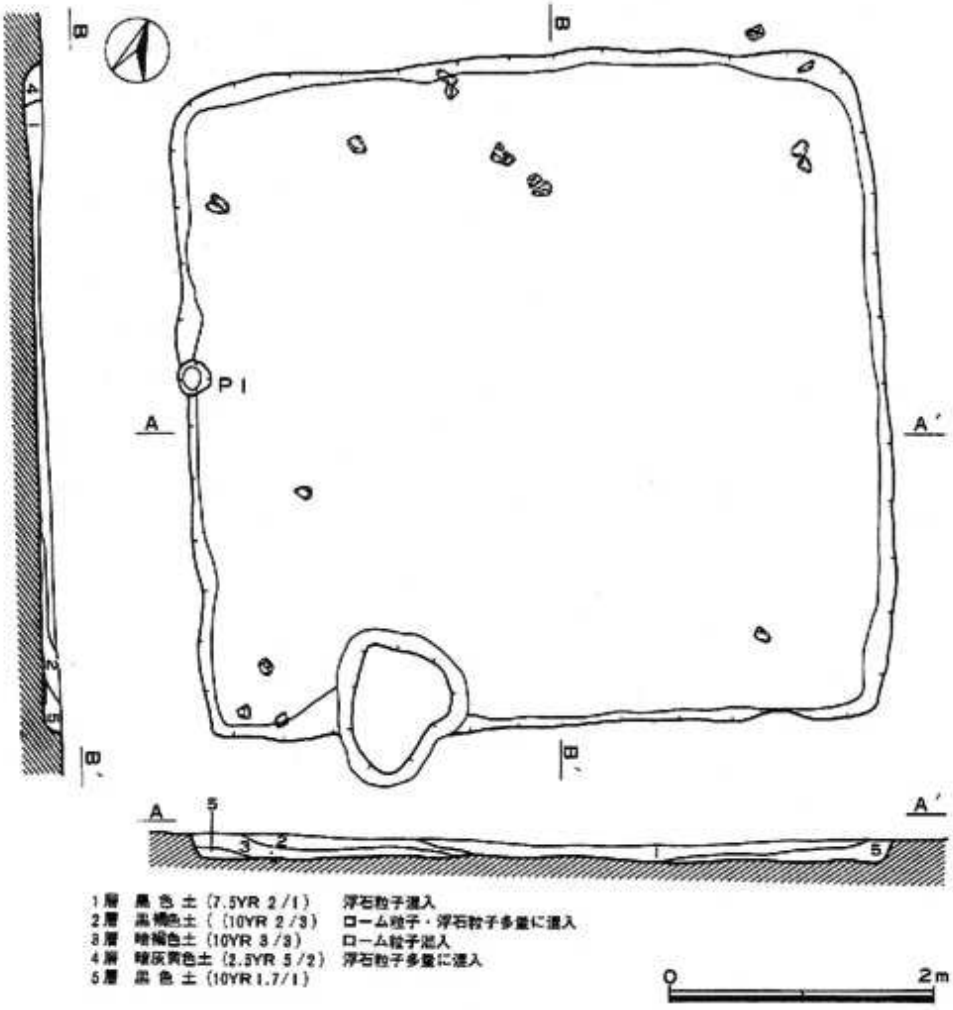
〈覆土〉　6層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

第17号竪穴住居跡　（S I 17）　第20図　図版7

〈遺構の位置と確認〉　調査区北東寄り，B－10・11，C－10・11グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面において確認された。

〈形態〉　長軸8.60m×短軸7.81mの方形を呈する。占地面積は67.2㎡で，主軸方向はN－11°－Wを示す。



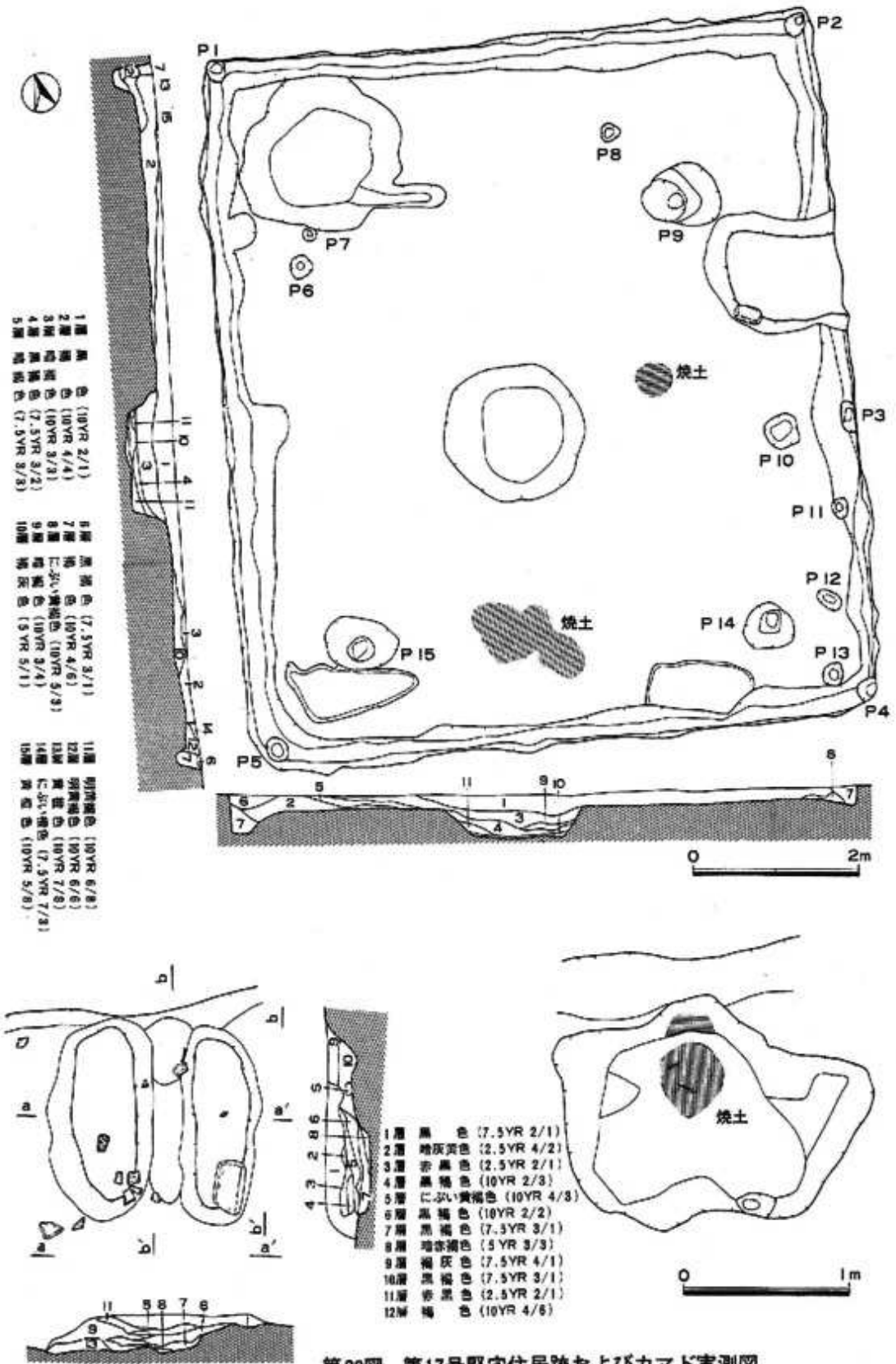
第19図　第16号竪穴住居跡実測図

〈壁・床〉　壁は床よりほぼ垂直に立ち上がり，東壁20cm，西壁24cm，南壁20cm，北壁24cmを測る。床はほぼ平坦で堅くしまっているが，南側床部分はゆるやかな凹凸があり軟弱であった。東側床は遺構中央に向け傾斜している。

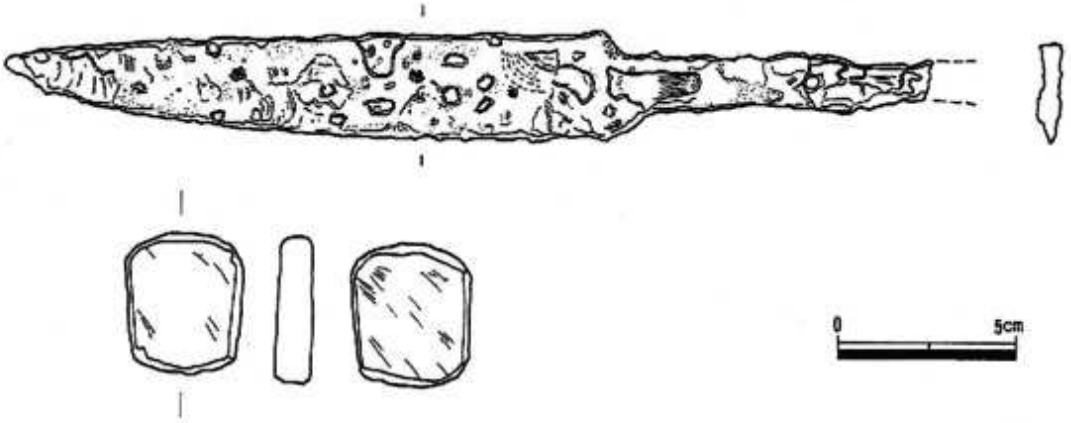
〈カマド〉　東壁北寄りに位置する。袖部は芯材として大形の自然石を使用している。煙道部は壁とともに立ち上がる。

〈付属施設〉　床中央に径1.7m，深さ0.68mの円形のピットを検出した。ピット底部には灰，焼土が混入しており灰溜施設と考えられる。また，北西隅に径2.05m×1.93m，深さ0.2m，南西隅に径1.61m×0.7m，深さ0.15mの円形，不整形のピットを検出した。さらに幅25cm～50cm，深さ25cm程の壁溝がカマド部分を除き一巡する。

〈柱穴・ピット〉　壁溝内，床に15個のピットを検出した。ピットの位置と規模からみて，P



第20図　第17号竪穴住居跡およびカマド実測図



第21図　第17号竪穴住居跡出土遺物実測図

1，4，5，9，12，14，15が柱穴であろう。

第17号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	27×33	30×25	36×16	31×22	31×25	27×26	17×16	22×20	92×63	40×40	23×18	32×20
深　さ	57	65	31.5	35	29	22	62.1	34	65	13	24	8
Pit No.	13	14	15									
規　模	29×23	60×39	90×64									
深　さ	11	52	64									

〈覆土〉　15層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　土師器片少量と鉄器，砥石各1点を出土した。土師器片から推定される器形は，すべて甕形土器である。鉄器（第21図）は直刃の小刀で基部を欠損する。

第18号竪穴住居跡　（S I 18）　第22図

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄りのF－5・6グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は第6号竪穴遺構と重複しており，本遺構が古い。

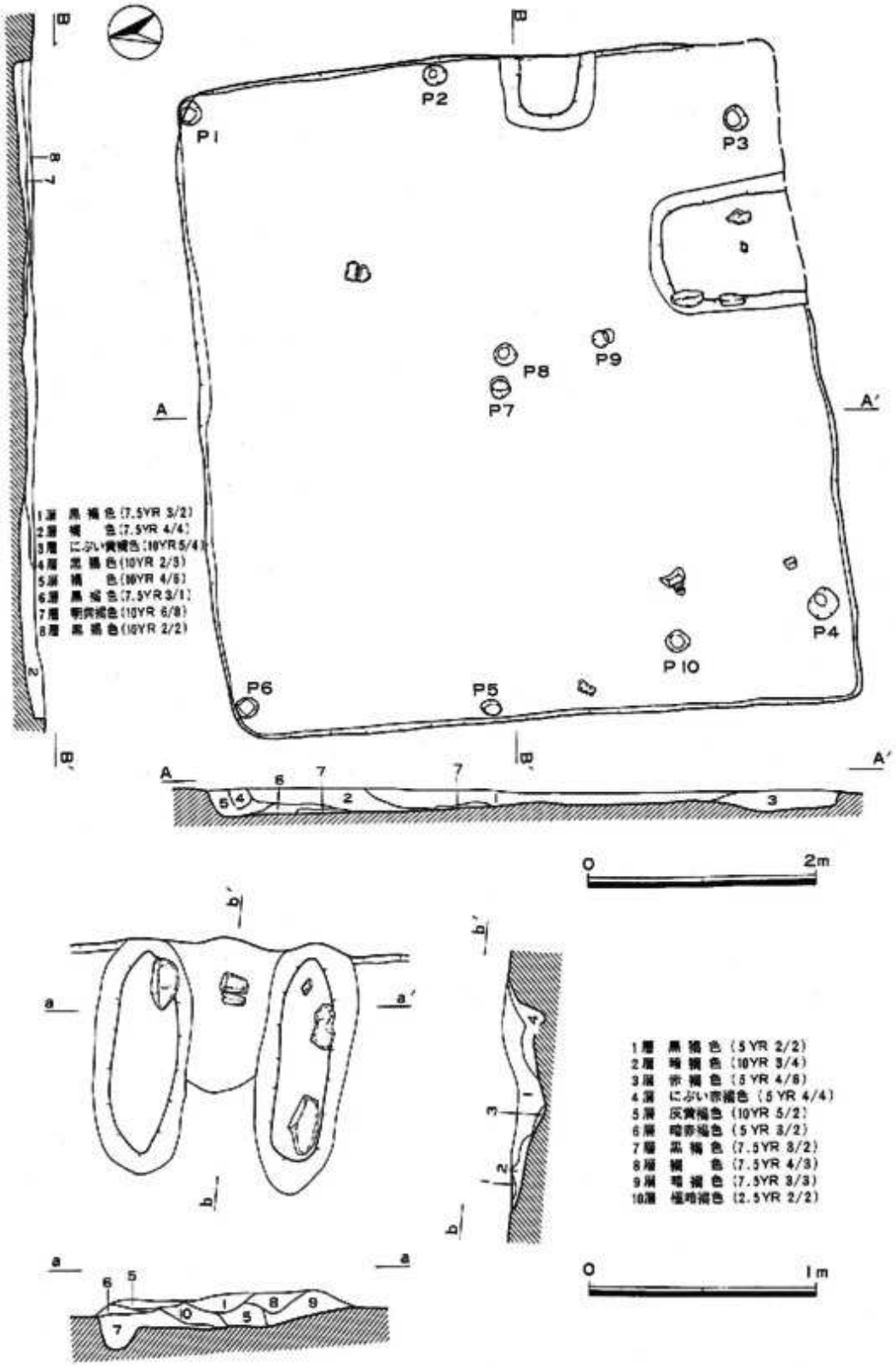
〈形態〉　長軸5.88m×短軸5.57mの方形を呈する。占地面積は32.8㎡で，主軸方向はN－88°－Wを示す。

〈壁・床〉　東壁12cm，西壁25cm，南壁9cm，北壁17cmを測り，床よりほぼ垂直に立ち上がり，床は平坦で堅くしまっており，西側にゆるやかに傾斜する。

〈カマド〉　東壁北寄りに位置する。袖部は芯材として大形の自然石を用いている。煙道部は壁とともに立ち上がる。

〈付属施設〉　北壁ほぼ中央にスロープ状の施設がある。

〈柱穴・ピット〉　壁際と床に10個のピットを検出した。P1～6が柱穴であろう。



第22図　第18号竪穴住居跡およびカマド跡実測図

第18号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	22×20	21×18	22×21	26×25	17×14	18×18	16×16	19×19	15×14	20×19
深　さ	6	23	31	21	11	17	47	15	38	14

〈覆土〉　10層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　カマドより土師器片数点を出土した。

第19号竪穴住居跡　（S I 19）　第23図

〈遺構の位置と確認〉　調査区東寄り，D・E－11グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸4.56m×短軸3.60mの方形を呈する。占地面積は16.4㎡で，主軸方向はN－70°－Eを示す。

〈壁・床〉　壁は床よりやや外反して立ち上がり，北東壁19cm，南西壁23cm，南東壁18cm，北西壁17cmを測る。床面はゆるやかな凹凸を示し，堅くしまっている。

〈カマド〉　北東壁南寄りに存在する。残存状態は非常に悪く，燃焼部焼土と掘り方を確認したのみである。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　なし

〈覆土〉　12層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　覆土中から須恵器破片１点出土した。土器片から推定される器形は壺形土器である。

第21号竪穴住居跡　（S I 21）　第24図　図版７

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄り，D・E－５グリッドに位置し，第Ⅳ層地山上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は第11，12号竪穴遺構と第１号溝状遺構と重複しており，本遺構が最も古い。

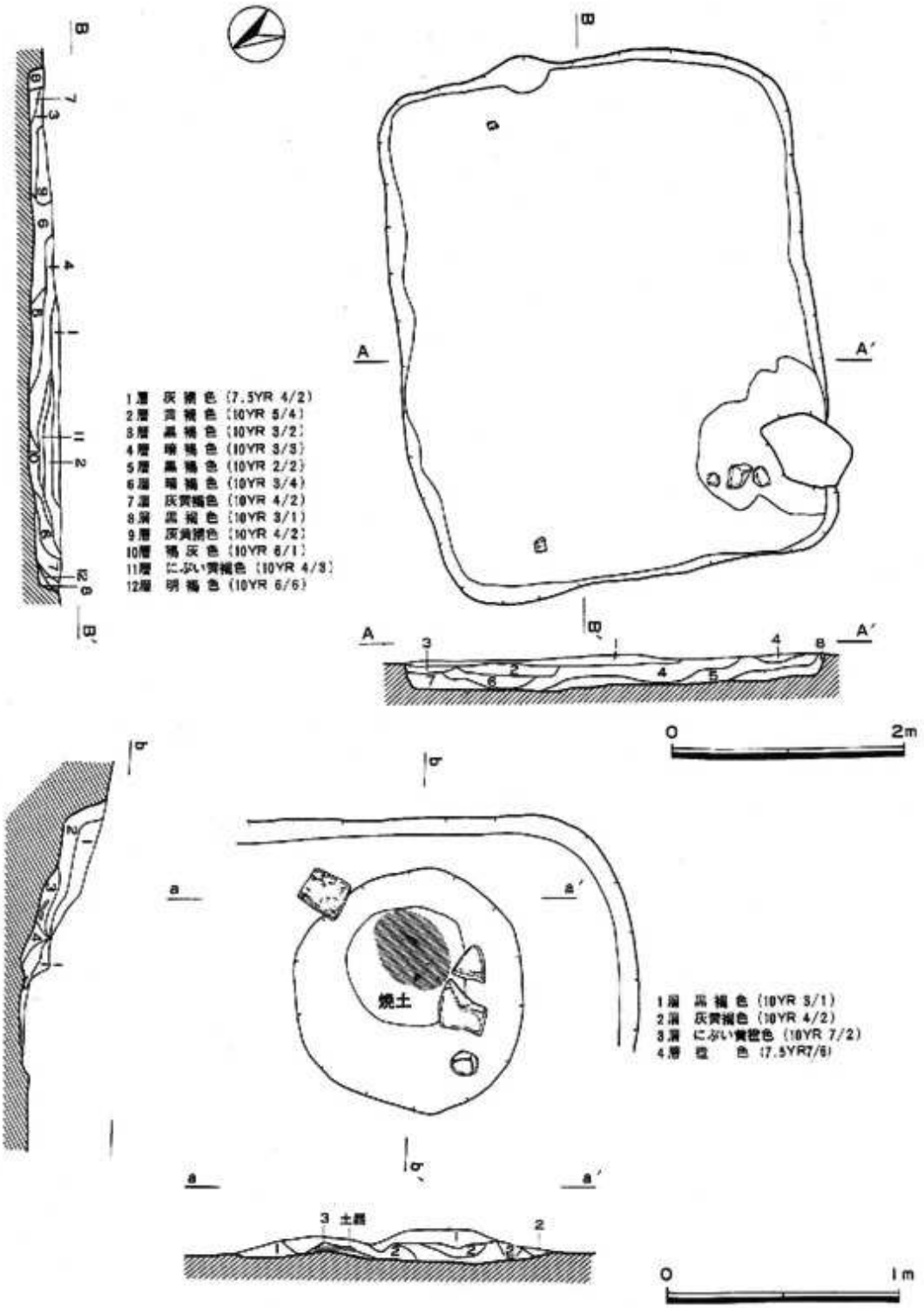
〈形態〉　長軸4.23m×短軸3.60mの方形を呈する。占地面積は15.2㎡で，主軸方向はN－83°－Eを示す。

〈壁・床〉　北壁と西壁北側は他遺構によって切られており存在しない。東壁36cm，西壁11cm，南壁８cmを測り，床よりほぼ垂直に立ち上がる。床は平坦で堅くしまっている。

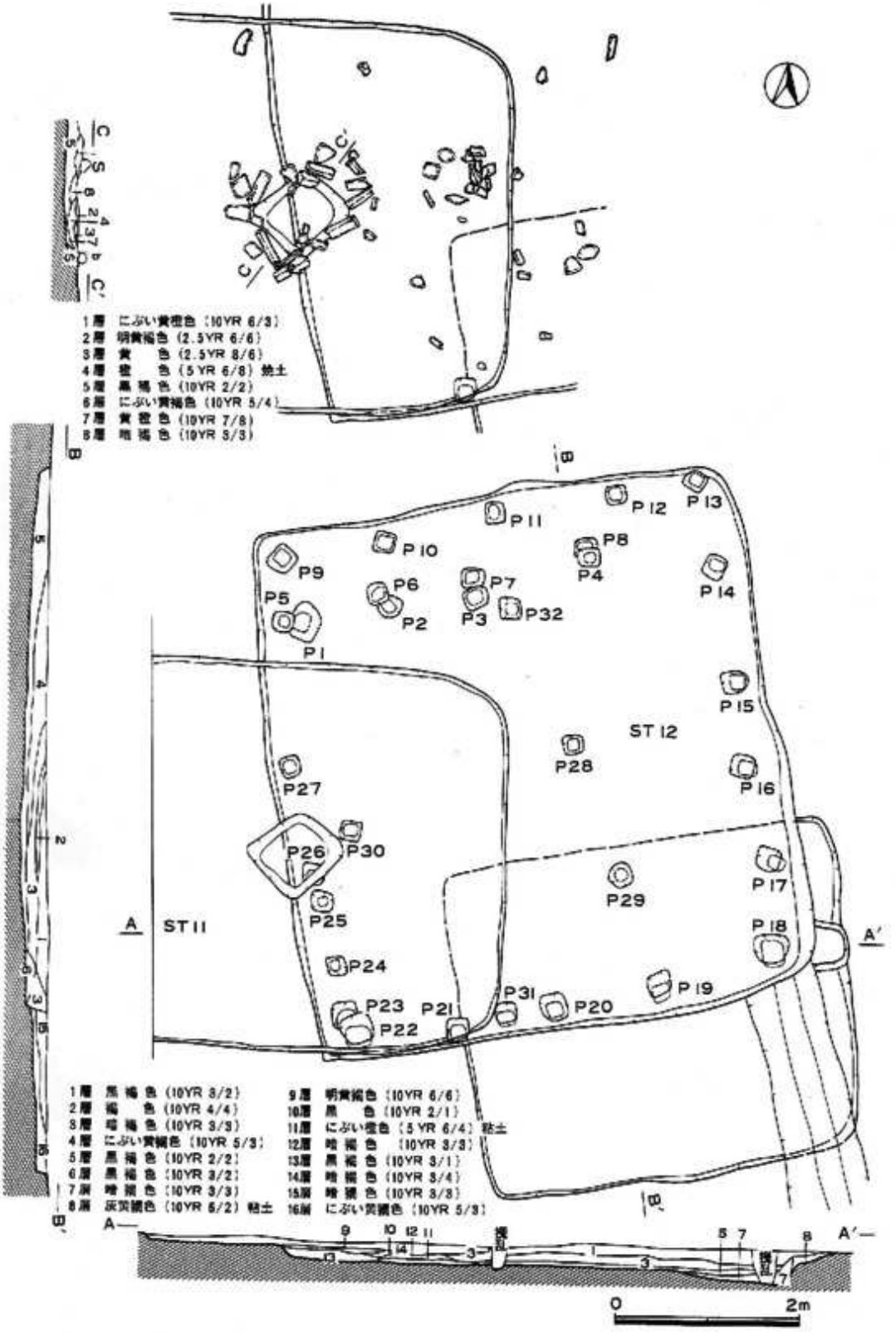
〈カマド〉　東壁北寄りに位置する。第１号溝状遺構により切られており煙道部のみ存在する。

〈付属施設〉　なし

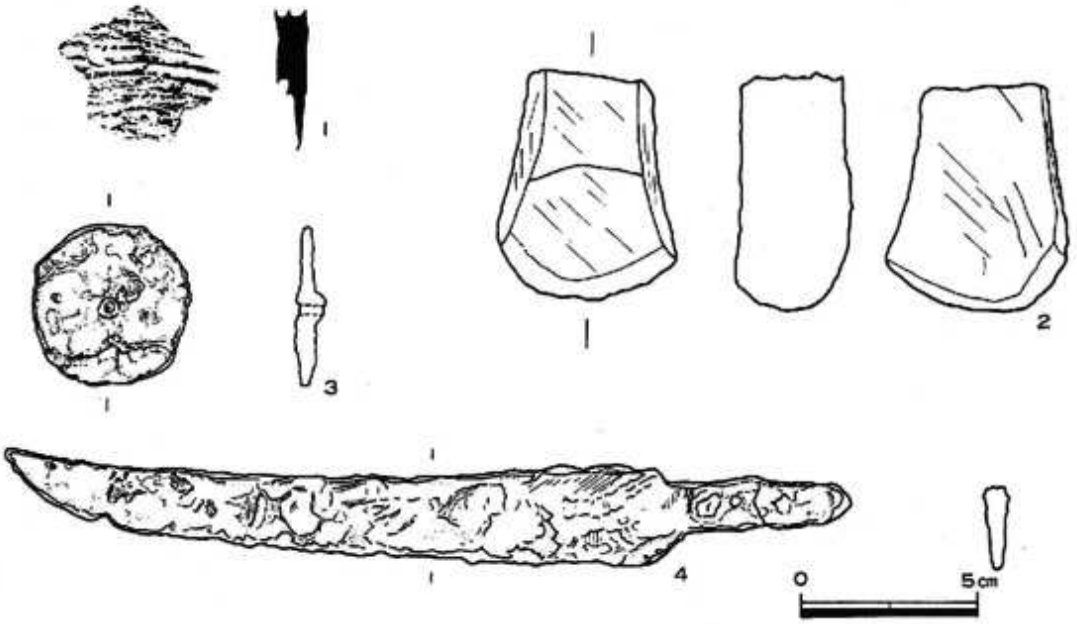
〈柱穴・ピット〉　なし



第23図　第19図竪穴跡およびカマド実測図



第24図　第21号竪穴住居跡および第11，12号竪穴遺構・第11号竪穴遺構炉実測図



第25図　第21号竪穴住居跡出土遺物実測図

〈覆土〉　5層に分層された。自然堆積である。

〈出土遺物〉　覆土中より土師器片13点，須恵器片4点，砥石1点，鉄器2点を出土した。土師器は甕形土器，須恵器（第25図1）は壺形土器と考えられる。砥石（第25図2）は小形のもので，鉄器（第25図3，4）は紡錘車，小刀である。

第22号竪穴住居跡　（S I 22）　第26図　図版7，8

〈遺構の位置と確認〉　調査区北東寄りに位置する。B・C－11グリッドにおいて黒色土の落ち込みを確認した。本遺構は第3号溝状遺構と重複しており，本遺構が古い。

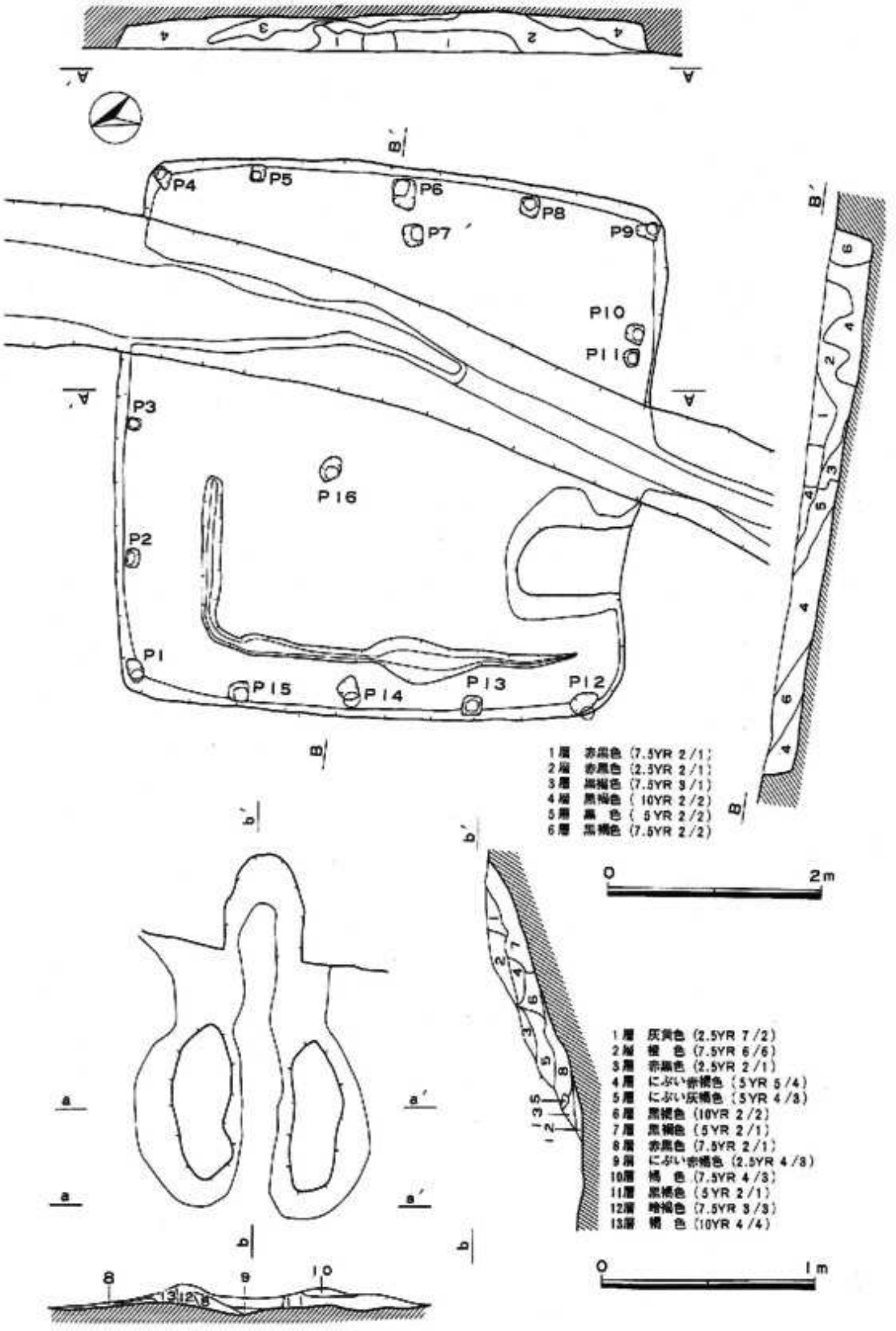
〈形態〉　長軸5.16m×短軸5.01mの方形を呈する。占地面積は25.9㎡で，主軸方向はN－23°－Eを示す。

〈壁・床〉　北西壁と南東壁の一部が第3号溝状遺構によって切られ存在しない。壁は床よりほぼ直垂に立ち上がり，北東壁29cm，南西壁31cm，南東壁29cm，北西壁21cmを測る。床は平坦で堅くしまっている。

〈カマド〉　南東壁西寄りに位置する。袖部は自然石を芯材として使用したものである。煙道部は燃焼部からゆるやかに立ち上がり，壁外に50cm程張り出す。

〈付属施設〉　南西壁および北西壁中央付近まで，幅約17cm，深さ7cm程の壁溝が存在する。

〈柱穴・ピット〉　壁際と床に16個のピットを検出した。P 1～6，8～10，12～15が柱穴と



第26図　第22号竪穴住居跡およびカマド実測図

思われる。

第22号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	20×14	17×14	12×11	17×16	16×13	27×21	22×17	18×18	19×15	18×15	15×13	27×17
深　さ	42	11	26	32	19	35	32	24	46	18	8	39
Pit No.	13	14	15	16								
規　模	18×18	21×18	19×18	24×17								
深　さ	19	33	15	50								

〈覆土〉　6層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

第23号竪穴住居跡　（S I 23）　第27図　図版8

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄りに位置する。D－7・8，E－7・8グリッド第Ⅳ層地山上面において確認した。本遺構は，第28号住居跡，第1号竪穴遺構と重複しており，第28号竪穴住居跡より新しく，第1号竪穴遺構より古い。

〈形態〉　長軸5.93m×短軸5.73mの方形を呈する。占地面積は34.0㎡で，主軸方向はN－77°－Eを示す。

〈壁・床〉　東壁19cm，西壁11cm，南壁11cm，北壁10cmを測り，床よりほぼ垂直に立ち上がる。南西隅は第1号竪穴遺構によって切られ存在しない。床は平坦で堅くしまっており，ゆるやかに北側に傾斜する。

〈カマド〉　東壁北寄りに位置する。

〈付属施設〉　なし

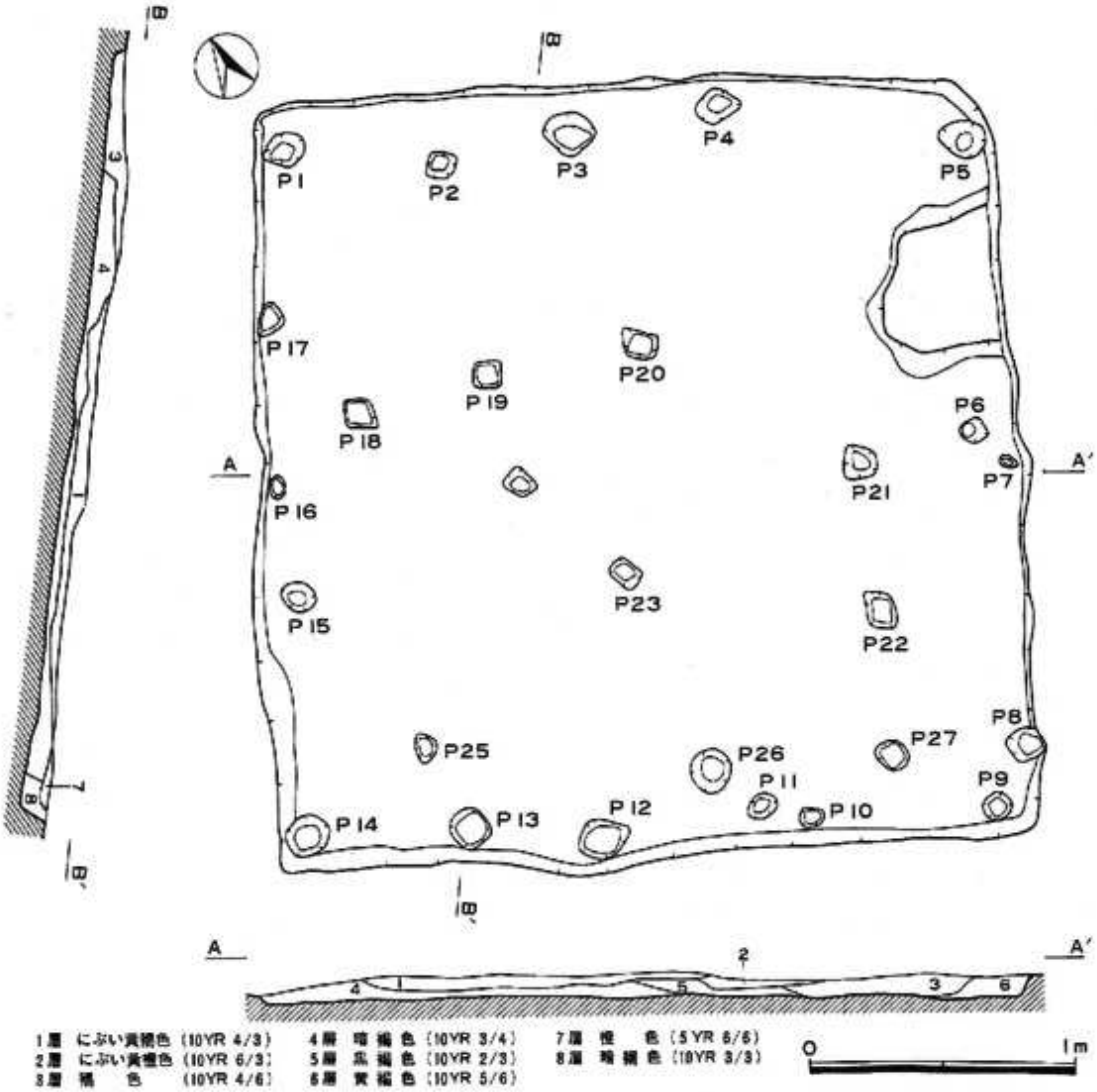
〈柱穴・ピット〉　壁際・床に27個のピットを検出した。P1，3，5，6，9，12，14，16が主柱穴，補助穴と考えられる。

第23号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

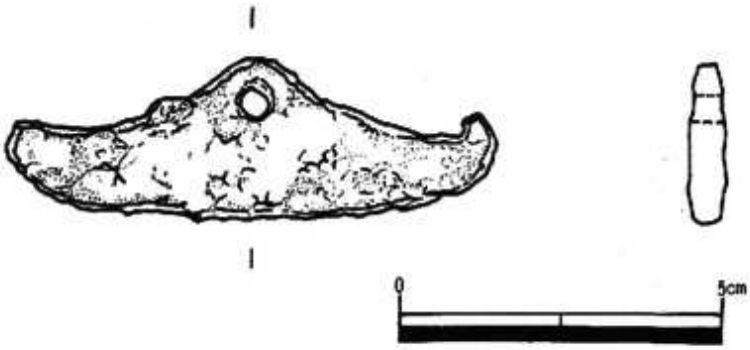
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	27×25	21×20	39×32	29×25	37×27	19×17	14×8	25×25	21×20	17×15	24×18	34×29
深　さ	63	11	28	10	57	35	30	35	56	39	9	37
Pit No.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
規　模	29×29	33×30	27×22	17×13	25×19	22×20	22×20	27×20	26×26	27×22	23×17	23×18
深　さ	21	42	33	62	7	31	7	13	23	24	9	7
Pit No.	25	26	27									
規　模	20×16	34×30	23×21									
深　さ	7	14	20									

〈覆土〉　8層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　覆土内より甕形土師器片25点と鉄器（第28図1）1点を出土した。



第27図　第23号竪穴住居跡実測図



第28図　第23号竪穴住居跡出土遺物実測図

第24号竪穴住居跡　（ＳＩ24）　第29図　図版８

〈遺構の位置と確認〉　調査区東寄りに位置する。Ｃ－13・14，Ｄ－13グリッドにおいて確認した。

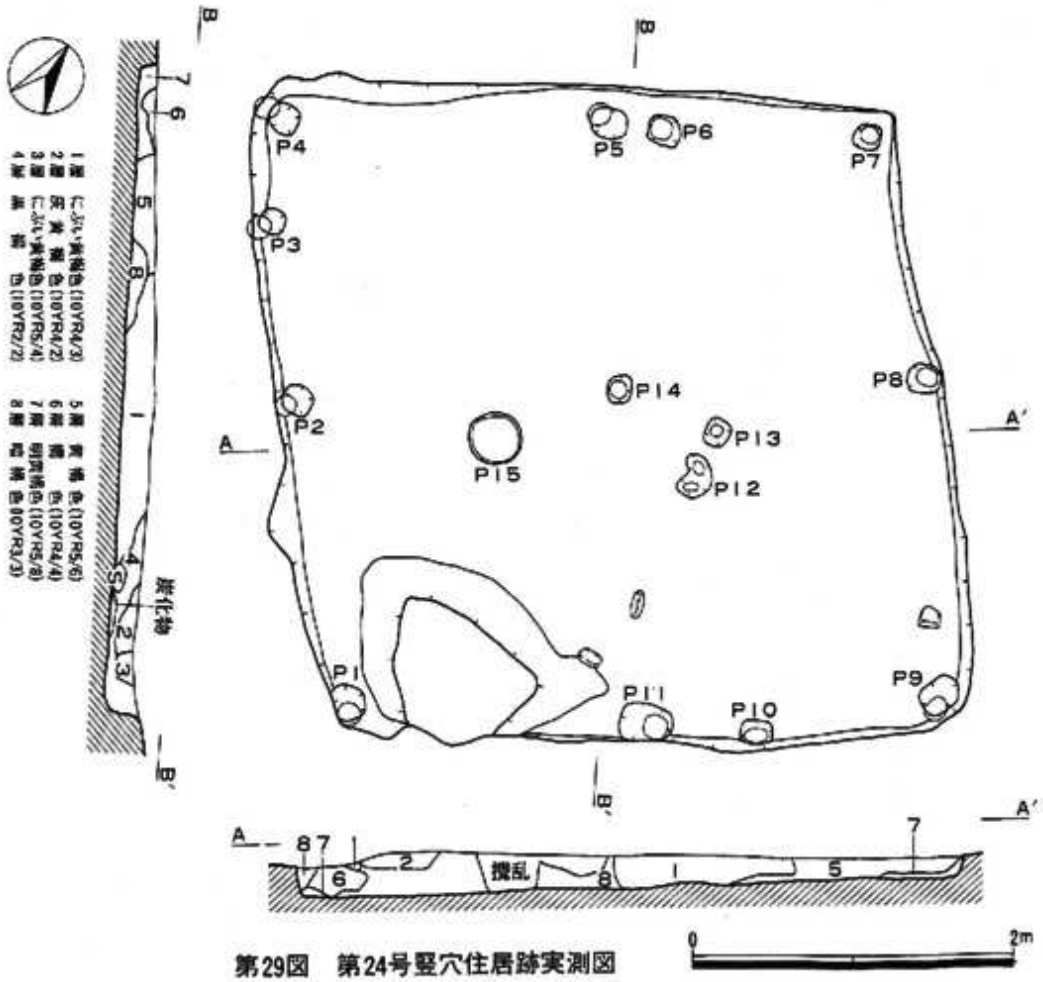
〈形態〉　長軸，短軸とも4.18ｍのやや歪んだ方形を呈する。占地面積は17.5㎡で，主軸方向はＮ－24°－Ｗを示す。

〈壁・床〉　北東壁14cm，南西壁18cm，南東壁22cm，北西壁15cmを測り，垂直に立ち上がる。床は平坦で堅くしまっている。

〈カマド〉　南東壁西寄りに位置する。袖部は大形の自然石を用い構築されており，煙道部は壁とともに立ち上がる。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　壁に沿って，床に15個のピットを検出した。Ｐ１，２，４，５，７～９，11が主柱穴，補助穴と考えられる。



第29図　第24号竪穴住居跡実測図

第24号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	26×20	20×19	16×16	20×20	23×16	20×20	18×17	22×17	25×22	20×16	32×23	30×18
深　さ	58	59	57	68	45	23	23	64	73	47	70	26
Pit No.	13	14	15									
規　模	18×16	18×15	33×32									
深　さ	55	39	49									

〈覆土〉　4層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　覆土，カマドより土師器甕形土器片が出土した。底部面は，木葉痕，スダレ状圧痕，ヘラナデによるものがある。

第25号竪穴住居跡　（S I 25）　第30図

〈遺構の位置と確認〉　調査区東端に位置する。B－14・15，C－14・15グリッド第Ⅳ層地山上面において暗褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸5.03m×短軸4.96mの方形を呈する。占地面積は24.9㎡で，主軸方向はN－16°－Wを示す。

〈壁・床〉　東壁12cm，西壁20cm，南壁11cm，北壁8cmを測り，床より垂直に，またはそれに近い角度で立ち上がる。床は平坦で堅くしまっている。

〈カマド〉　南壁中央よりやや西寄りに位置する。

〈付属施設〉　幅20cm～37cm，深さ5cm～10cmの壁溝が，カマド部分を除き一巡する。

〈住穴・ピット〉　壁溝内，床に9個のピットが存在する。

第25号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
規　模	20×20	16×16	20×17	22×22	21×19	20×18	21×20	16×15	21×20
深　さ	24	6	4	8	16	5	13	30	15

〈覆土〉　5層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　覆土中より土師器片が少量出土した。小破片のものが多いが，甕形土器と思われる。

第26号竪穴住居跡　（S I 26）　第31図　図版9

〈遺構の位置と確認〉　調査区北東寄りに位置する。A－12グリッド第Ⅳ層地山上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸5.00m×短軸4.86mの方形を呈する。占地面積は24.3㎡で，主軸方向はN－101°－Wを示す。

〈壁・床〉　壁高は東壁20cm，西壁23cm，南壁18cm，北壁20cmを測り，床よりやや外反して立

ち上がる。床はこまかい凹凸を示し，堅くしまっている。

〈カマド〉　東壁北寄りに位置する。袖部は芯材として大形の自然石および土師器片が使用されている。焚口部は床面より10cm程掘りくぼめられ，これより一段高い燃焼部，ほぼ垂直に立ち上がる煙道部へ続く。

〈付属施設〉　Ｐ３とＰ４を接続するように，幅36cm～46cm，深さ10cmほどの溝が存在する。

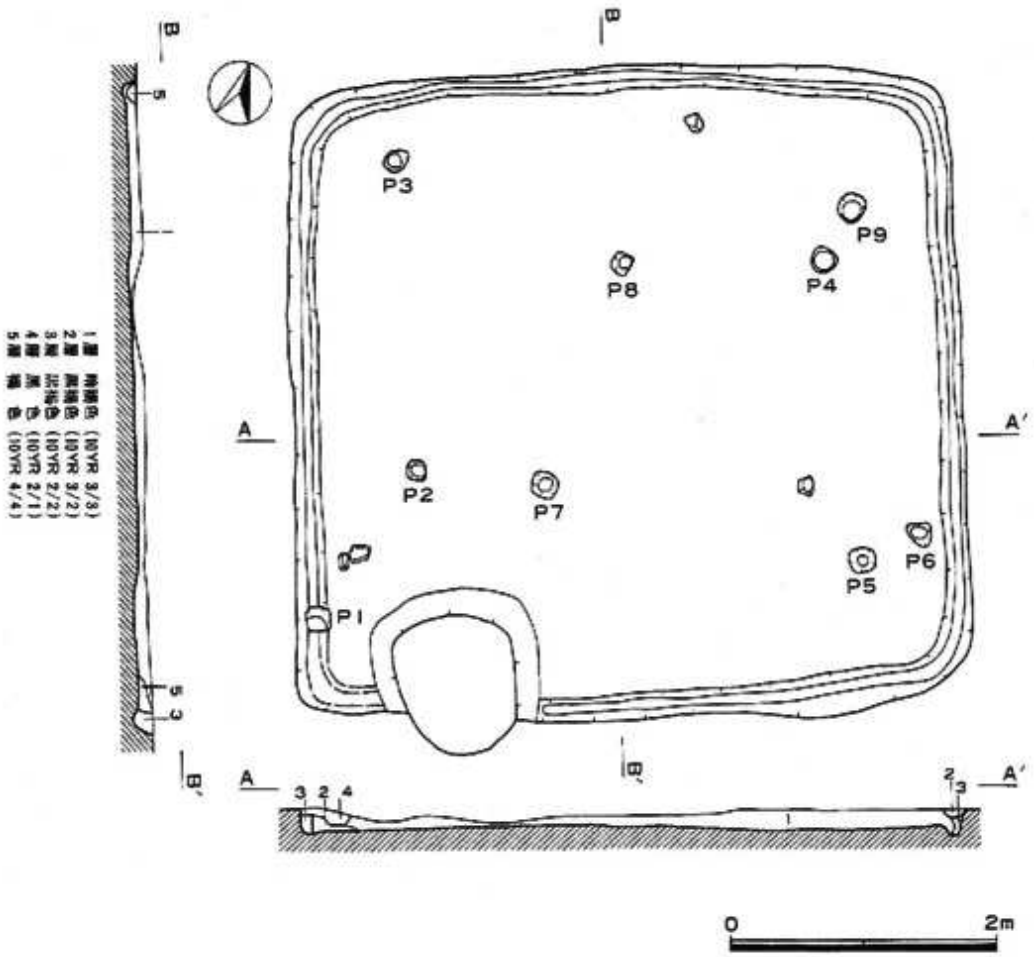
〈柱穴・ピット〉　壁際，床に９個のピットを検出した。Ｐ１～４が主柱穴である。

第26号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

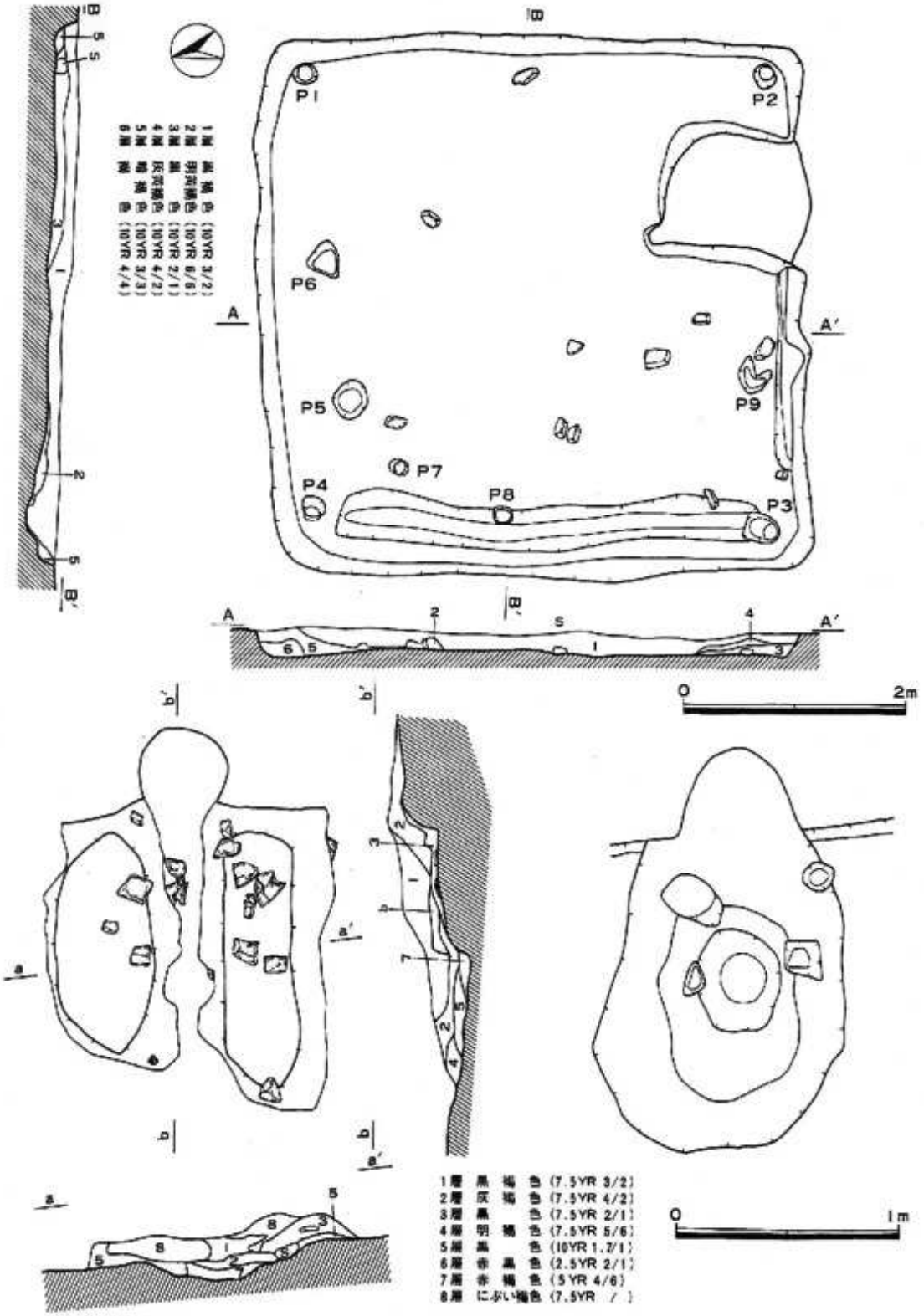
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
規　模	24×20	24×20	34×26	20×18	36×32	32×28	14×14	17×16	28×19
深　さ	44	30	41	50	6	26	21	20	12

〈覆土〉　６層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　覆土中，カマド内より甕形土師器片を出土した。胴部がやや張るもの，大きく張るものが存在し，底面には木葉痕が観察されるものがある。



第30図　第25号竪穴住居跡実測図



第31図　第26号竪穴住居跡およびカマド実測図

第27号竪穴住居跡　（S I 27）　第32図

〈遺構の位置と確認〉　調査区北東部に位置し，最も北端に存在するものである。A－12・13 Z－12・13グリッド第Ⅳ層地山上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸5.06m×短軸5.04mの方形を呈する。占地面積は25.1㎡，主軸方向はN－45°－Wを示す。

〈壁・床〉　壁高は北東壁4cm，南西壁2cm，南東壁5cm，北西壁7cmを測る。床はゆるやかな凹凸を示しながら，カマド付近へ傾斜する。床は堅くしまっているが，カマド付近がより堅くしまっている。

〈カマド〉　南東壁南寄りに位置する。崩壊が著しく，掘り方を検出したのみである。

〈付属施設〉　カマド北側に，長さ1m，幅12cm，深さ5cm程の溝が存在する。

〈柱穴・ピット〉　壁際，床に12個のピットを検出した。P1，2，5，7，11，12が柱穴と考えられる。

第27号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	24×20	20×18	25×20	30×20	30×29	26×20	31×29	35×24	30×25	40×30	26×20	24×20
深　さ	7	24	17	13	23	10	9	8	48	48	7	22

〈覆土〉　1層のみである。

〈出土遺物〉　覆土中より土師器片35点と鉄器2点を出土した。鉄器のうち第34図1は金具，2は小太刀の胴部と思われる。土師器口縁部はやや外反するもの，底面は砂底のものがある。

第28号竪穴住居跡　（S I 28）　第33図　図版9

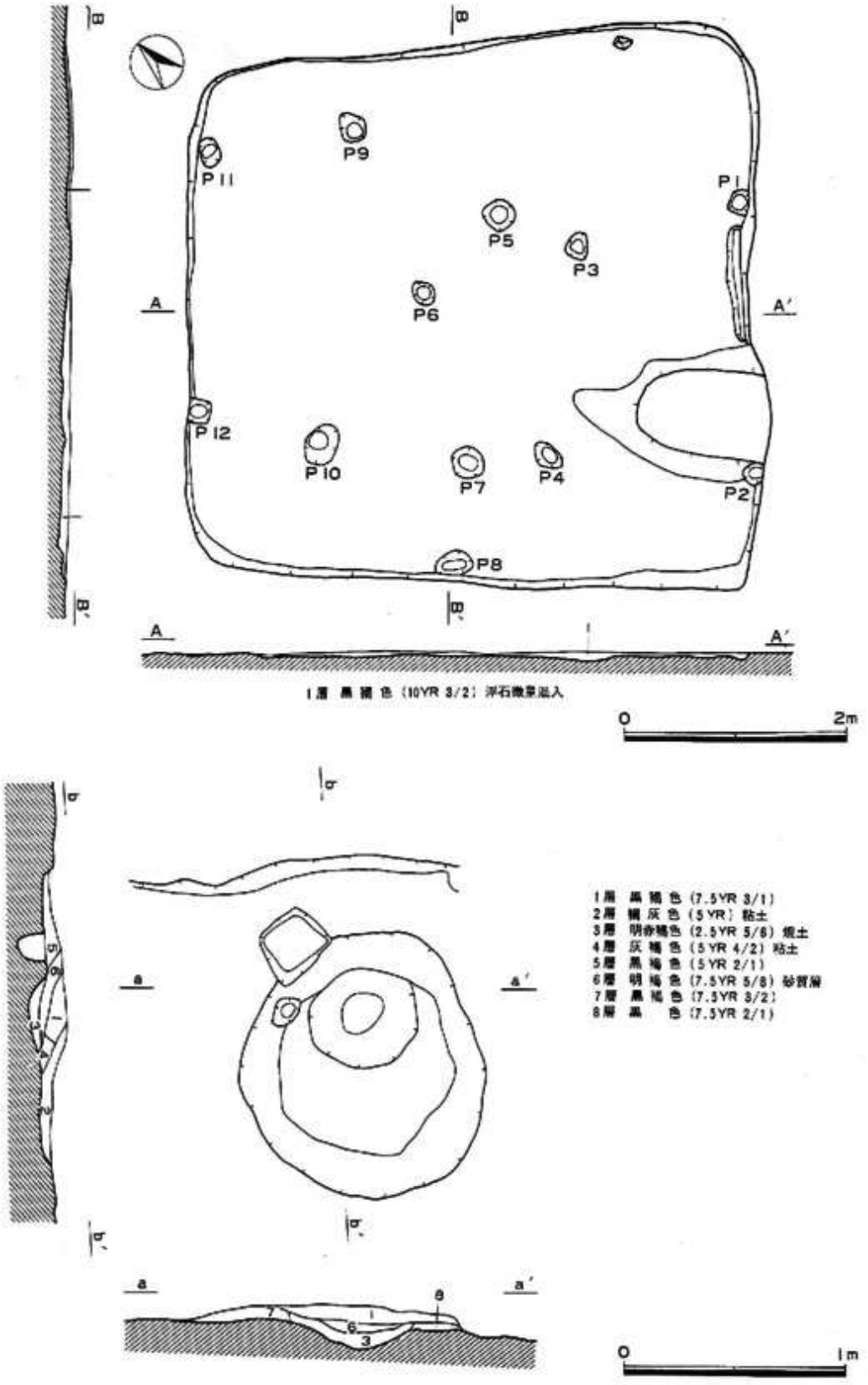
〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄りのD－6・7グリッドに位置する。第Ⅳ層地山面において暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は，第2号溝状土壙と第23号竪穴住居跡と重複しており，新旧関係は，第2号溝状土壙より新しく，第23号竪穴住居跡より古い。

〈形態〉　長軸5.73m×短軸5.45mの方形を呈する。占地面積は31.2㎡で，主軸方向はN－26°－Wである。

〈壁・床〉　壁高は東壁15cm，西壁14cm，南壁10cm，北壁16cmを測る。南壁西側は第23号竪穴住居跡によって切られており浅い。床面はゆるやかな凹凸を示すが堅くしまっており西側に向いなだらかな傾斜を示す。

〈カマド〉　南壁中央より西側に位置する。第23号住居跡により切られ袖部先端を確認したのみである。

〈付属施設〉　西壁，北壁に存在するP1，2，3を接続するように幅6cm～28cm，深さ20cm



第32図　第27号竪穴住居跡およびカマド実測図

ほどの壁溝が存在する。

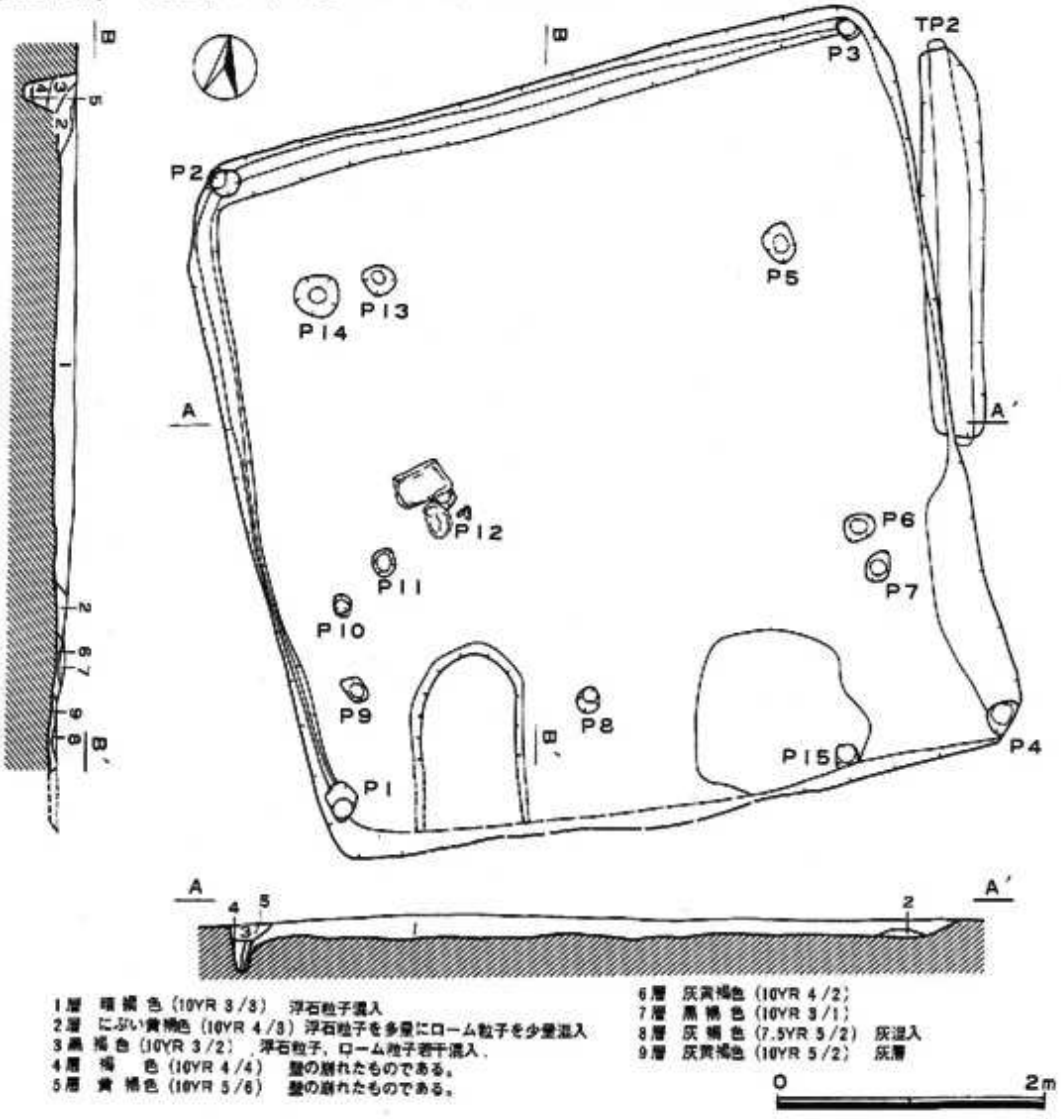
〈柱穴・ピット〉　壁際，床に15個のピットを検出した。P 1～5・7・10・14が柱穴である。

第28号住居跡ピット一覧表（単位：cm）

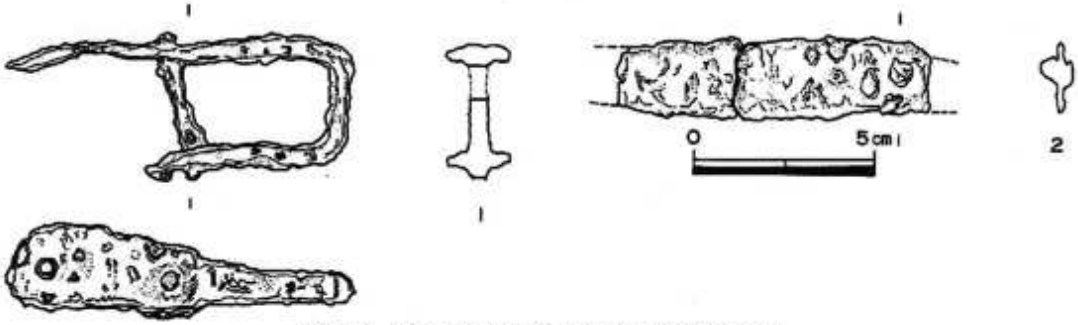
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	32×24	20×20	18×13	28×20	31×23	23×20	25×17	20×18	24×14	14×14	20×18	20×20
深　さ	40	58	46	39	46	16	43	44	9	60	52	52
Pit No.	13	14	15									
規　模	23×22	35×33	18×16									
深　さ	47	59	50									

〈覆土〉　9層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　覆土中より，縄文土器1点，甕形土師器片9点出土した。



第33図　第28号竪穴住居跡および第2号溝状土壙実測図



第34図　第28号竪穴住居跡出土遺物実測図

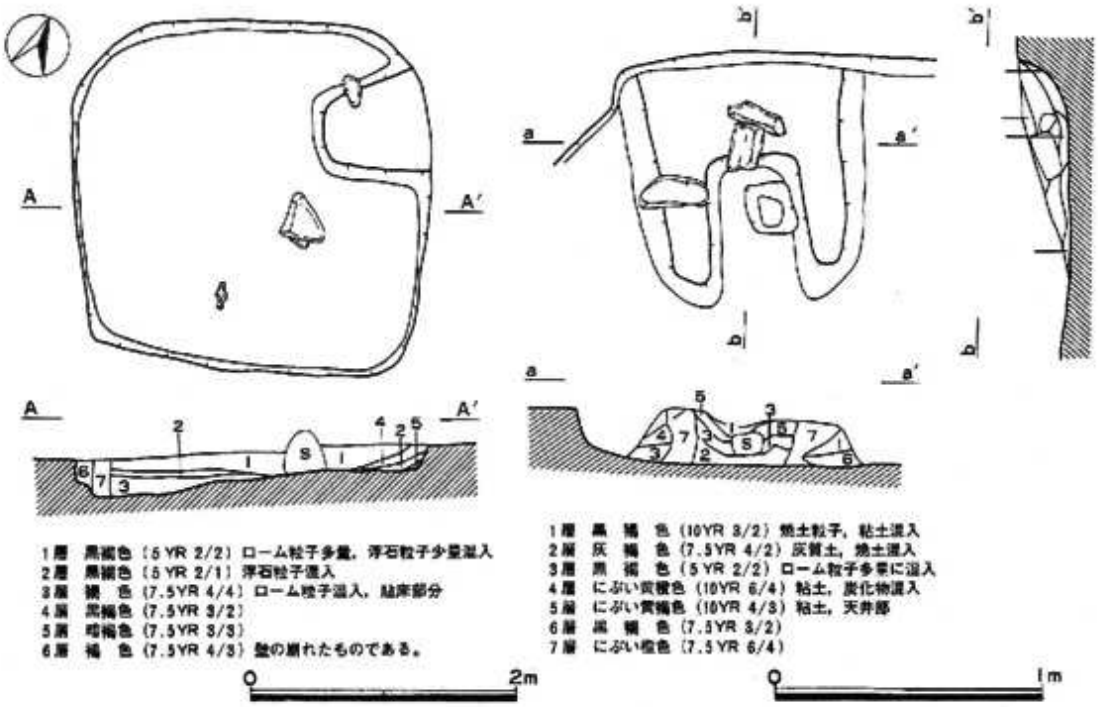
第29号竪穴住居跡　（S I 29）　第35図

〈遺構の位置と確認〉　調査区ほぼ中央に位置する。C・D－7グリッド第Ⅳ層地山上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸2.68m×短軸2.66mの方形を呈する。占地面積は7.1㎡で，主軸方向はN－78°－Eを示す。

〈壁・床〉　壁高は北東壁19cm，南西壁18cm，南東壁14cm，北西壁14cmを測り，床よりほぼ垂直に立ち上がる。床は平坦で，堅くしまっている。

〈カマド〉　北東壁北隅に位置しており，良好に残っている。袖部は大形の自然石を芯材とし



第35図　第29号竪穴住居跡およびカマド実測図

て，にぶい橙色粘土を貼り付けている。燃焼部には天井部に使用されたと思われる自然石が存在する。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　検出されなかった。

〈覆土〉　7層に分層された。自然堆積である。

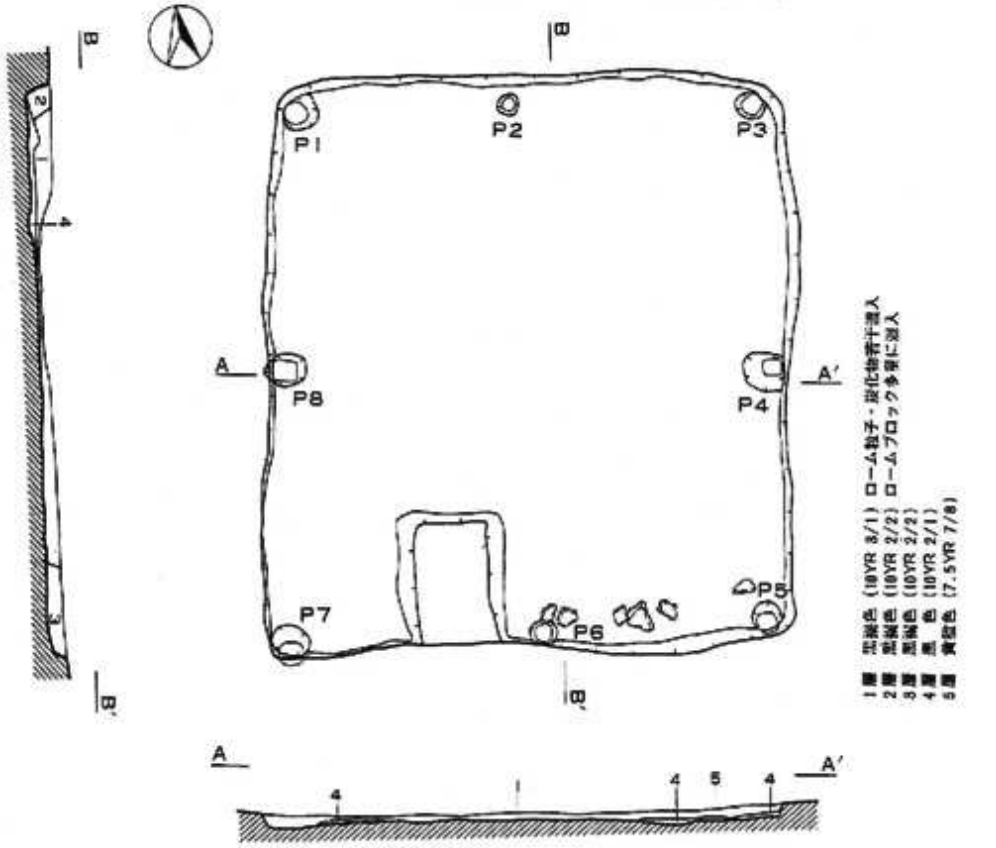
〈出土遺物〉　出土しなかった。

第30号竪穴住居跡　（S I 30）　第36図　図版9

〈遺構の位置と確認〉　調査区中央に位置する。E－8・9グリッド第Ⅳ層地山上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸4.30m×短軸3.92mの方形を呈する。占地面積は16.9㎡で，主軸方向はN－4°－Eを示す。

〈壁・床〉　壁はやや外反しながら立ち上がり，東壁13cm，西壁7cm，南壁20cm，北壁16cmを測る。床は平坦で，堅くしまっており，北側にゆるやかに傾斜する。



第36図　第30号竪穴住居跡実測図　0　2m

〈カマド〉　南壁西寄りに位置する。残存状態は著しく悪い。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　壁際に8個のピットが規則正しく配置されており，これらが柱穴である。

第30号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
規　模	28×28	16×14	22×21	30×30	24×24	20×18	30×24	25×24
深　さ	73	29	58	141	62	35	65	48

〈覆土〉　5層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　覆土中，床面より土師器坏，甕形土器細片を出土したが，図化できるものは存在しなかった。坏形土器は，ロクロ成形されたもので，内面黒色処理が施され，甕形土器は，ロクロ成形，不ロクロ成形のものがある。

第31号竪穴住居跡　（S I 31）　第37図　図版10

〈遺構の位置と確認〉　調査区南東寄り，E－10グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面において灰黄褐色火山灰の堆積とこれを囲む黒褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸3.00m×短軸2.60mの方形を呈する。占地面積は7.8㎡で，主軸方向はN－46°－Wを示す。

〈壁・床〉　壁はやや外反して床より立ち上がる。壁高は北東壁30cm，南西壁26cm，南東壁28cm，北西壁35cmを測る。床は平坦で堅くしまっている。

〈カマド〉　2基のカマドが存在する。

カマドーA：南東壁東寄りに位置する。袖部は存在しない。煙道部には石の抜き取り痕と思われるピットが認められた。煙道部は壁より1.4m張り出し，ゆるやかに立ち上がる。本遺構構築当初に使用されたものと考えられる。

カマドーB：南東壁西寄りに位置する。残存状態は良好である。袖部，煙道部，天井部とも大形の偏平な自然石を組み合わせて構築したものである。煙道部は壁外に1.15m張り出しており，煙道部は構築時の状態を残している。

〈付属施設〉　なし

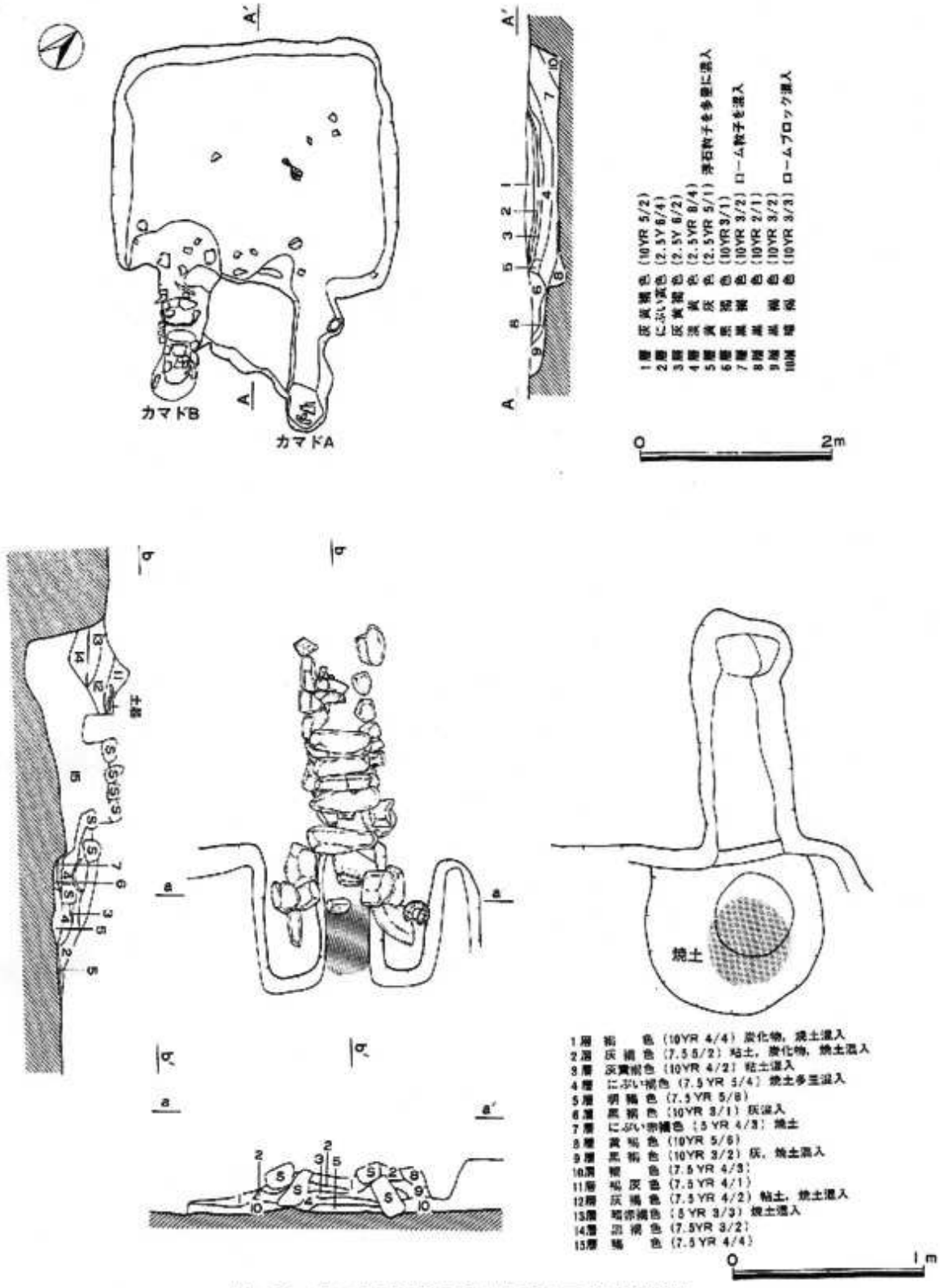
〈柱穴・ピット〉　検出できなかった。

〈覆土〉　9層に分層できた。自然堆積で，1～4層は純粋な大湯浮石の堆積層である。

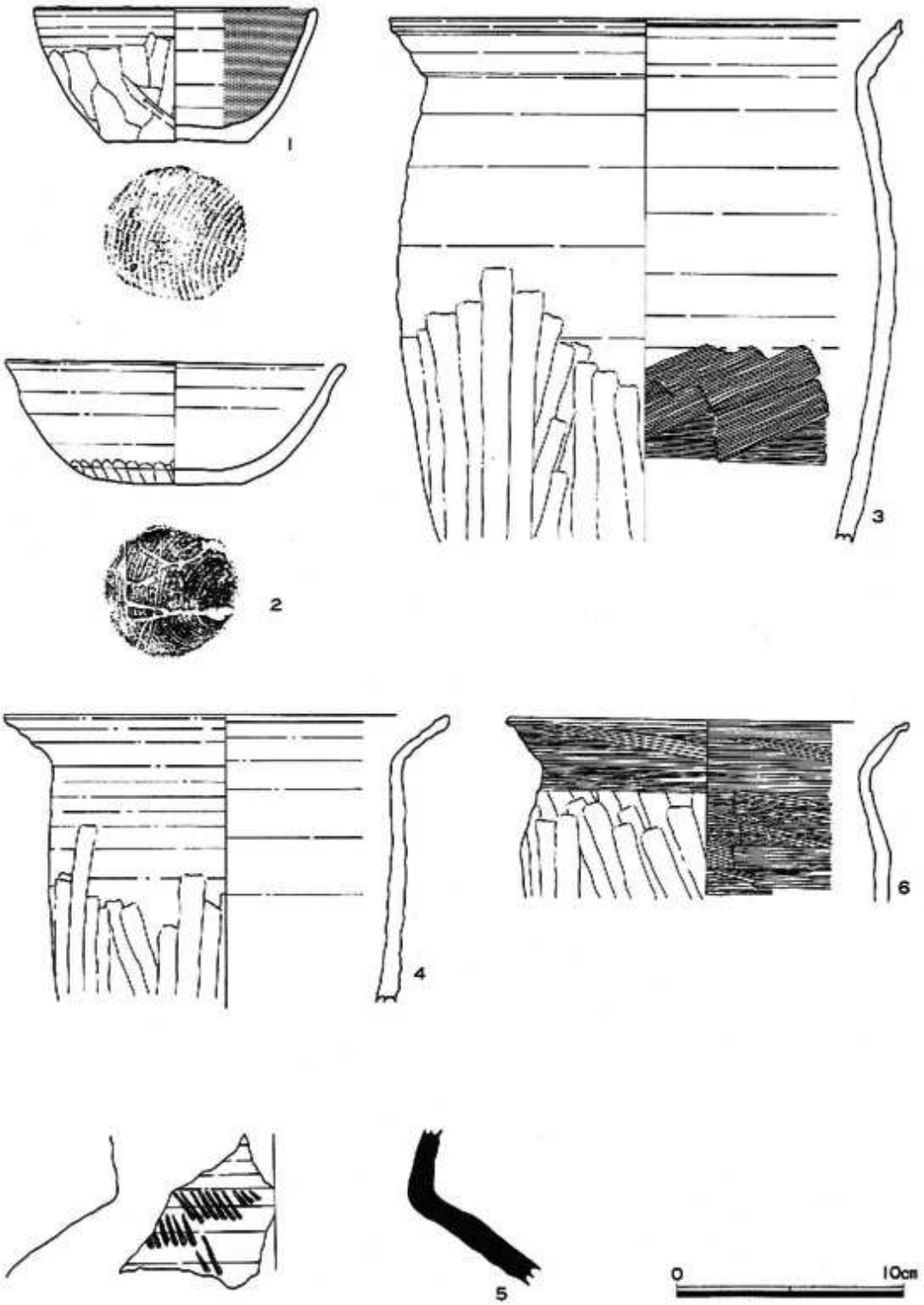
〈出土遺物〉　出土量は遺構中最も多く，覆土中，カマド内より坏形，甕形土師器と須恵器片11点が出土した。

土師器坏（第38図1，2）

1は，ロクロ成形後，体中半にヘラケズリ，内面黒色処理を施こしたもので，底面に



第37図　第31号竪穴住居跡およびカマドB実測図



第38図　第31号竪穴住居跡出土遺物実測図

静止糸切り痕がみとめられる。2は，ロクロ成形後，回転ヘラケズリを施したもので，底面に回転糸切り痕がみられる。

土師器甕（第38図3，4，5）

3は，ロクロ成形後，胴部外面にヘラナデ，内面に刷毛目調整を施したもので，頸部で「く」の字状に外反し，口縁部でさらに直立する形態を呈し，胴部は張りの少ない長胴のものである。4は，ロクロ成形後，胴部にヘラナデを行なう長胴のもので，口縁部はやや強く外反する。5は，口縁部がやや強く外反し，胴部の張るもので，口縁部内，外面にユビナデ，胴部内面は刷毛目，外面にヘラナデ調整が施される。

須恵器壺（第　図6）

ロクロ成形後，口頸部に平行タタキ目を施したものである。

(2) 土　壙

第1号土壙　（SK1）　第39図　図版14

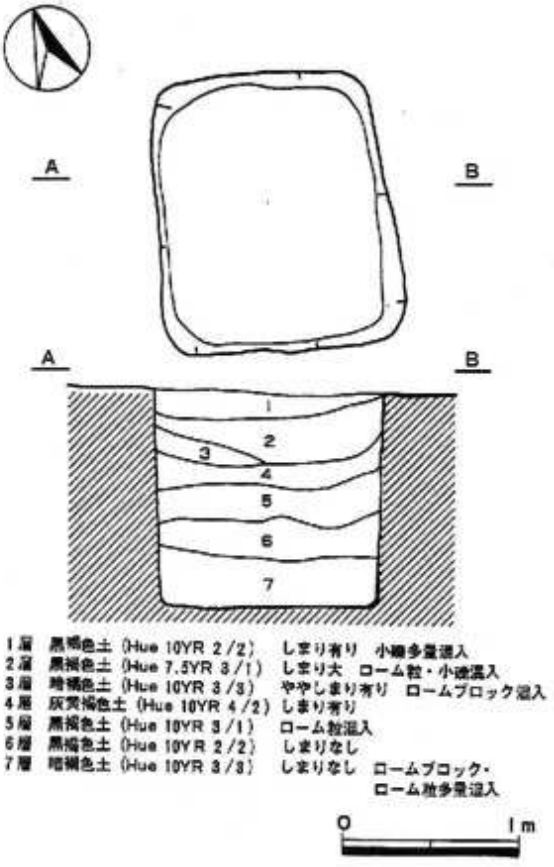
〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄り，G－3グリッドに位置し，第Ⅳ層地山上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸1.60m×短軸1.31m，深さ1.16mの方形を呈する。占地面積は2.1㎡で，長軸方向はN－18°－Eを示す。

〈壁・床〉　各壁とも垂直に立ち上がり，壁高は1.13m～1.16mを測り，床は平坦で堅くしまる。

〈覆土〉　6層に分層された。人為堆積であろう。

〈出土遺物〉　出土しなかった。



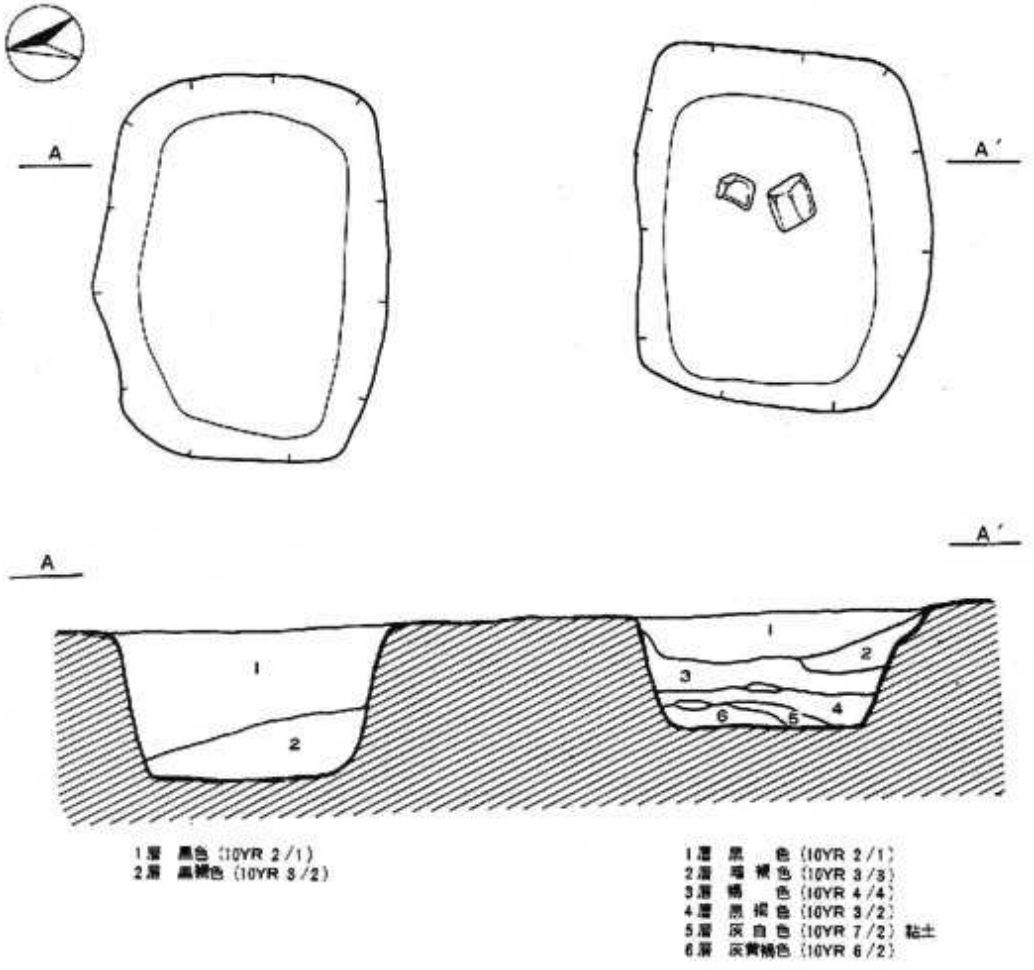
第39図　第1号土壙実測図

第2号土壙　（SK2）　第40図

〈遺構の位置と確認〉　F－6グリッド，第10号竪穴住居跡床面で確認した。

〈形態〉　長軸1.61m×短軸1.24m，深さ0.63mの方形を呈する。占地面積は1.9㎡で，長軸方向はN－76°－Eを示す。

〈壁・床〉　各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で，軟弱である。



第40図　第2，3号土壙実測図

〈覆土〉　2層に分層された。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

第3号土壙　（SK3）　第40図

〈遺構の位置と確認〉　F－6グリッド，第21号竪穴遺構床面において確認した。

〈形態〉　長軸1.50m×短軸1.23m，深さ0.47mの方形を呈する。占地面積は1.8㎡で，長軸方向はN－73°－Eを示す。

〈壁・床〉　各壁とも外反して立ち上がる。床は平坦で軟弱である。

〈覆土〉　6層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

(3) 溝状遺構

第1号溝状遺構　(SD1)　第4図

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄りをゆるやかに蛇行し，台地を横断する。

〈形態〉　長さ28.8m，幅0.6m～1m，深さ0.6m，横断面は「U」字状を呈する。

〈出土遺物〉　覆土中より土師器片が出土した。

第2号溝状遺構　(SD2)　第4図

〈遺構の位置と確認〉　調査区南側斜面とほぼ平行して確認された。

〈形態〉　長さ39m，幅0.5m～1.8m，深さ1m～1.2m，横断面形は「U」字状を呈する。

〈出土遺物〉　覆土中より土師器片が出土した。

第3号溝状遺構　(SD3)　第4図

〈遺構の位置と確認〉　調査区東寄りに位置する。第Ⅳ層地山上面において確認した。

〈形態〉　長さ15m，幅0.5m～1.3m，深さ0.3m～0.6m，横断面形は「U」字状を示す。

〈出土遺物〉　覆土中より土師器片が出土した。

3．古代・中世の遺構とその出土遺物

(1) 竪穴遺構

第1号竪穴遺構　(ST1)　第11図

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄り，F－6グリッドに位置し，第Ⅳ層地山上面において確認した。本遺構は第9号竪穴住居跡と重複し，本遺構が新しい。

〈形態〉　長軸4.00m×短軸3.91mの方形を呈する。占地面積は15.6m²で，長軸方向はN－81°－Eを示す。

〈壁・床〉　地山面からの掘り込みが浅い。壁高は東壁2cm，西壁12cm，南壁16cm，北壁2cmを測る。床はゆるやかな凹凸を示す。

〈付属施設〉　なし

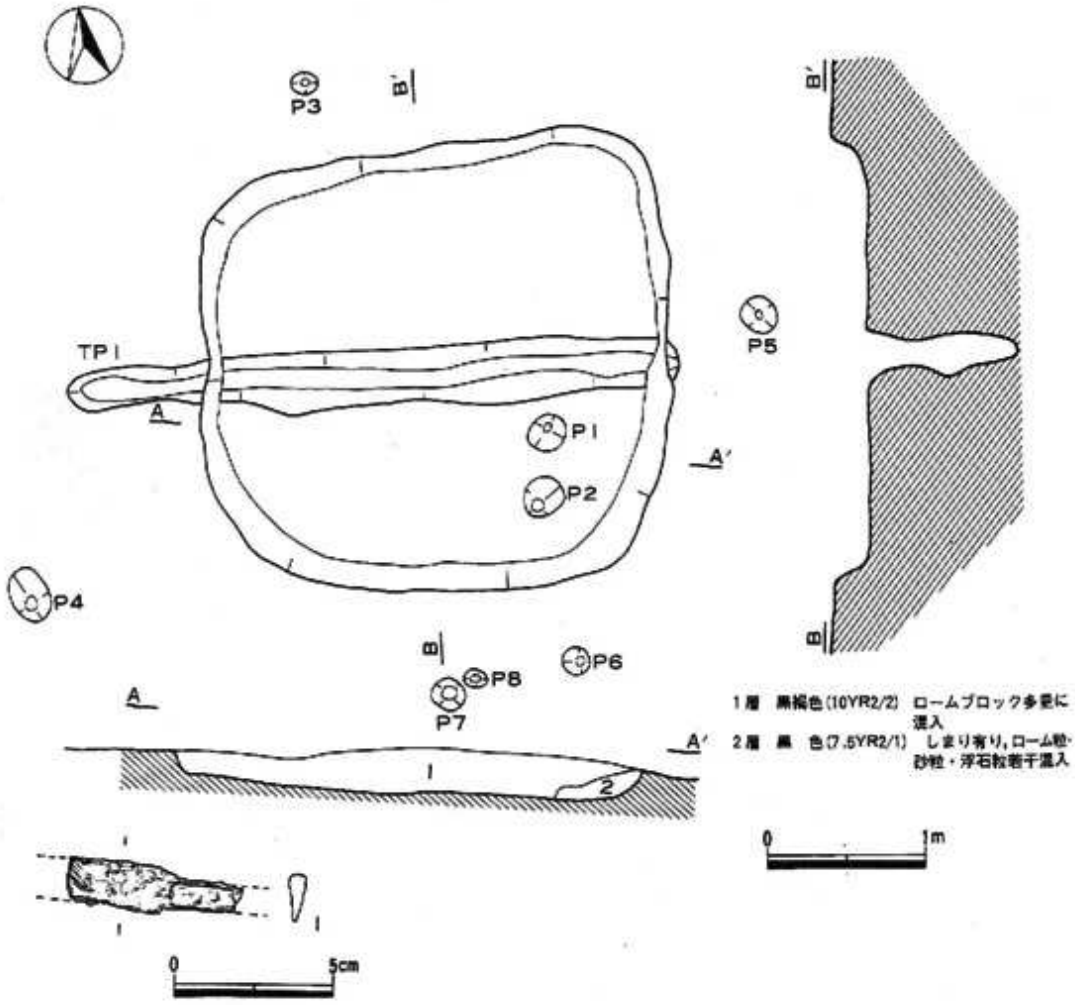
〈柱穴・ピット〉　床にP17～25の9個のピットを検出した。P17, 18, 19, 21が柱穴である。

第1号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	17	18	19	20	21	22	23	24	25
規　模	24×22	25×24	25×22	24×20	26×22	20×20	35×30	20×20	20×18
深　さ	40	42	8	10	19	44	17	32	5

〈覆土〉　人為堆積である。

第41図　第1号竪穴遺構出土遺物実測図



第42図　第2号竪穴遺構と出土遺物・第1号溝状土壙実測図

〈出土遺物〉　小刃，鉄鏃（第41図１，２）の計２点を出土した。

第２号竪穴遺構　（ＳＴ２）　第42図　図版11

〈遺構の位置と確認〉　調査区南西寄りのＧ－６グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は第１号溝状土壙と重複しており，本遺構が新しい。

〈形態〉　長軸2.91ｍ×短軸2.85ｍの隅丸方形を呈する。占地面積は8.3㎡，長軸方向はＮ－82°－Ｗを示す。

〈壁・床〉　壁高は東壁14cm，西壁13cm，南壁20cm，北壁18cmを測り，やや外反しながら立ち上がる。床は全体に貼床を施し，平坦で堅くしまっている。南側床面がより堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　床に２個のピットを検出したほか，遺構外に５個のピットを検出したが本遺構に判うものか確認できなかった。

第２号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
規　模	23×21	27×24	17×13	23×22	27×25	18×18	15×11	21×21	35×24
深　さ	13	12	9	13	9	13	17	28	22

〈覆土〉　２層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　覆土中より鉄器（第42図１）１点出土した。小刃の基部で現残長5.5cmを測る。

第３号竪穴遺構　（ＳＴ３）　第43図

〈遺構の位置と確認〉　調査区南寄り，Ｇ－７・８グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面において暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は第１号溝状遺構と重複しており，本遺構が新しい。

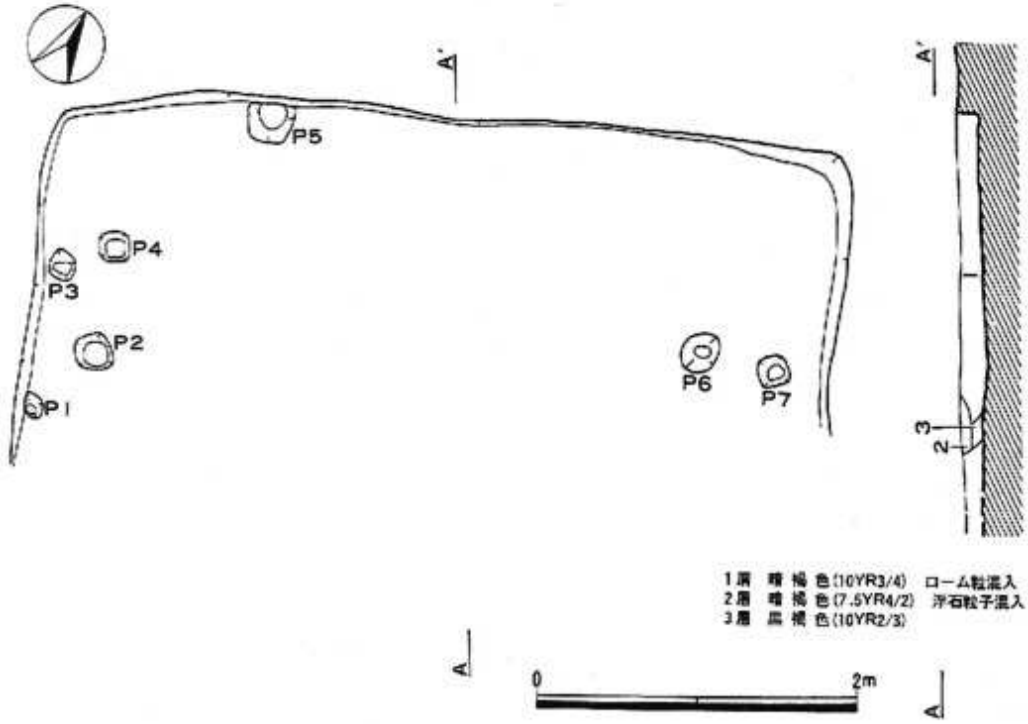
〈形態〉　本遺構南側は調査対象区外のため，すべてにわたって精査することができなかったが，一辺が5.01ｍを測る方形を示すものと思われる。

〈壁・床〉　壁高は東壁12cm，西壁14cm，北壁17cmを測り，床よりほぼ垂直に立ち上がる。床は平坦で，軟弱である。

〈付属施設〉　なし

第３号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7
規　模	14×11	22×22	18×16	19×19	28×28	27×22	20×19
深　さ	11	37	29	31	29	30	34



第43図　第３号竪穴遺構実測図

〈柱穴・ピット〉　床に７個のピットを検出した。

〈覆土〉　４層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

第4号竪穴遺構　（ＳＴ４）　第44図　図版11

〈遺構の位置と確認〉　調査区南西寄りのＨ－６，Ｉ－６グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面で黒色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸2.36ｍ×短軸2.31ｍの方形を呈する。占地面積は5.5㎡で，長軸方向はＮ－13°－Ｗである。

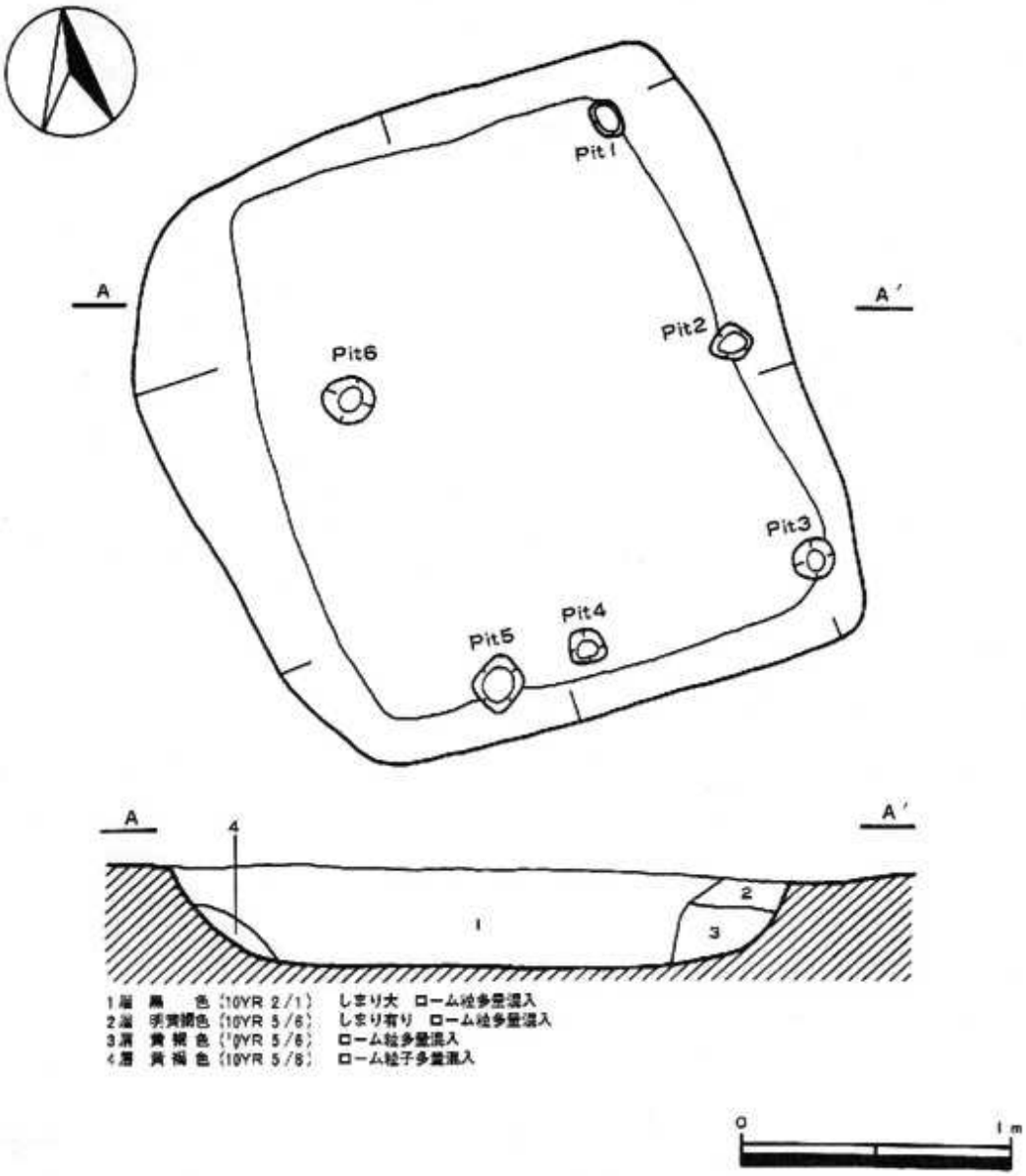
〈壁・床〉　壁はゆるやかに立ち上がり，壁高は東壁26cm，西壁22cm，南壁28cm，北壁29cmを測る。床はわずかな凹凸を示すが，堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　床に６個のピットを検出した。壁に沿って存在するＰ１～３，５，６が柱穴と考えられる。

第４号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6
規　模	14×10	14×13	16×15	13×12	18×17	18×18
深　さ	25	23	33	11	9	14



第44図　第４号竪穴遺構実測図

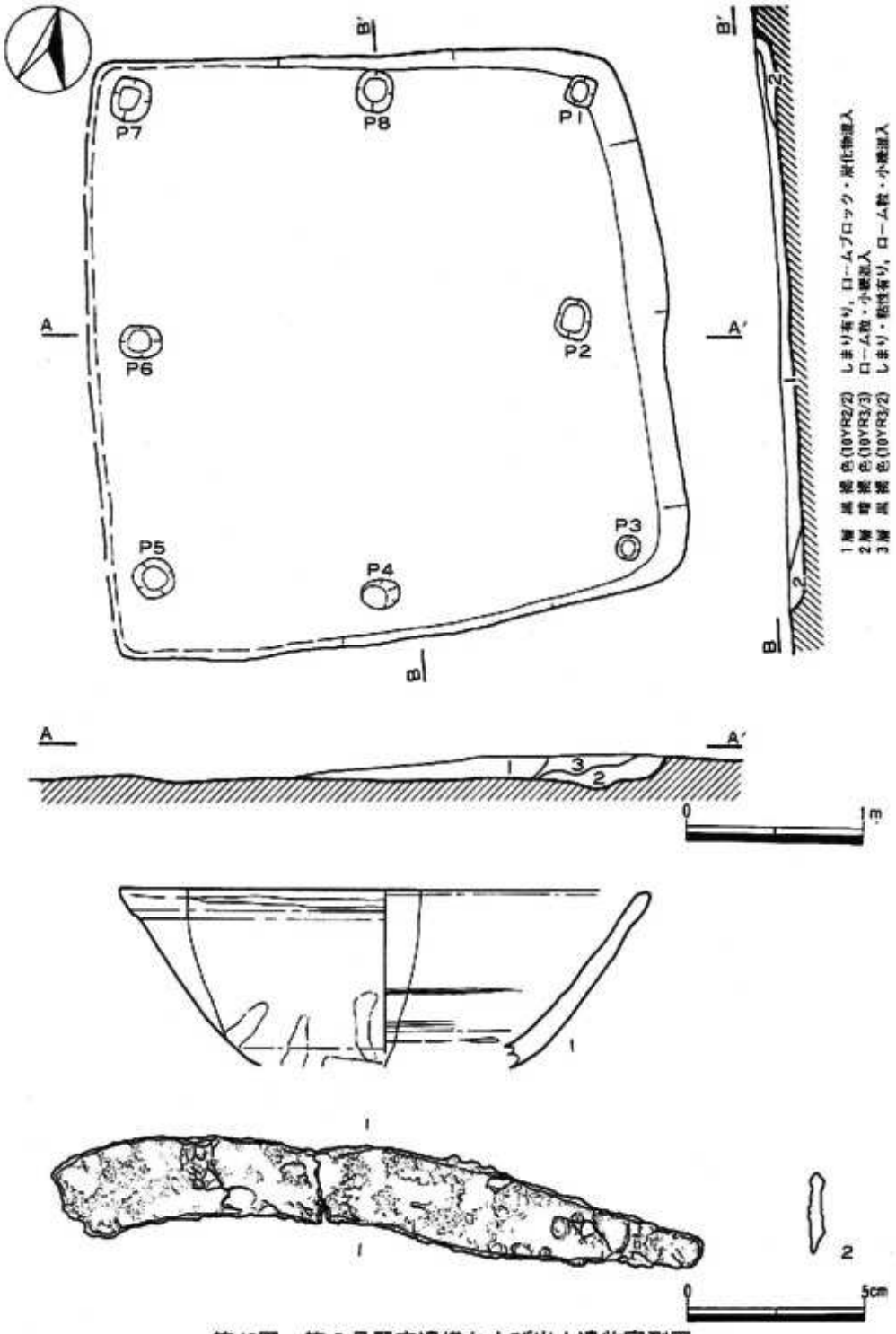
〈覆土〉　４層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

第５号竪穴遺構　（ＳＴ５）　第45図　図版11

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄り，Ｄ－６グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　ピットの配列と床面の軟硬から推定して，長軸3.34m×短軸3.30mの方形を呈する。占地面積は11.0㎡で，長軸方向はN－11°－Wを示す。



第45図　第５号竪穴遺構および出土遺物実測図

〈壁・床〉　西壁は耕作のためすでに削平されている。壁高は東壁10cm，南壁８cm，北壁10cmを測る。東壁のみゆるやかな立ち上がりを示すが，他はほぼ垂直に立ち上がる。床は平坦で堅くしまる。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　各壁隅と壁中央に規則正しい配列の柱穴が確認された。

第５号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
規　模	16×15	23×20	14×12	22×17	22×22	24×19	25×21	23×21
深　さ	34	45	34	30	47	49	42	33

〈覆土〉　３層に分層された。人為堆積である。

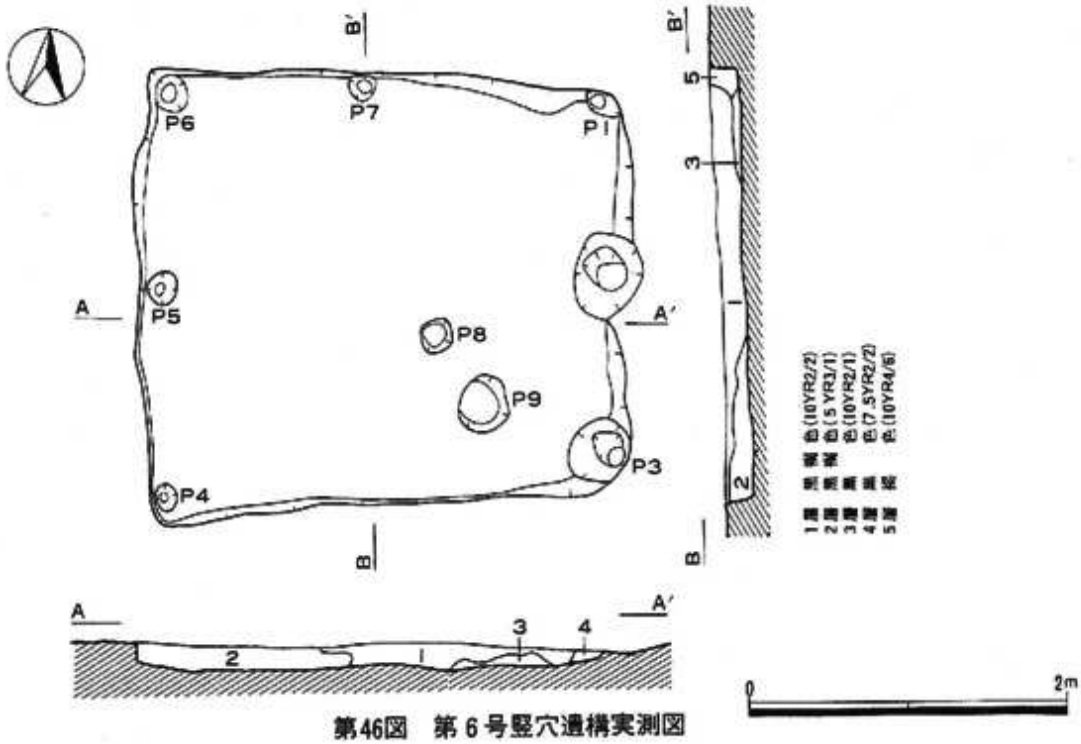
〈出土遺物〉　覆土中より，土師器片13点，白磁片１点，鉄器１点出土した。

白磁（第45図１）

白磁碗の口縁部破片で，推定口径15cm。口唇部外面と体内面下半に調整痕がみられる。釉は底部まで達していない。12～13世紀のものと考えられる。

第６号竪穴遺構　（ＳＴ６）　第46図　図版12

〈遺構の位置と確認〉　調査区南西寄り　Ｆ－５・６グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は第18号竪穴住居跡，第１号溝状遺構と重



第46図　第６号竪穴遺構実測図

複しており，本遺構が最も新しい。

〈形態〉　長軸3.17m×短軸2.72mの方形を呈する。占地面積は8.6㎡，長軸方向はN－65°－Eを示す。

〈壁・床〉　各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。壁高は北東壁11cm，南西壁15cm，南東壁16cm，北西壁14cmを測る。床はゆるやかな凹凸を示し，堅くしまる。

〈付属施設〉　P２・３が他のピットより規模が大きく，このピット間が入口として使用されたと考えられる。

〈柱穴・ピット〉　壁に沿って，床に９個のピットが存在する。P１～７が柱穴と考えられる。

第６号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
規　模	19×15	54×45	41×37	17×12	22×19	31×23	19×17	20×20	36×31
深　さ	38	75	58	46	42	19	22	18	13

〈覆土〉　４層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

第７号竪穴遺構　（ＳＴ７）　第47図　図版５，12

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄り，F－６グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面で褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は第10号竪穴住居跡，第21号竪穴遺構，第１号溝状遺構と重複しており，本遺構が最も新しい。

〈形態〉　長軸3.49m×短軸2.91mの方形を呈する。占地面積は10.2㎡で，長軸方形はN－22°－Wを示す。

〈壁・床〉　各壁とも床よりほぼ垂直に立ち上がり，東壁24cm，西壁13cm，南壁23cm，北壁15cmを測る。床はゆるやかな凹凸を示し，堅くしまる。

〈付属施設〉　北壁東側に0.93m×0.55mの出入口と思われる張り出し施設をもつほか，東壁，南壁，西壁南半分まで巡る，幅18cm程，深さ４cm程の壁溝が存在する。

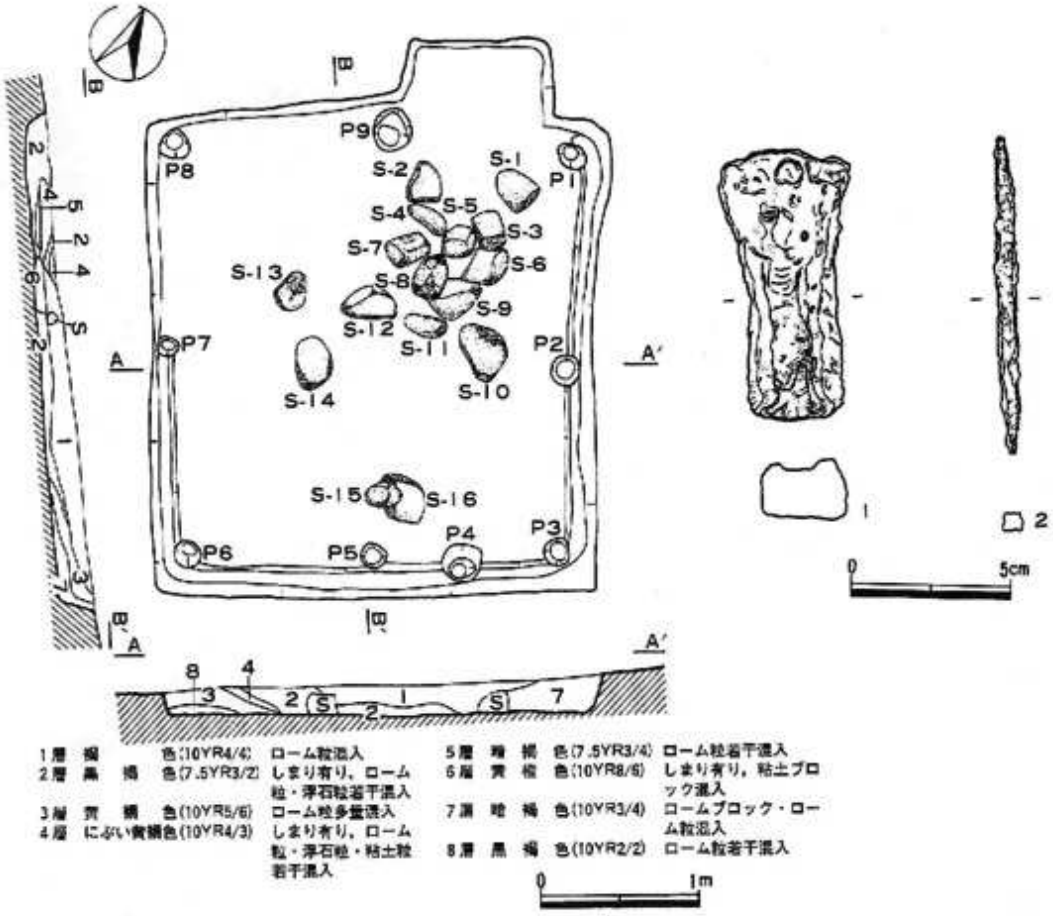
〈柱穴・ピット〉　各壁隅と壁中央に３個ずつのピットの配列が存在する。P１～３，５～９が柱穴である。

第７号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
規　模	20×16	20×18	17×16	24×23	16×16	17×16	13×12	20×18	27×25
深　さ	43	37	39	47	33	59	35	36	63

〈覆土〉　８層に分層された。人為堆積と思われ，覆土中に大形の自然石が投げ込まれていた。

〈出土遺物〉　床直上より鉄器（第47図１，２）２点が出土した。１は手斧，２は釘である。



第47図　第７号竪穴遺構および出土遺物実測図

第８号竪穴遺構　（ＳＴ８）　第48図　図版12

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄り，Ｆ－４グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸3.20m×短軸2.65mの方形を呈する。占地面積は8.5㎡，長軸方向はＮ－３°－Ｅを示す。

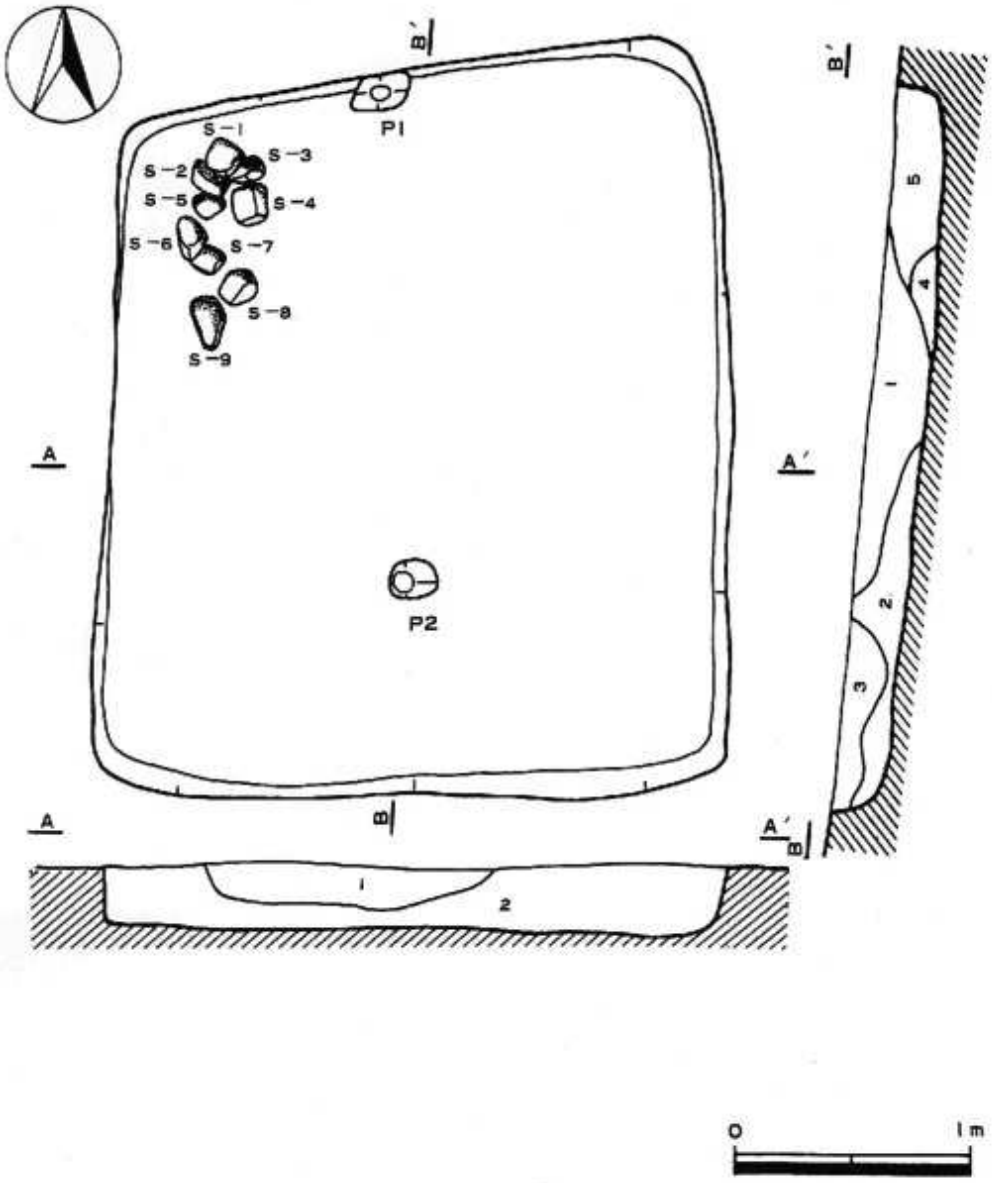
〈壁・床〉　壁高は東壁29cm，西壁24cm，南壁22cm，北壁17cmを測り，床よりほぼ垂直に立ち上がる。床はやや凹凸を示し，南から北へゆるやかに傾斜する。堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　北壁中央と床に各１個検出した。

第８号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2
規　模	21×15	21×16
深　さ	43	33



第48図　第８号竪穴遺構実測図

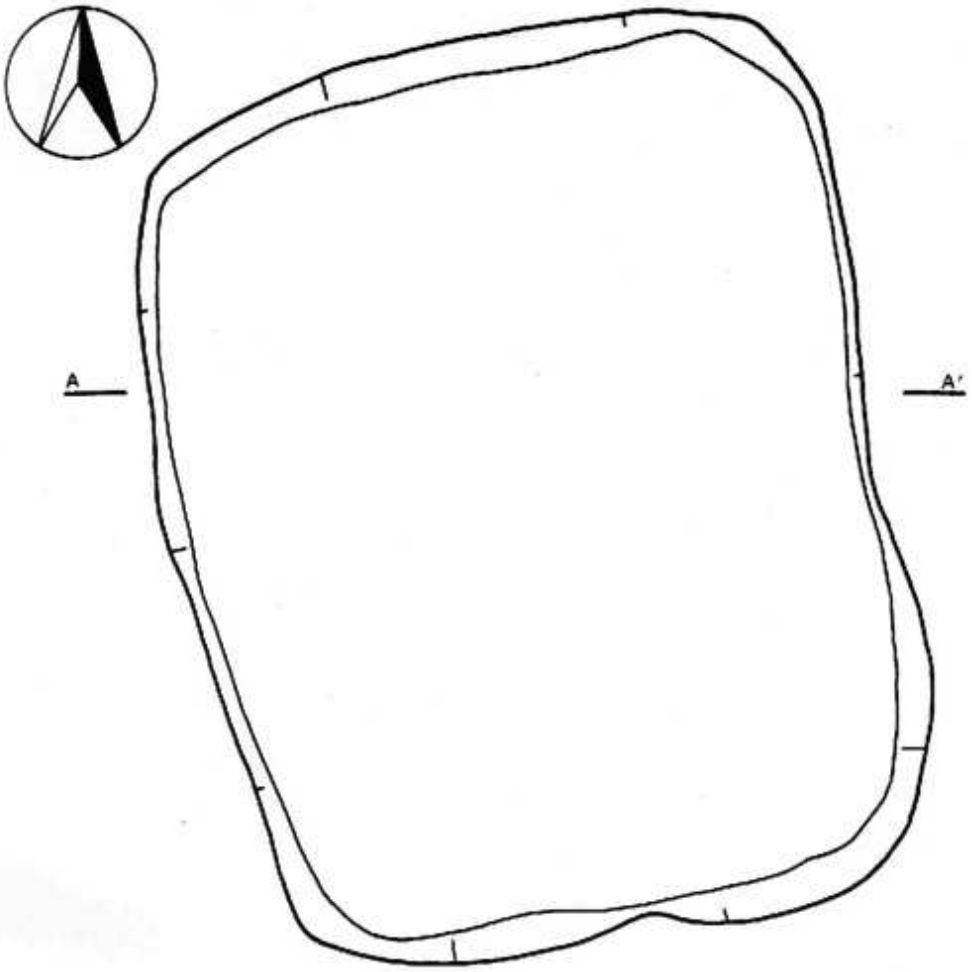
〈覆土〉　５層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　覆土中より土師器甕形土器破片が数点出土した。

第９号竪穴遺構　（ＳＴ９）　第49図

〈遺構の位置と確認〉　調査区北西寄り，Ｃ－５グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面において浮石粒の混入する暗褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸2.94ｍ×短軸2.24ｍの方形を呈する。占地面積は6.6㎡で，長軸方向はＮ－12°



1層 暗 褐 色(10YR3/4) しまり有り，ロームブロック若干混入，ローム粒・浮石粒混入
2層 にぶい黄褐色(10YR4/3) ローム粒多量混入，浮石粒混入
3層 灰 黄 褐 色(10YR5/2) しまり有り，浮石粒多量混入
4層 黒 色(10YR2/1) 浮石粒若干混入
5層 黄 褐 色(10YR5/6) ローム粒混入
6層 褐 色 色(10YR4/4) ローム粒・浮石粒混入

第49図　第9号竪穴遺構実測図

ーWを示す。

〈壁・床〉　各壁とも床よりほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東壁19cm，西壁21cm，南壁25cm，北壁21cmを測る。床はゆるやかな凹凸を示し，堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　検出されなかった。

〈覆土〉　6層に分層された。5層を除き少量または多量の浮石粒の混入がみられた。自然堆積である。

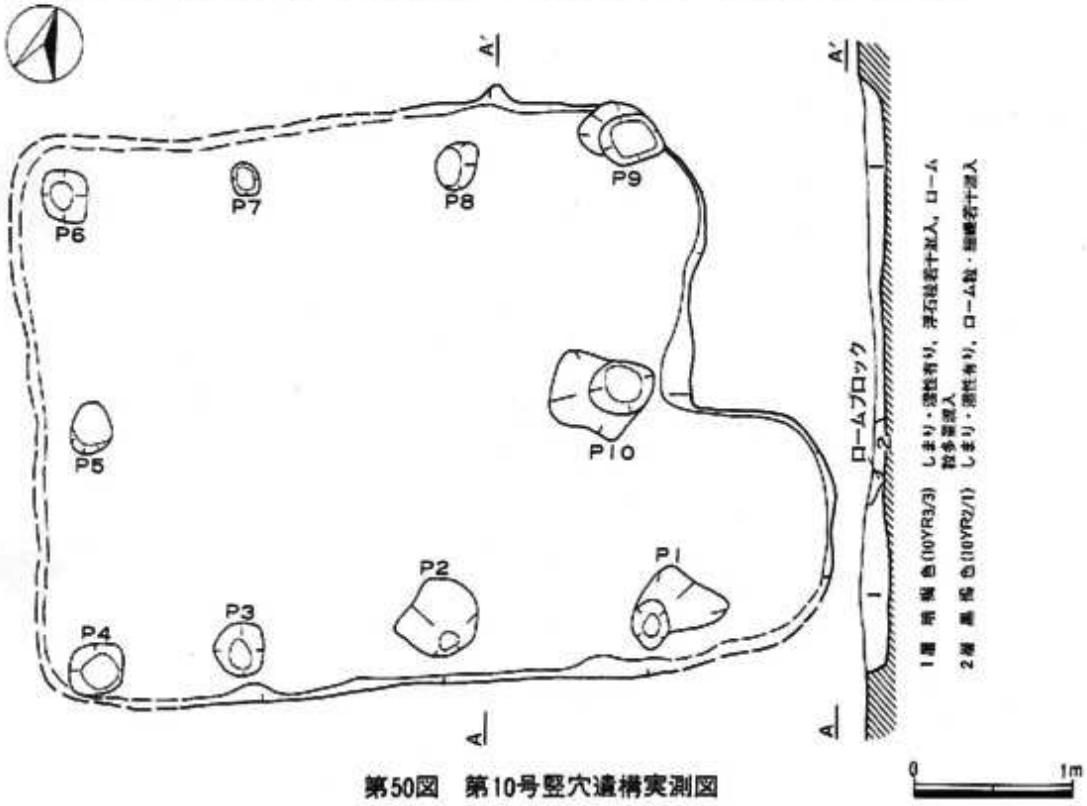
〈出土遺物〉　出土しなかった。

第10号竪穴遺構　（ＳＴ10）　第50図　図版13

〈遺構の位置と確認〉　調査区中央，Ｄ－８・９グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面において暗褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　ピットの配列と床の状況から推定して，長軸4.99m×短軸3.88mの方形を呈する。占地面積は17.1㎡で，長軸方向はＮ－68°－Ｅを示す。

〈壁・床〉　耕作のため，北西壁西側と南西壁は存在しない。残存する壁高は北東壁12cm，南東壁11cm，北西壁15cmを測る。床はゆるやかな凹凸を示し，堅くしまっている。



第50図　第10号竪穴遺構実測図

〈付属施設〉　北東壁南側に1.3m×0.8mの出入口と考えられる張り出し施設が存在する。

〈柱穴・ピット〉　長軸方向の壁に沿って4個，短軸方向の壁に沿って3個のピットが規則的に配列されている。

第10号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	60×44	49×50	33×30	33×31	34×26	32×27	20×17	32×25	48×43	62×51
深　さ	65	50	54	62	39	64	29	45	40	54

〈覆土〉　2層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

第11号竪穴遺構　（ＳＴ11）　第24図　図版13

〈遺構の位置と確認〉　調査区西側，Ｄ－４・５，Ｅ－４・５グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面と第12号竪穴遺構覆土上面において重複して確認された。本遺構西側は調査対象区外のため精査できなかった。

〈形態〉　一辺が4.24mの方形を呈するものと思われる。

〈壁・床〉　西壁は調査対象区外のため検出できなかった。壁高は東壁6cm，南壁5cm，北壁7cmを測る。床は平坦で堅くしまり，東側床は貼床である。

〈付属施設〉　床中央に，10cm～45cmの角礫を25個使用して構築された石組炉が存在し，その下部には80cm×75cm，深さ15cm程の掘り込みが確認された。

〈柱穴・ピット〉　検出されなかった。

〈覆土〉　1層のみの堆積である。

〈出土遺物〉　覆土中より，土師器甕形土器片と須恵器片が出土した。

土師器甕（第51図1，2，3）

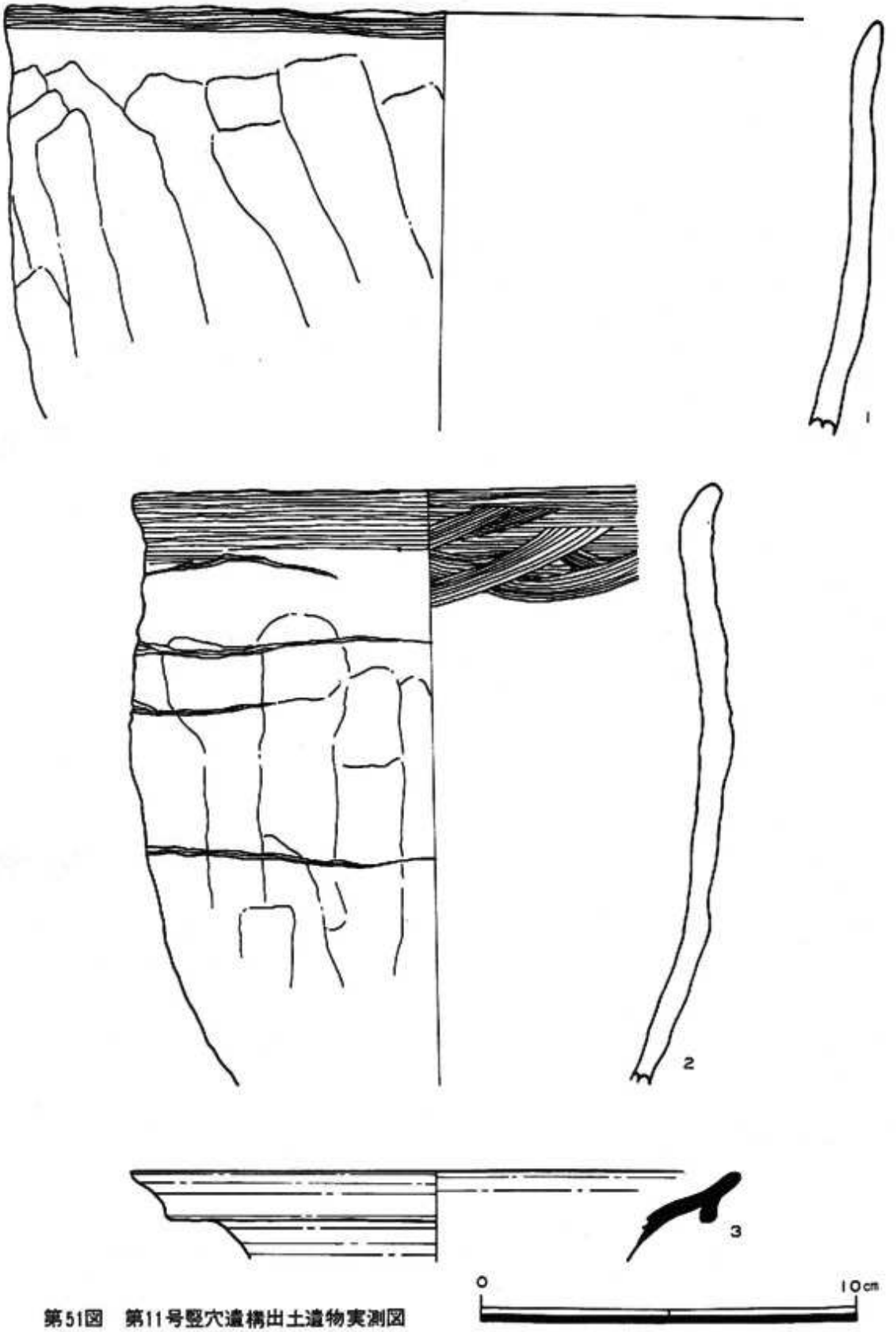
1は甕の口縁部破片である。口縁部は先細となりわずかに外反する。調整は口縁部はユビナデ，胴部はヘラナデで，口径23cmを測る。胎土に小石が多く含まれる。

2は甕の口縁部から胴部にかけての破片で，口縁部は短かく，ゆるやかに外反する。調整は口縁部にユビナデ，胴部はヘラナデを行ない，口径は15.6cmを測る。胎土に小石を多く含む。器外面には明瞭な輪積み痕がみられる。

3は須恵器瓶の口縁部破片である。口径は16cmを測る。内面には自然釉がみられる。

第12号竪穴遺構　（ＳＴ12）　第24図

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄り，Ｄ－４・５，Ｅ－４グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面，第21号竪穴住居跡覆土上面および第11号竪穴遺構床面において確認した。新旧関係



第51図　第11号竪穴遺構出土遺物実測図

は第11号竪穴遺構が最も新しく，次に本遺構，第21号竪穴遺構の順に古くなる。

〈形態〉　長軸6.00m×短軸5.50mの方形を呈する。占地面積は33.0㎡で，長軸方向はN－15°－Wを示す。

〈壁・床〉　各壁ともほぼ垂直に立ち上がり，壁高は東壁20cm，西壁22cm，南壁14cm，北壁10cmを測る。床は平坦で堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　各壁に沿って22個，北壁と平行して6個，床に4個の計32個を検出した。床に存在するP28～30，32を除くものが柱穴と考えられる。ピットの重複から2回の建てかえが想定される。

第1期　P1～4，15～22，24，25，27，28の配列

第2期　P5～8，15～22，24，25，27，28の配列

第3期　P9～23，25，27，28，5の配列　　である。

第12号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	44×35	28×26	28×24	25×20	23×22	23×22	26×22	25×	30×28	22×22	24×20	23×21
深　さ	36	32	60	74	90	52	54	55	53	49	70	44
Pit No.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
規　模	24×21	26×24	30×25	26×25	25×25	40×32	27×24	30×29	27×24	36×32	35×30	28×28
深　さ	34	37	62	72	60	50	48	58	62	45	45	16
Pit No.	25	26	27	28	29	30	31	32				
規　模	22×21	24×24	25×24	24×21	26×26	23×22	23×21	24×23				
深　さ	25	32	12	11	34	16	29	53				

〈覆土〉　13層に分層された。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

第13号竪穴遺構　（ST13）　第11図

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄り，E－6グリッドに位置し，第9号竪穴遺構と重複して確認された。本遺構が新しい。

〈形態〉　ピットの配列から推定される規模は長軸3.14m×短軸2.38mの方形を呈する。占地面積7.5㎡で，長軸方向はN－24°－Wである。

〈壁・床〉　各壁ともほぼ垂直に立ち上がるもので，壁高は北東壁11cm，南西壁7cm，南東壁5cm，北西壁5cmを測る。床はゆるやかな凹凸を示す。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　壁際に9個のピットを検出した。

第13号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	26	27	28	29	30	31	32	33	34
規　模	25×23	27×18	22×20	25×21	27×24	23×22	22×18	25×20	25×24
深　さ	41	12	15	42	37	10	31	10	7

〈覆土〉　黒褐色土の１層の堆積である。

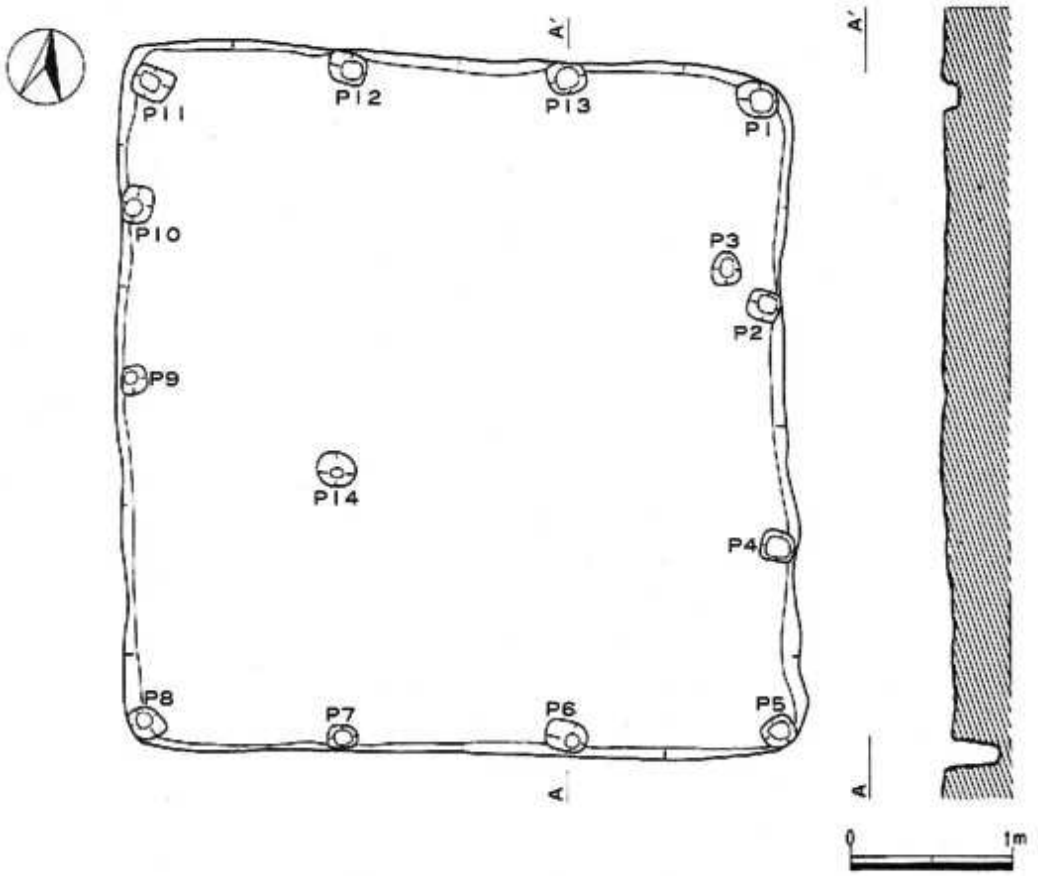
〈出土遺物〉　覆土中より土師器甕破片が26点出土した。底面に木葉痕のみられるものがある。

第14号竪穴遺構　（ＳＴ14）　第52図　図版13

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄り，Ｄ－５・６グリッドに位置する。

〈形態〉　長軸4.38ｍ×短軸4.17ｍの方形を呈する。占地面積は18.3㎡，長軸方向はN－10°－Ｅを示す。

〈壁・床〉　壁高は東壁９cm，西壁４cm，南壁４cm，北壁８cmを測り，床よりほぼ垂直に立ち上がる。床はゆるやかな凹凸を示し，堅くしまっている。



第52図　第14号竪穴遺構実測図

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　各壁際にピット４個の規則的な配列がみられる。Ｐ１，２，４～13が柱穴と考えられる。

第14号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

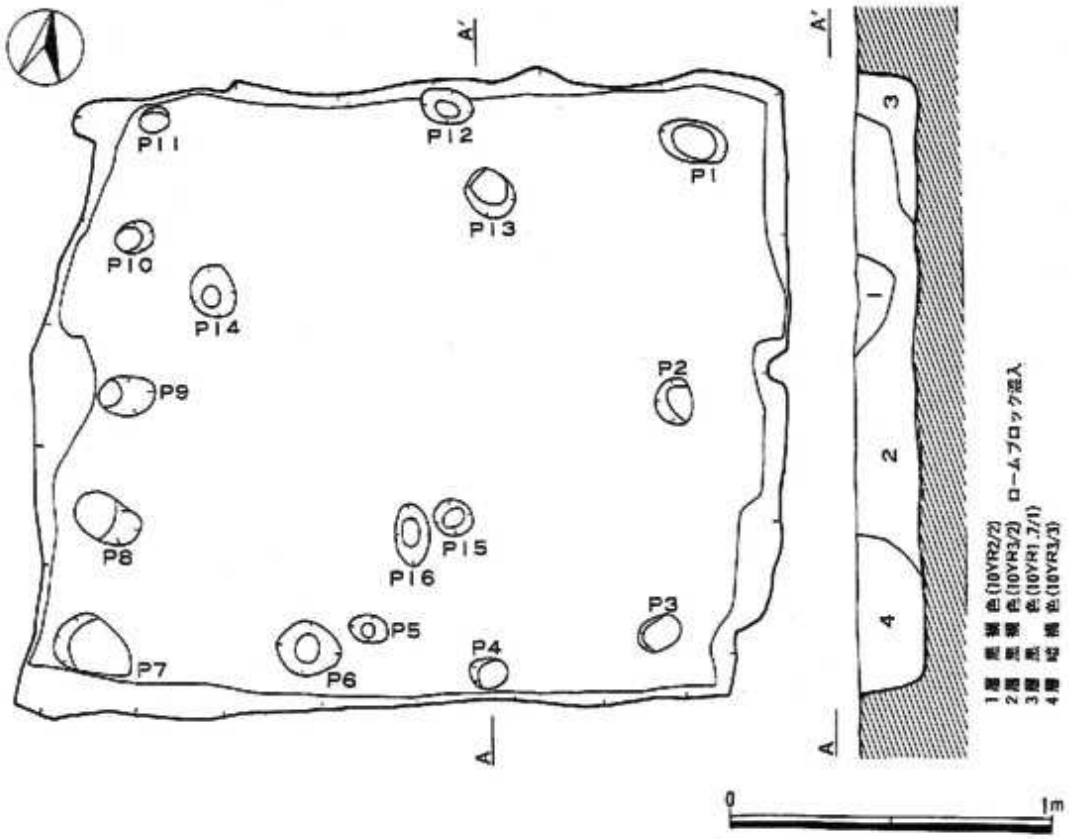
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	25×22	20×19	22×18	21×18	20×19	27×20	18×15	21×18	17×16	24×20	25×21	24×20
深　さ		13	32	21	26	42	34	25	28	39	34	35
Pit No.	13	14										
規　模	23×22	27×21										
深　さ	37	23										

〈覆土〉　１層の堆積であった。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

第15号竪穴遺構　（ＳＴ15）　第53図

〈遺構の位置と確認〉　調査区西端部，Ｈ－２グリッドに位置し，第Ⅳ層地山上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。



第53図　第15号竪穴遺構実測図

〈形態〉　長軸4.71m×短軸3.99mの方形を呈する。占地面積は18.8㎡，長軸方向はN－81°－Eを示す。

〈壁・床〉　各壁とも床よりほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東壁37cm，西壁48cm，南壁40cm，北壁44cmを測る。床は凹凸で，堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　各壁際と床に16個のピットを検出した。P1～3，6，7，9，11，12が主柱穴であろう。

第15号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	43×26	29×23	28×20	24×19	25×17	40×34	53×37	43×28	36×26	25×19	20×15	33×22
深　さ	78	50	34	47	15	30	56	57	66	59	31	27
Pit No.	13	14	15	16								
規　模	32×28	33×28	24×23	39×22								
深　さ	27	28	35	62								

〈覆土〉　4層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

第16号竪穴遺構　（ST16）　第16図

〈遺構の位置と確認〉　調査区北西寄りのD－6グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面において暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は第9号竪穴住居跡と重複しており，本遺構が古い。

〈形態〉　一辺4.10mを測る方形を呈する。占地面積は16.8㎡，長軸方向はN－10°－Eを示す。

〈壁・床〉　東壁は第9号竪穴住居跡に切られ存在しない。東壁を除く各壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がる。壁高は西壁6cm，南壁8cm，北壁8cmを測る。床は平坦で堅くしまる。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　遺構内においてP32～37の6個のピットを検出した。

第16号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	32	33	34	35	36	37
規　模	28×18	17×16	15×15	24×23	36×36	32×31
深　さ	18	47	20	26	24	23

〈覆土〉　3層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

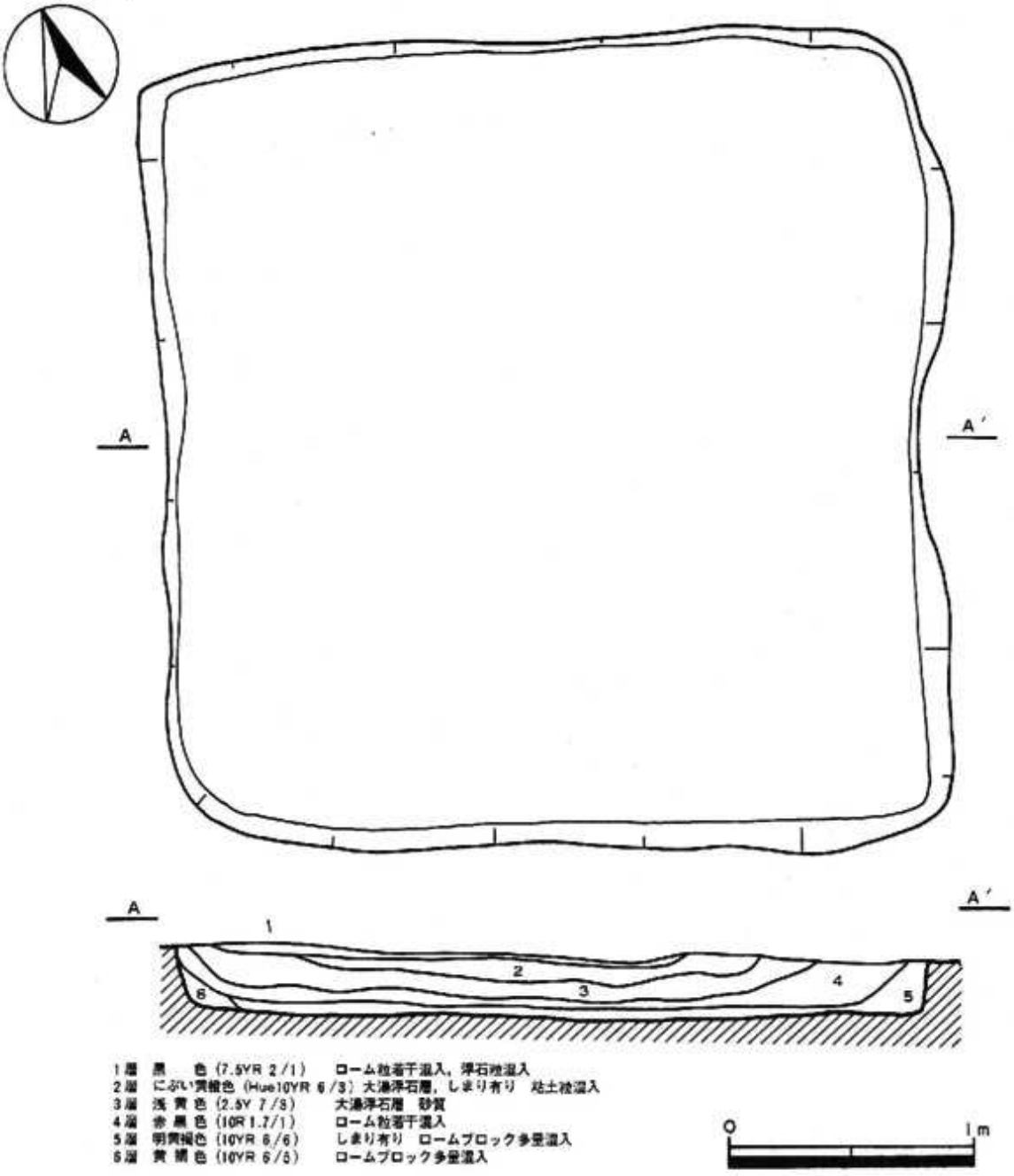
第17号竪穴遺構　（ST17）　第54図　図版

〈遺構の位置と確認〉　調査区ほぼ中央に位置する。第Ⅳ層地山上面において浮石粒の混入す

る黒色の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸3.27m×短軸3.24mの方形を呈する。占地面積は10.6㎡で，長軸方向はN－26°－Eを示す。

〈壁・床〉　各壁とも床よりほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東壁23cm，西壁24cm，南壁20cm，



第54図　第17号竪穴遺構実測図

北壁15cmを測る。床は平坦で，堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　検出されなかった。

〈覆土〉　6層に分層され，2，3層には大湯浮石の堆積層が存在する。自然堆積である。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

第18号竪穴遺構　（ＳＴ18）　第56図

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄り，Ｅ－４・５，Ｆ－４・５グリッドに位置する。第Ⅳ層地山上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。第22号竪穴遺構と重複し，本遺構が新しい。

〈形態〉　長軸3.36m×短軸3.07mの方形を呈する。占地面積は10.3㎡，長軸方向はＮ－30°－Ｗを示す。

〈壁・床〉　各壁ともわずかに外反して立ち上がるもので，壁高は北東壁8cm，南西壁22cm，南東壁6cm，北西壁20cmを測る。床は堅くしまっており，床中央が幾分高い。

〈付属施設〉　遺構内に9個のピットを検出した。Ｐ54，55，57，58が規模の大きさから柱穴と考えられる。

第18号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
規　模	23×23	25×23	29×22	28×28	38×30	54×18	26×21	22×17	26×20
深　さ	49	37	11	61	48	20	30	14	20

〈覆土〉　1層のみの堆積である。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

第19号竪穴遺構　（ＳＴ19）　第55図　図版14

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄り，Ｃ－６グリッドに位置し，第Ⅳ層地山上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸2.40m×短軸2.04mの方形を呈する。占地面積は4.8㎡で，長軸方向はＮ－80°－Ｅを示す。

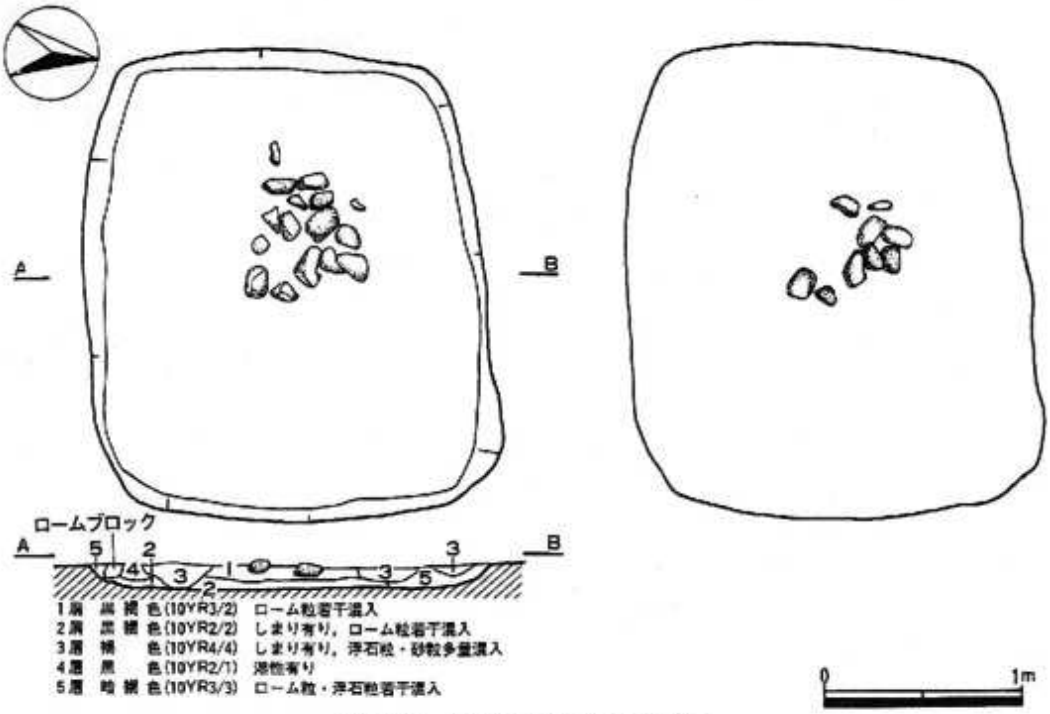
〈壁・床〉　各壁とも床よりゆるやかな角度で立ち上がる。壁高は東壁10cm，西壁9cm，南壁9cm，北壁12cmを測る。床は中央へ向けて各壁よりなだらかに傾斜し，堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　検出されなかった。

〈覆土〉　5層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　出土しなかった。



第55図　第19号竪穴遺構実測図

第20号竪穴遺構　（ＳＴ20）　第16図

〈遺構の位置と確認〉　調査区北西寄り　Ｃ－６グリッドに位置し，第14号竪穴住居跡覆土上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

〈形態〉　長軸2.62m×短軸2.08mの方形を呈する。占地面積は5.4㎡で，主軸方向はＮ－23°－Ｅを示す。

〈壁・床〉　各壁ともほぼ垂直に立ち上がり，北東壁17cm，南西壁14cm，南東壁11cm，北西壁18cmの壁高を測る。床は平坦で，堅くしまり，ゆるやかに北西側に傾斜する。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　床にＰ29～31の３個のピットを検出した。

第20号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	29	30	31
規　模	21×21	25×23	33×32
深　さ	10	20	9

〈覆土〉　６層に分層された。６層を除き，自然堆積を示す。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

第21号竪穴遺構　（ＳＴ21）　第12図　図版５

〈遺構の位置と確認〉　調査区南西寄り，F－6グリッドに位置する。本遺構は，第10号竪穴住居跡，第7号竪穴遺構，第1号溝状遺構，第2，3号土壙と重複しており，新旧関係は古いものから，第2，3号土壙→本遺構→第10号竪穴住居跡→第1号溝状遺構→第7号竪穴遺構の順である。

〈形態〉　長軸3.80m×短軸3.65mの方形を呈する。占地面積は13.9㎡で，長軸方向はN－20°－Wである。

〈壁・床〉　各壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東壁6cm，西壁10cm，南壁3cm，北壁7cmを測る。東壁南側と南壁東側は第7号竪穴遺構に切られ存在しない。床は平坦で，堅くしまっていた。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　床に4個のピットを検出した。

第21号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3
規　模	18×11	15×10	20×20
深　さ	39	24	8

〈覆土〉　堆積層は1層である。

〈出土遺物〉　出土しなかった。

第22号竪穴遺構　（ＳＴ22）　第56図

〈遺構の位置と確認〉　調査区西寄りのE－4・5，F－4・5グリッドに位置し，第Ⅳ層地山上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。第18号竪穴遺構と重複しており，本遺構が古い。

〈形態〉　長軸10.30m×短軸9.84mの方形を呈する。占地面積は101.3㎡で，長軸方向はN－58°－Eを示す。

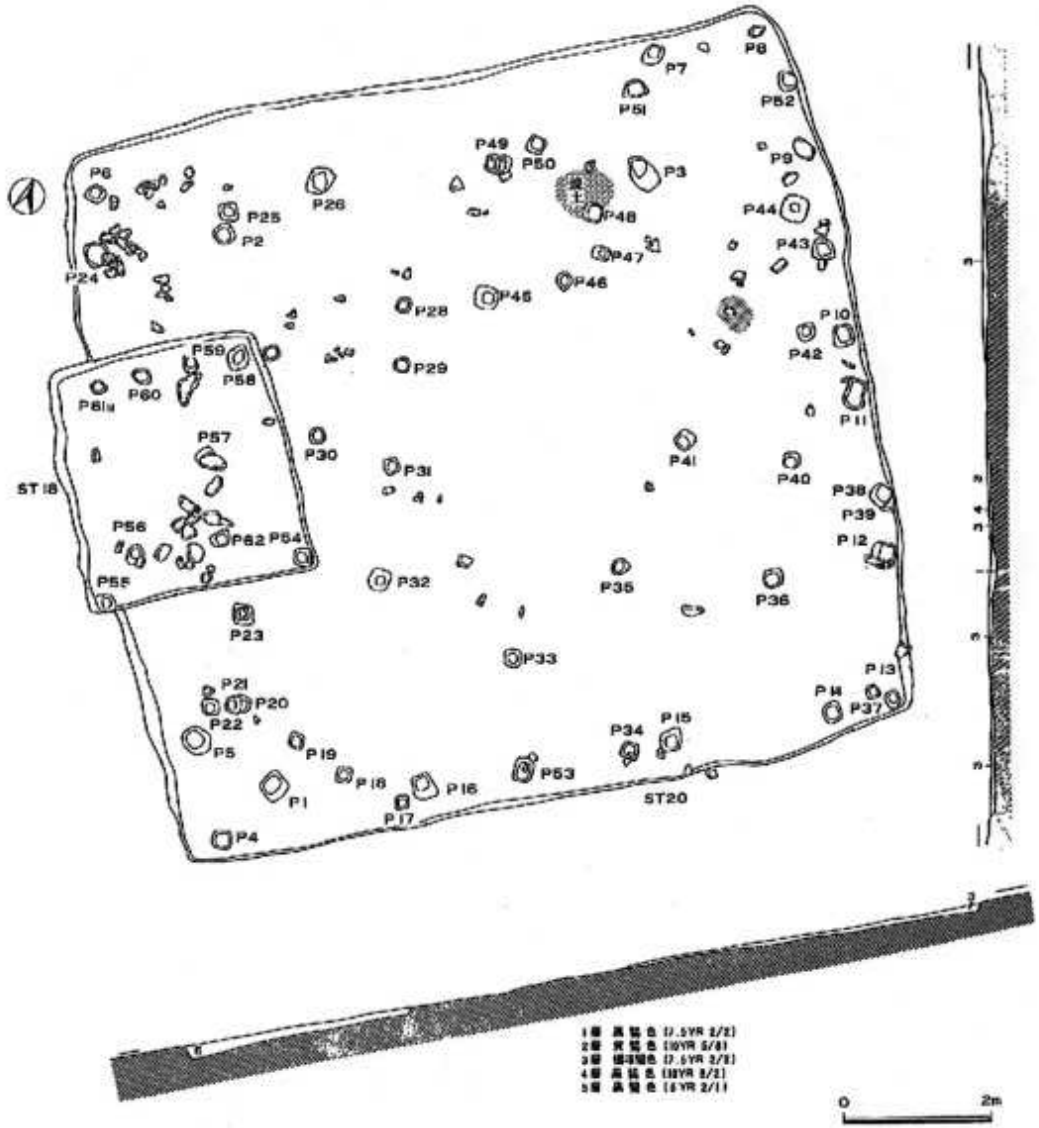
〈壁・床〉　壁高は北東壁10cm，南西壁8cm，南東壁8cm，北西壁10cmを測り，やや外反して床より立ち上がる。床はゆるやかな凹凸を示し，堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴・ピット〉　壁際，床に53個のピットを検出した。規模からみてP1～16，36が柱穴と考えられる。

第22号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	34×33	32×28	53×33	24×24	42×34	28×24	34×26	25×16	35×23	28×26	50×30	35×32
深　さ	164	71	156	35	54	50	62	62	63	53	49	61
Pit No.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
規　模	22×20	26×25	37×27	32×30	17×17	20×20	20×20	20×	22×20	22×22	26×25	32×30
深　さ	47	68	64	63	11	16	15	19	48	27	38	34

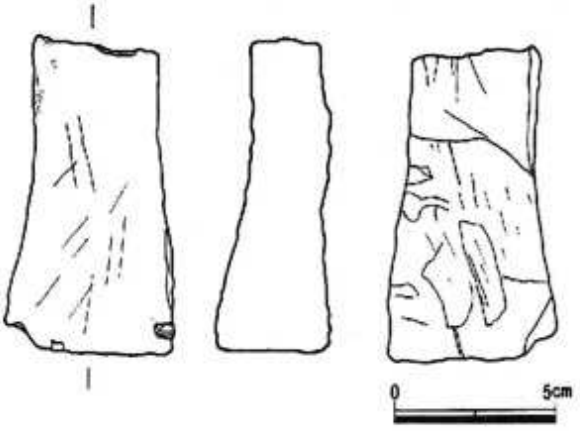


第56図　第18・22号竪穴遺構実測図

Pit No.	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
規　模	24×22	41×32	21×18	22×19	22×22	20×20	25×30	32×32	22×22	23×22	24×23	25×24
深　さ	39	20	12	65	14	15	14	30	26	33	16	36
Pit No.	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
規　模	20×20	28×27		23×20	26×24	24×22	30×30	34×34	32×30	26×20	24×20	26×24
深　さ	3	26		20	58	11	39	48	33	8	9	40
Pit No.	49	50	51	52	53							
規　模	34×27	22×22	35×24	28×24	32×24							
深　さ	9	52	24	34	42							

〈覆土〉　4層に分層された。人為堆積である。

〈出土遺物〉　覆土中より土師器甕形土器片少量と砥石1点を出土した。砥石は4面の砥面をもつもので，手持ち砥石と考えられる。



第57図　第22号竪穴遺構出土遺物実測図

4．遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は量的にも少なく，復元，図化できたのは，土師器坏3点，甕1点，須恵器破片3点，白磁2点，土製品1点鉄製品5点，石器1点である。

土師器坏（第58図1～3）　図版

1～3はロクロ成形によるもので，器外，内面に再調整を施さない。切り離し技法は回転糸切りである。胎土は緻密で焼成は良い。色調は浅黄褐色。3は口径，底径に対して器高の低い小形坏で，内面黒色処理が施される。

土師器甕（第58図4）　図版

口径14.5cm，底径7cm，器高14.1cmの小形甕である。口縁部内，外面はユビナデ，胴部外面はヘラナデ，内面は刷毛目調整が施される。胎土に小石を含み，色調は淡橙色である。

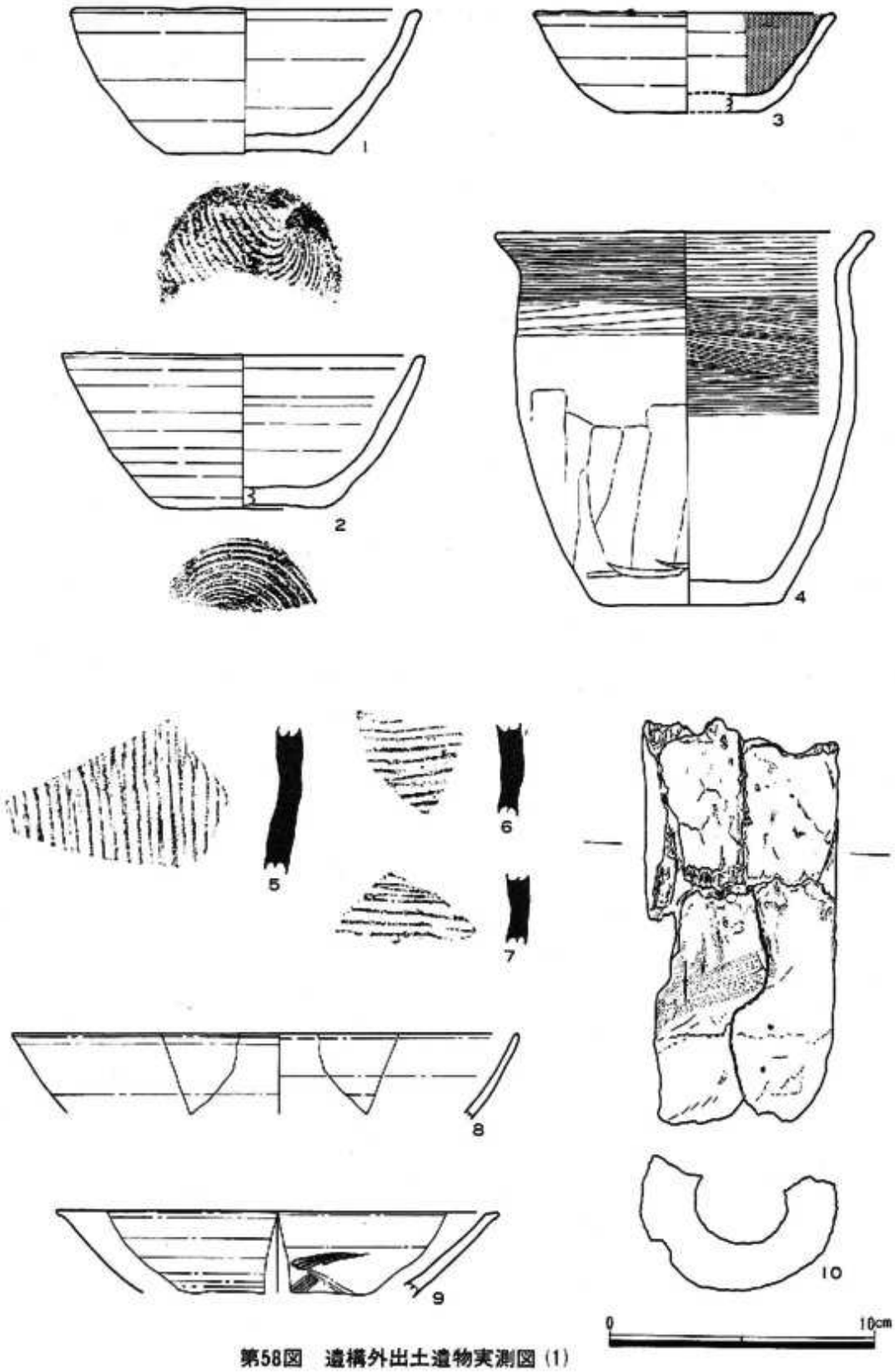
須恵器　（第58図5～7）

大形の甕の破片と思われる。器外面に平行タタキ目が施される。このほか外面にヘラナデ，ヘラケズリの施されたものも存在する。

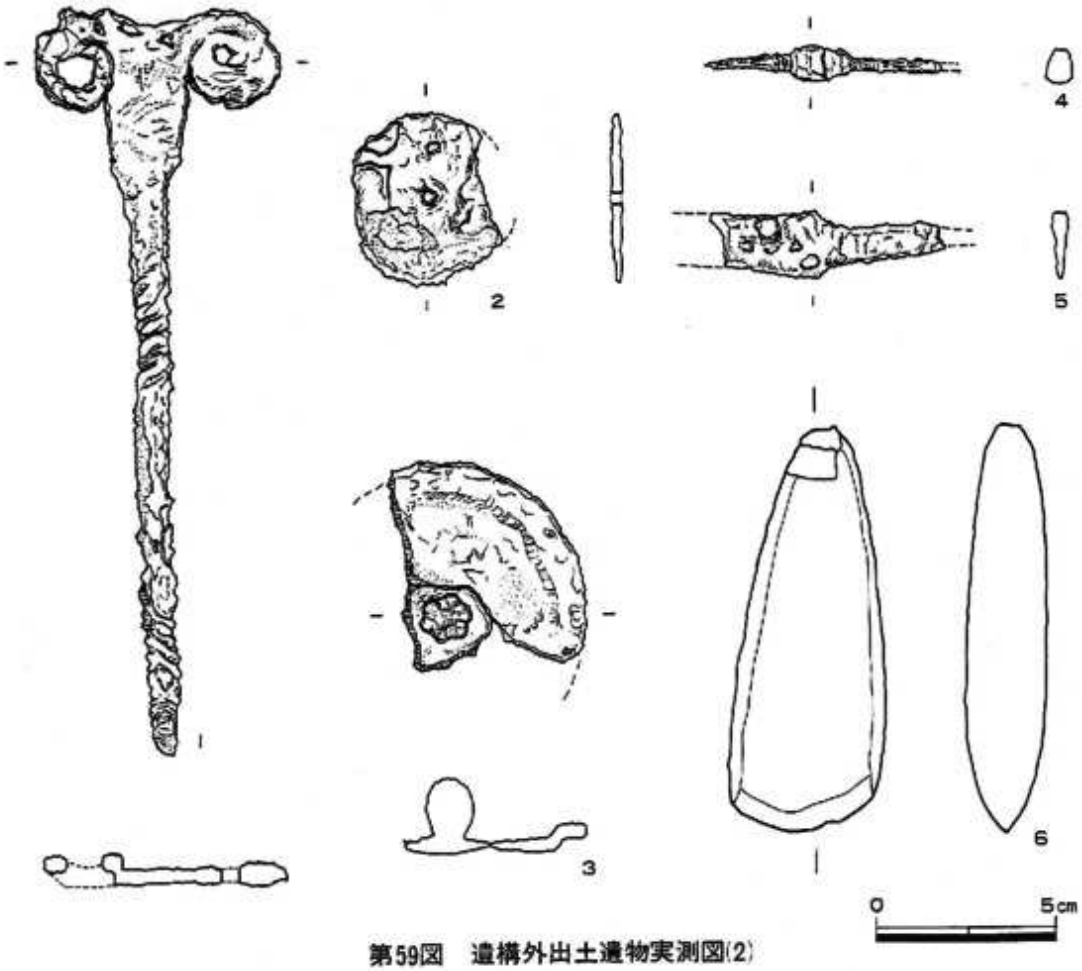
白　磁　（第58図8，9）

2点とも椀の小破片と思われる。強引に図化したもので，8の推定口径19cm，9は16.6cmである。

土製品　（第58図10）



第58図　遺構外出土遺物実測図（1）



第59図　遺構外出土遺物実測図(2)

鞴羽口片である。先端部は高温使用を思わせるようにガラス状になっている。

鉄製品　(第59図1～5)

1は火箸で，基部が半の角状に内彎しており，第15号竪穴住居跡出土のものと同型で，一対になるものと思われる。現存長は20.5cmで，2回のひねりが入れられる。2は軸部を欠損する径5cmの紡錘車である。3は径9cm程の蓋で，中央につまみがつく。4は鉄釘，5は小刃の基部である。

石　器　(第59図6)

長さ11.3cm，幅4.2cm，厚さ2.2cmの磨製石斧である。両凸刃で，石質は凝灰岩である。

(藤井安正・佐藤　樹)

第Ⅳ章　小　　結

1．大湯浮石層と遺構との関連について

鹿角地方において，プライマリー的な状態で黒色土中に十和田火山の降下火山灰である大湯浮石層が認められる。この浮石層は鹿角地方においては大湯浮石層と，青森，岩手県においては十和田ａ降下火山灰と呼ばれ，広く東北北部に認められ，遺跡，遺構に対してその年代を決定付ける大きな鍵層となっている。

本遺跡においては大湯浮石層はプライマリー的な状態では存在せず，第Ⅰ層とⅡ層間に部分的に堆積している。これは第Ⅰ層が耕作土に使用されたためと思われる。また，確認された遺構55のうち，浮石粒・浮石層の混入，堆積層の存在するものがあり，これらの有無によって３分類することができ，次のようなことが推察された。

分類１：浮石層の混入，堆積のみられないもの。

竪穴住居跡（以下住居跡とする）が廃棄されてからある程度の時間がたち，すでに住居跡内に浮石粒の混入，堆積層のみられない土砂が流れ込んだものと考えることができ，このような堆積を示す遺構は大湯浮石降下以前に構築されたものと思われる。ただし例外としてはすでに住居跡内が覆土で満されていても，この覆土上に浮石の混入土，または堆積層が存在することも考えられる。

分類２：覆土中に浮石粒が凸レンズ状に堆積し，層をなしているもの。

住居跡が廃棄されてからの時間差によってその堆積状況は異なる。例えば浮石層が床面直上または浮石層と床面間に他の堆積土が存在するが極めて薄い場合は，浮石降下直前または降下時期とほとんど時間差の少ないものと考えられ，この時間差が大きくなる程，浮石層と床面間の堆積土は厚さを増し，分類１に近づくものと考えられる。

分類２の例である第31号住居跡を観察すると，浮石の堆積を平面でみると住居跡全域にわたっている。断面をみると浮石層は凸レンズ状に床面近くまで達しており，浮石層下の堆積土は極めて薄い。この事から本住居跡は廃棄されてから，浮石降下までほとんど時間差の少ない時期まで使用されていたものと考えられる。

分類３：覆土堆積土中に浮石粒が混入するもの。

分類２の浮石層上面においてもこのような状態が認めることができるが，しかし分類３の場合は浮石堆積層が認められない事から，浮石降下以後，浮石層とこの下層を掘り下げ遺構を構築したものと考えられ，廃棄後に覆土である黒色土等に混入して流れ込んだものと思われる。

以上のように本遺跡で検出した遺構の浮石粒の混入，浮石層の存在から３分類することができ，個々の推察から浮石降下以前の分類１から，降下直前の分類２→降下以後の分類３への移

行が考えられ，重複関係からも裏付けされる。これらの分類を遺構ごとに表にすると第２表のようになる。さらに分類したものを第４図遺構分布図に照し合せると，分類１は第21号住居跡，第15号竪穴遺構をはじめとし遺跡の存在する台地西側に，分類２は第31号住居跡をはじめとして２棟隣接して遺跡中央よりやや南東側に，分類３は数回の建て替え，時間差をもって遺跡全域に分布しており，浮石降下以前は台地西側を中心として，降下以後は台地全域にわたって生活の場として使用されていたことがうかがえる。

第２表　浮石粒の混入・堆積別一覧表

	竪穴住居跡	竪穴遺構
分類１	第12，21号	第５，15号
分類２	第31号	第17号
分類３	第１～６，９，10，13～19，22～30号	第１～４，６～14，16，18～22号

２．竪穴住居跡

本遺跡で検出された住居跡は27棟であり，そのほとんどが土師器を伴出する。

（規模）　検出された住居跡はいずれも方形を基調とするものである。長軸×短軸の規模で最大のものは第14号住居跡の9.36m×8.24m，最小のものは第３号住居跡の2.53m×2.50mであり，住居跡の約８割が長軸3.60m～6.20m×短軸3.30m～5.80mのやや広い範囲に集中する。また床面積についてみると，最大床面積をもつ第14号住居跡の77.1㎡，最小床面積をもつ第３号住居跡の 6.3㎡であり，床面積12㎡～34㎡の範囲に約８割が集中し，分布する。

（カマドの位置と構造）　カマドが構築されている壁を観察すると，東壁，南壁とは明確にすることができないものが存在するが，北東壁を東壁，南東壁を南壁とするならば，東壁にカマドが存在するもの16棟，南壁に存在するもの11棟で，その比率は６：４となる。カマドが東壁に存在するものは遺跡の存在する台地西側に多く，南壁に存在するものは台地北側の斜面に対して平行して，または弧を画くように分布している。カマドの位置は住居跡を構築する際に最大の関心事であり，カマドを最大限に活用するには当時の風向きと強い関連性があったものと推察される。

カマドの構造について観察すると，大形の自然石を芯材として袖部，天井部を作り出し，煙道部は短かく，燃焼部からやや急に立ち上がるものが圧倒的に多いが，ただ１例ではあるが第31号住居跡の形態を示すものがある。これは袖部と燃焼部の構造に他との共通性をもつが，煙道部が１m以上も壁外に張り出し，しかも石組による半地下式のものである点で異なる。

（柱穴）　柱穴の位置について観察すると，次のように分類することができた。

分類１：住居内において柱穴が検出されなかったもの，または存在しても規則性の認められ

なかったもの……第31号住居跡など計９棟

分類２：各壁隅に柱穴が各々存在するもの……第17号住居跡など計２棟

分類３：各壁隅の柱穴と各壁隅のピットを結んだ対角線上に柱穴が存在するもの。

……第28号住居跡など計５棟

分類４：各壁隅の柱穴とその間に１～３個の柱穴が存在するもの

……第23号住居跡など計13棟

の以上４分類であり，これらの上部構造を考えると，切妻，切上，寄棟造りの上屋構造が考えられる。

また大湯浮石層との関連をみると第２表のような分布となり，浮石降下以前のもの３棟，以後のものが24棟で，以後のものが圧倒的に多く，数回の建替え，時間差をもって台地全域にわたって生活の場としている。カマドについては降下以前には煙道部の短かいもの，長いものが共存しているが，降下以後には煙道部の長いものは存在しなくなる。

３．竪穴遺構

本遺跡より検出された竪穴遺構は22棟で，覆土中より土師器，須恵器，白磁，鉄器を出土するものが数例存在する。

（規模）　長軸2.40m～10.30m×短軸2:40m～9.84mのものが存在するが，その多くは長軸４m×短軸３m程度の範囲に集中し，床面積では5㎡～20㎡の範囲に多く集中する。また形態的には方形を基調するものが多いが，２例のみ付属施設をもつものが存在する。

付属施設をもつものは第７・10号竪穴遺構であり，その形状からみて出入口施設と考えられるが推定の域を出ない。この施設をもった遺構は，市内では新斗米館跡，小平遺跡，東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査で，また比内町・谷地中「館」遺跡などの多数の遺跡から確認されており，しかも確認された多くの遺構は中世の館関係の遺跡に多くみられることから，本遺跡で確認された２例は，形態の類似から中世の遺構と考えられる。

またこのような付属施設をもたない遺構の覆土中，床面直上からは土師器片が出土しており，さらに大湯浮石降下以前のものが存在することから平安時代まで構築時期が溯るものが存在すると考えられる。

これらの遺構の性格，機能については，カマドなどの生活施設の存在しないことから，倉庫・簡易住居・宿舎等が考えられるが，いまだ統一見解がなされていないのが現状である。

４．出土遺物

本遺跡より出土したものは土師器を中心遺物として，須恵器，陶磁器，鉄製品，石器でありその量は他遺跡と比べ極めて少ない。

(1) 土師器

坏形土器：坏形土器は第30，31号住居跡と遺構外からで，その量は極めて少なく復元，図化できたのは，第31号住居跡出土の２点，遺構外出土の３点の計５点である。

成形はすべてロクロ成形で，底部切り離し技法，再調整，黒色処理の有無などで４分類することができた。

分類１：底部切り離し技法は静止糸切りで，体中半から下端までヘラケズリを施したもので，この調整は底面まではおよばない。内面黒色処理されたものである。器形は底部から内反ぎみに口縁部に至る。

分類２：切り離し技法は回転糸切りで，体下部にヘラケズリを施したものである。内面黒色処理は行われず，器形は底部より頸部は内反ぎみに，口縁部はやや外反する。

分類３：回転糸切り，無調整のもので内面黒色処理が行われる。小型坏にみられる。

分類４：回転糸切り，無調整のもので内面黒色処理が行われないもので，底部から内反ぎみに口縁部に至るものである。

以上，本遺跡より出土した坏形土器の編年を考えるならば，分類４は氏家氏の設定している第七型式・表杉，入式，桜井氏の第二型式の特徴をもつものであり，他類のものもこの範疇に入るものと考えられる。

甕形土器：最も多く出土したもので，成形はロクロ使用のものと，不使用のものがみられる。

これら甕形土器はロクロ使用，不使用からと，口縁部形態から４分類することができた。

分類１：ロクロ成形によるもので，口縁部がやや長く，頸部より外反する。器形は胴部の張りの少ない長胴で，胴部外面にはヘラナデ調整を施こす。

分類２：ロクロ成形で，頸部から外反して，さらに口縁部で直立するものである。器形は胴部がやや張る長胴で，胴部外面にヘラナデ調整，内面に刷毛目調整を起こす。

分類３：粘土紐巻き上げ成形，口縁部が鋭い稜をなすもので，胴部の張りの少ない長胴である。調整は口縁部はヨコナデ，胴部外面はヘラナデ，内面は刷毛目が施される。巻き上げ痕が明瞭なものが多い。

分類４：成形および調整は分類３と同様である。口縁部はやや短かくゆるい外反を示す。胴部は張りの少ないもの，やや張るものがみられる。

以上，甕形土器は成形段階でロクロが使用される分類１，２と，巻き上げ，ヘラナデを主体とする分類３，４とに技法的に大きく分けられる。また底面には木葉痕，スダレ状圧痕，砂底など成形段階で敷かれたものの圧痕がみられ，これらを整えたヘラ整形のものも存在する。

甕形土器分類１・２・４は坏形土器分類４と共伴して出土しており，これら甕形土器の時期はある程度明示できよう。

(2) 須恵器

本遺跡より出土した須恵器は遺構内19点，遺構外８点の計27点である。器形は第11号竪穴遺構出土の甕形を除きすべて壺形である。調整は外面にヘラナデ，平行タタキ目を施こしたものが存在し，内面には数例あて板痕のみられるものが存在する。

(3) 陶磁器

特徴的なものとして白磁３点があげられる。いずれも椀形で小破片で，12～13世紀のものである。

（藤井安正）

第Ⅴ章　調査のまとめ

高市向館は鹿角市花輪字高市向に所在する中世の館跡である。西方に延びる標高150～152mの舌状台地に位置し，自然地形を巧みに利用した多郭連続式の館で，空堀により区切られた5郭の郭と1個の丘状地形からなる。この度の調査は花輪第二中学校建築に伴う緊急調査であり，最も東端に位置する郭（Ⅴ郭）がその対象地であった。

高市向館という名称は，この館の所在する字名をとってつけたもので，文献上は見当たらない。安村氏の言われるように，すぐ北西に隣接する新斗米館の一部とも考えられるが，発掘調査は東端に位置する一郭においてのみ実施されたものであり，他郭及び空撮等の総合的調査を待たなければならない。

Ⅴ郭中からは平安時代の竪穴住居跡27棟地，古代・中世の竪穴遺構22棟等が検出された。竪穴遺構は中世の館跡等で多数検出され，中世の遺構として扱われてきたが，本遺跡ではその覆土中にレンズ状に大湯浮石が堆積しているものや，土師器を伴うもの等が検出された。このため，竪穴遺構のあるものは平安時代にまで遡ると考えられる。

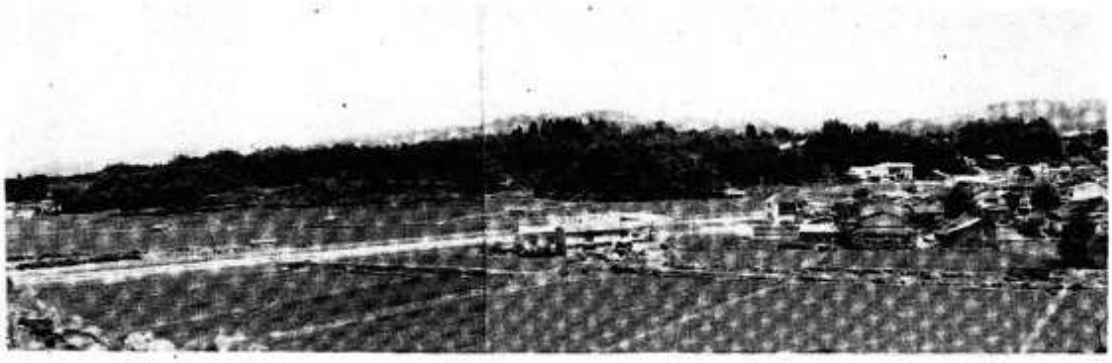
Ⅴ郭は，その防禦施設面では極めて弱い。特に北側の水田までの比高は4m程しかなく，斜面も緩やかである。周囲の館が奈良氏一族の館であることにもよるが，高市向館中でも最東端に位置することから，館の機能よりも集落跡との機能を有していたと考えられる。事実，発掘区から検出された遺構は館期以前のものが多く，遺物も館期と断定できるものは少ない。

鹿角における館の研究・調査は昭和30年の東京大学東洋文化研究所による小枝指館（七ツ館）跡発掘調査に端を発するが，近年，東北縦貫自動車道建設に伴い，発掘件数が増加し，その資料は増加しつつある。これらの資料との比較・検討は今後の課題としたい。

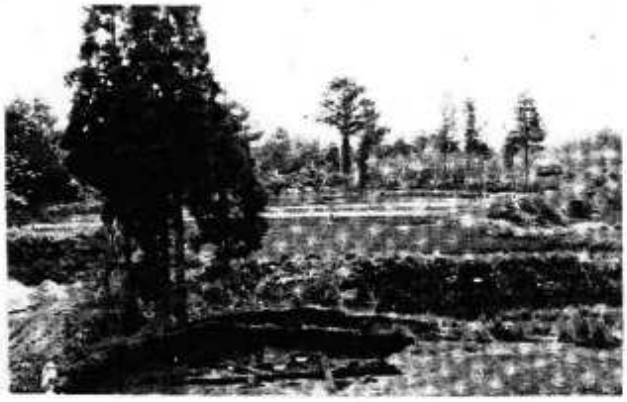
（秋元信夫）

参考文献

江上波夫	「館址　東北地方における集落址の研究」　東京大学出版会	1957年
桑原滋郎	「ロクロ土師器坏について」歴史39	1969年12月
小松正夫	「秋田県の土師器について」考古風土記第2号	1977年4月
秋田県教育委員会	「秋田県の中世城館」	1981年3月
秋田県教育委員会	「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ」	1981年3月
秋田県埋蔵文化財センター	「埋蔵文化財発掘調査報告会発表要旨」	1982年3月
青森県教育委員会	「大平遺跡発掘調査報告書」	1979年3月
青森県教育委員会	「永野遺跡発掘調査報告書」	1979年3月
青森県教育委員会	「青森市三内遺跡」	1979年3月
秋田県比内町教育委員会	「谷地中『館』遺跡」	1978年3月
秋田県鹿角市教育委員会	「烏野遺跡発掘調査報告書」	1978年3月
秋田県鹿角市教育委員会	「小平遺跡発掘調査報告書」	1979年3月
秋田県鹿角市教育委員会	「御休堂遺跡発掘調査報告書」	1981年3月
秋田県鹿角市教育委員会	「新斗米館跡　第Ⅱ次発掘調査報告書」	1981年3月
秋田県鹿角市教育委員会	「鹿角の館(1)」	1982年3月



遺跡遠景



遺跡近景
（Ⅴ郭よりⅢ郭）

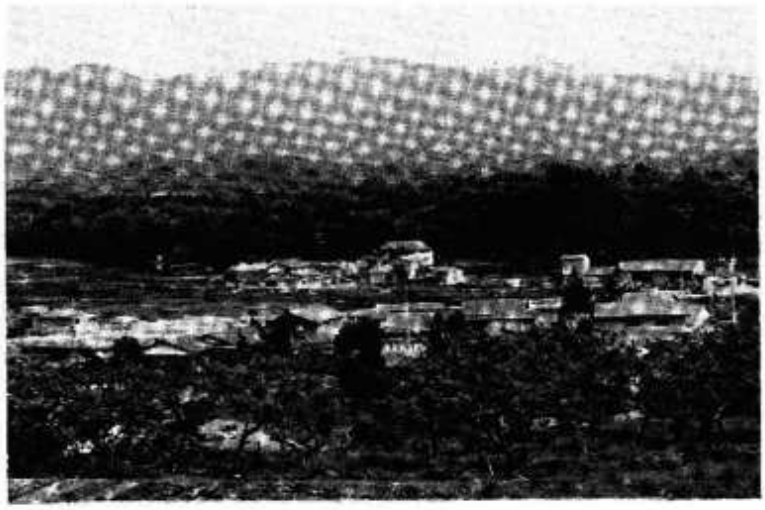
空　　掘
（Ⅳ・Ⅴ郭間）

空　　掘
（Ⅲ・Ⅴ郭間）

図版1

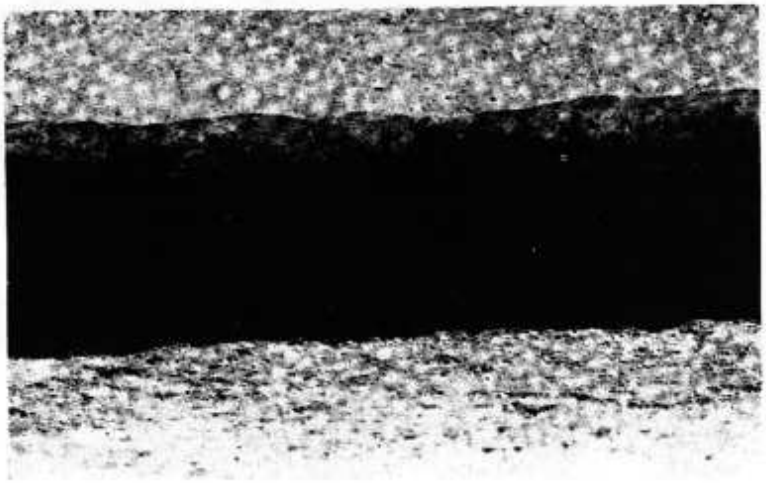
空　　掘
（Ⅱ・Ⅲ郭間）

空　　掘
（Ⅰ・Ⅱ郭間）



本遺跡より高市
館を望む

図版2

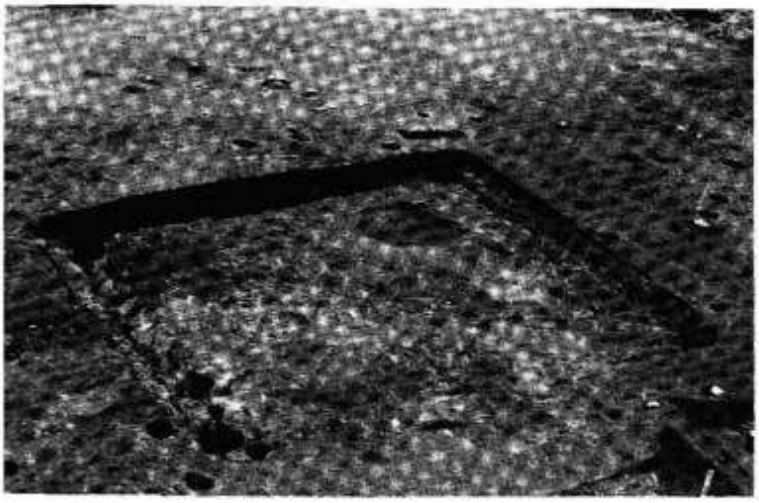


遺跡基本層位

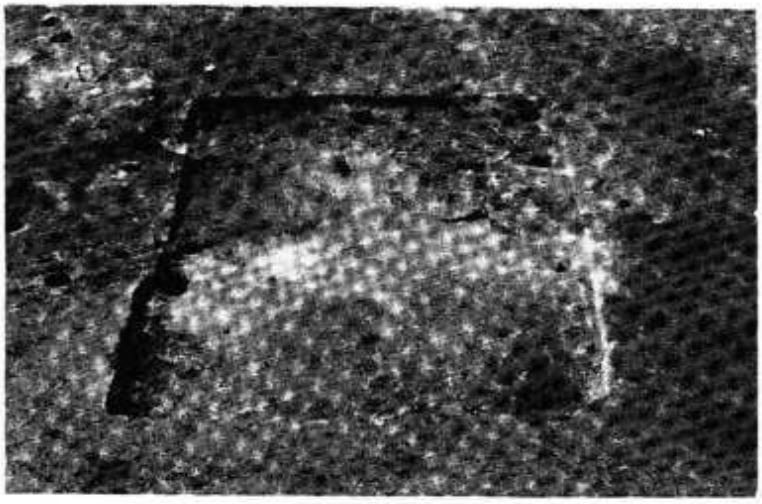
発掘調査風景

発掘調査風景

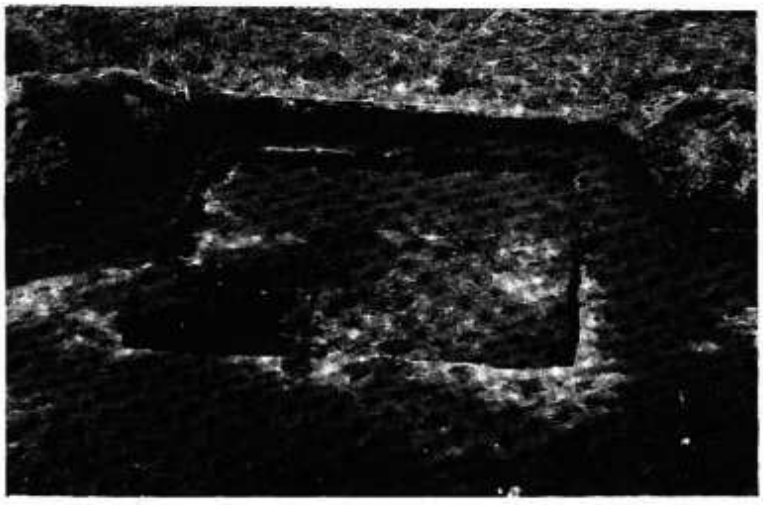
図版3



第1号竪穴住居跡

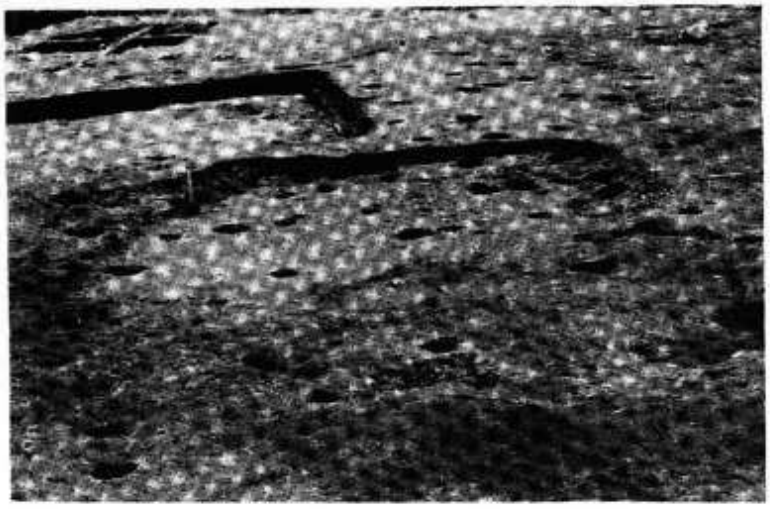


第2号竪穴住居跡

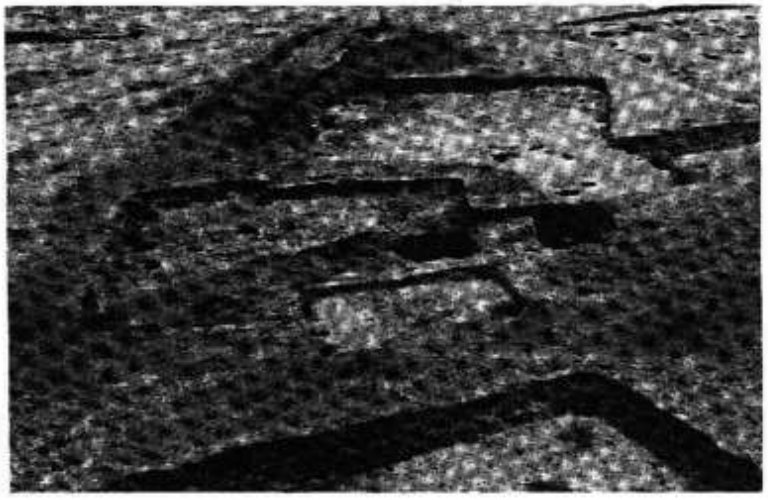


第3号竪穴住居跡

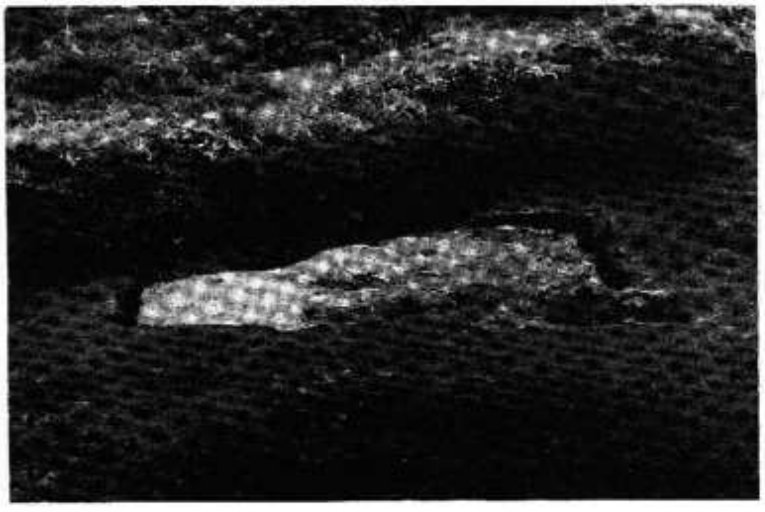
図版4



第5・6号竪穴
住居跡

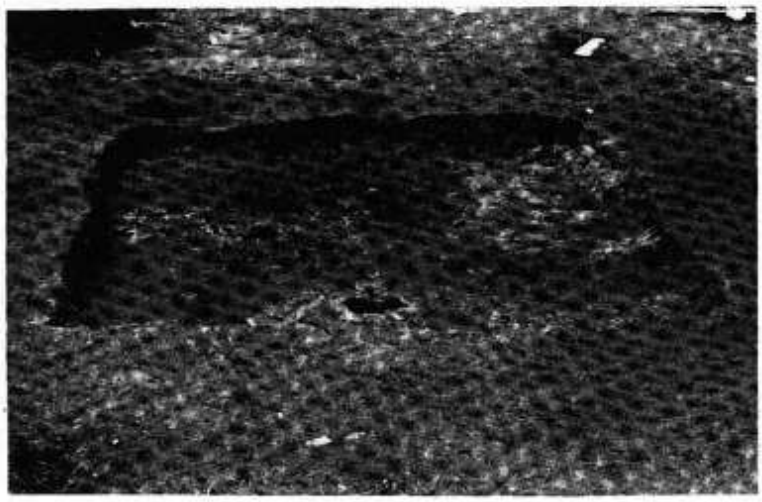


第10号竪穴住居跡
と第7・21号竪穴
遺構

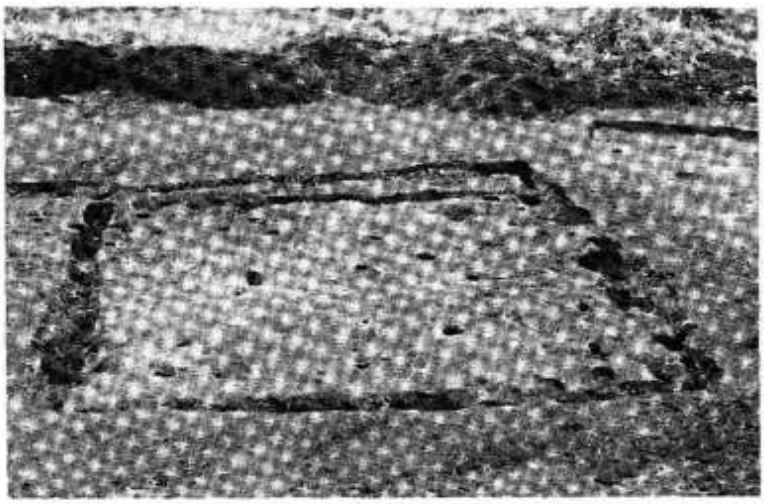


第12号竪穴住居跡

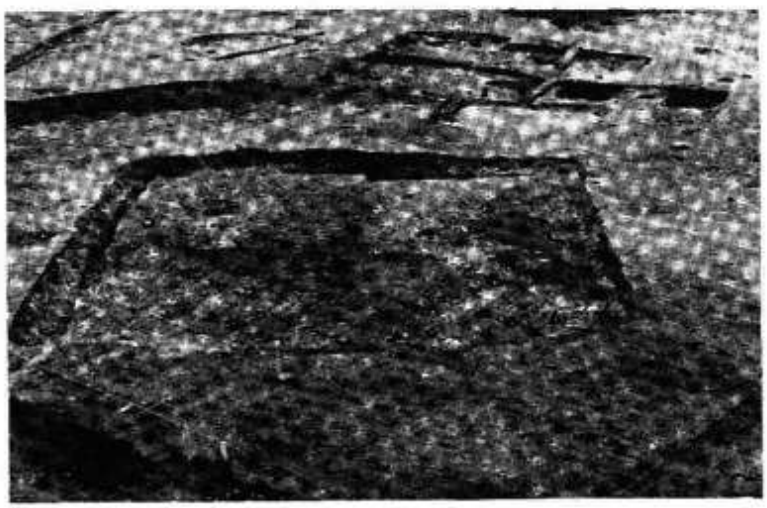
図版5



第13号竪穴住居跡

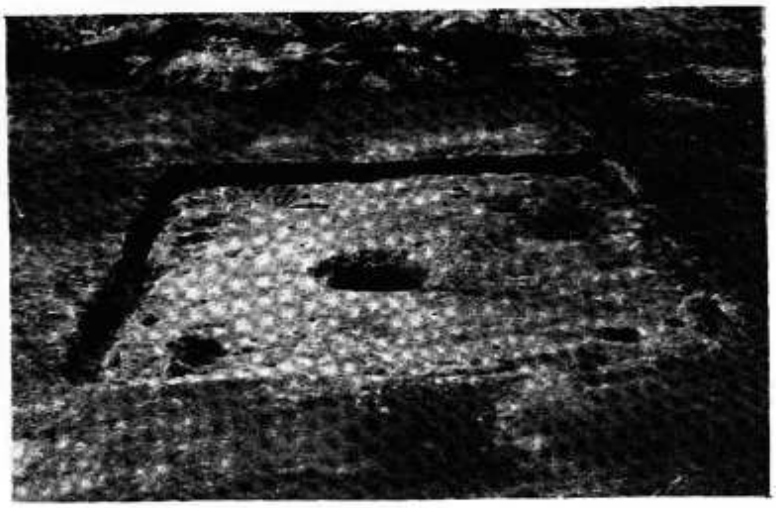


第14号竪穴住居跡

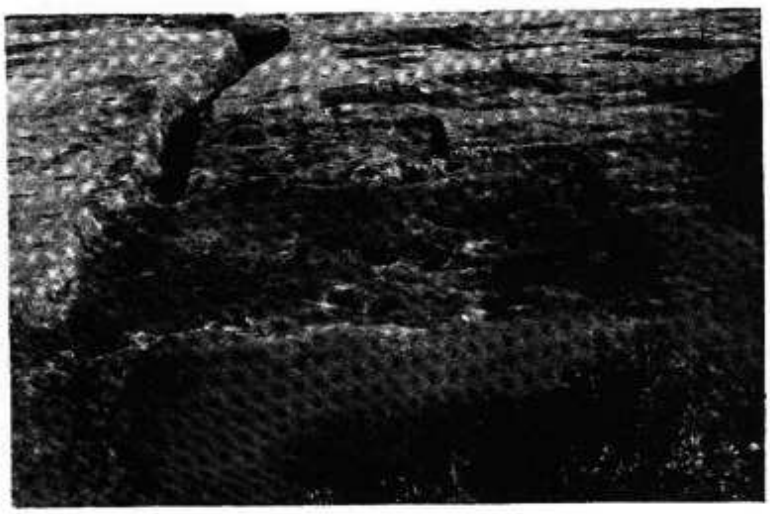


第15号竪穴住居跡

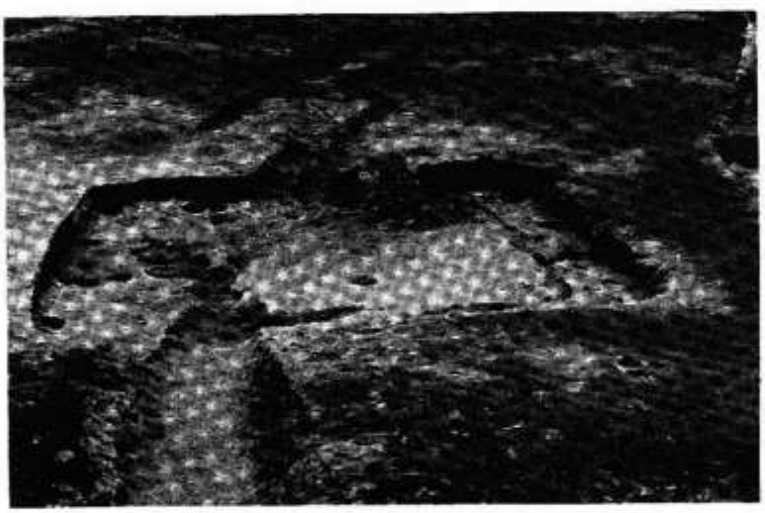
図版 6



第17号竪穴住居跡

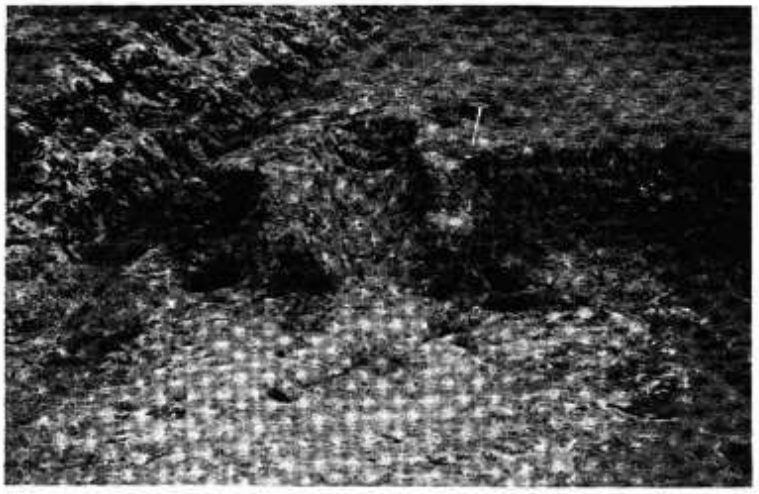


第21号竪穴住居跡
と第11・12号竪穴
遺構

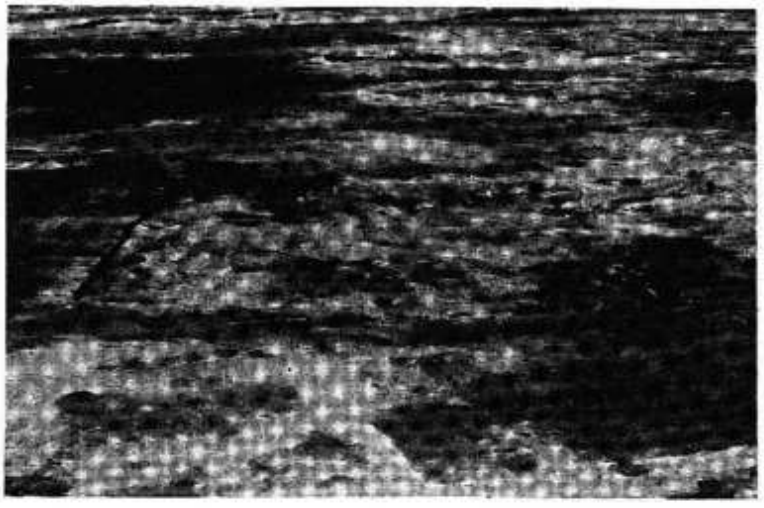


第22号竪穴住居跡

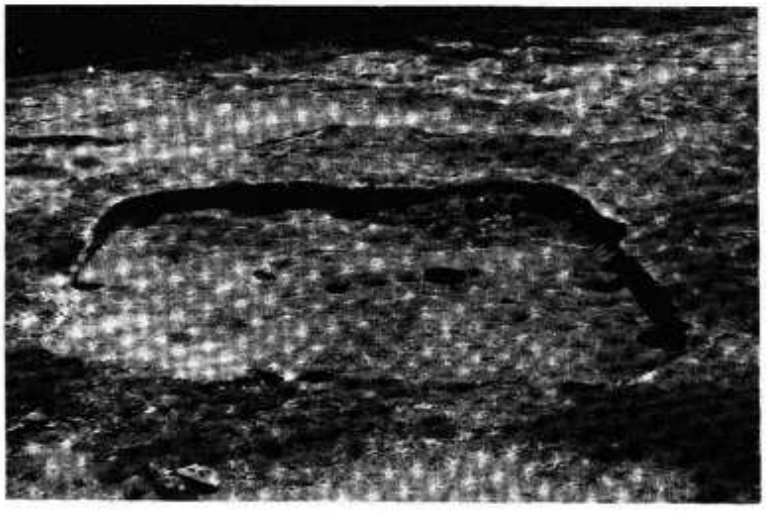
図版7



第22号竪穴住居跡
カマド

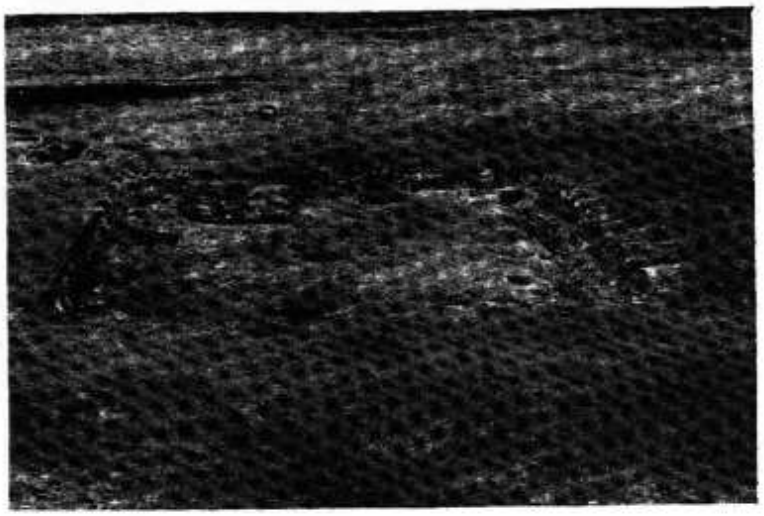


第23号竪穴住居跡

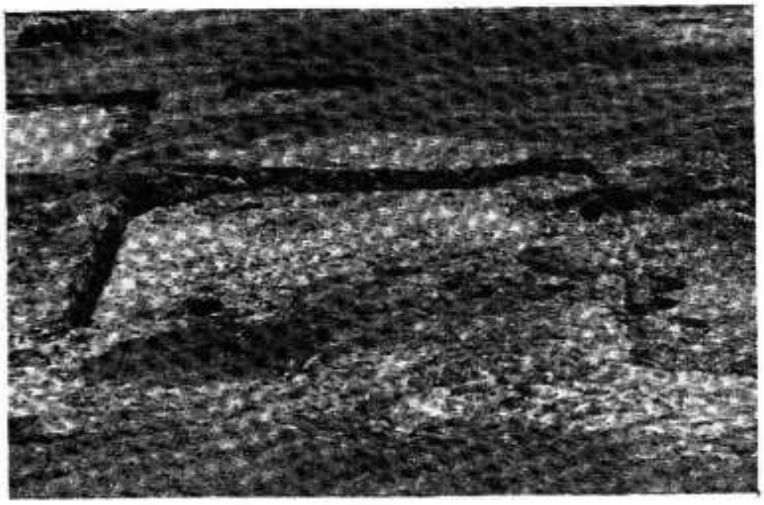


第24号竪穴住居跡

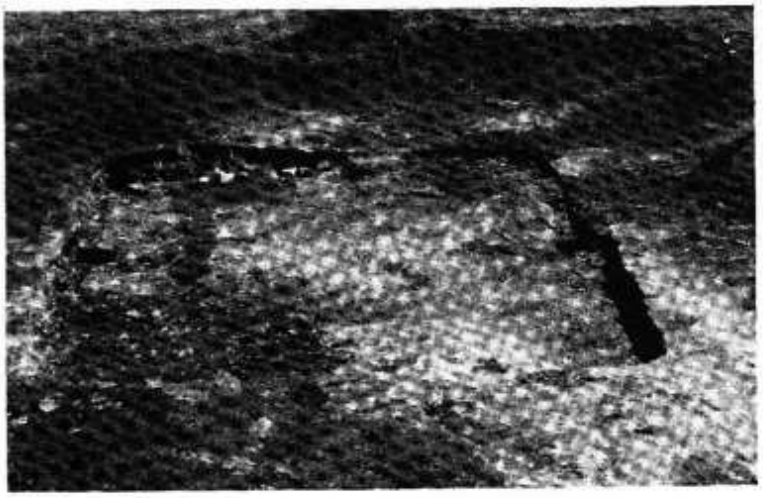
図版 8



第26号竪穴住居跡

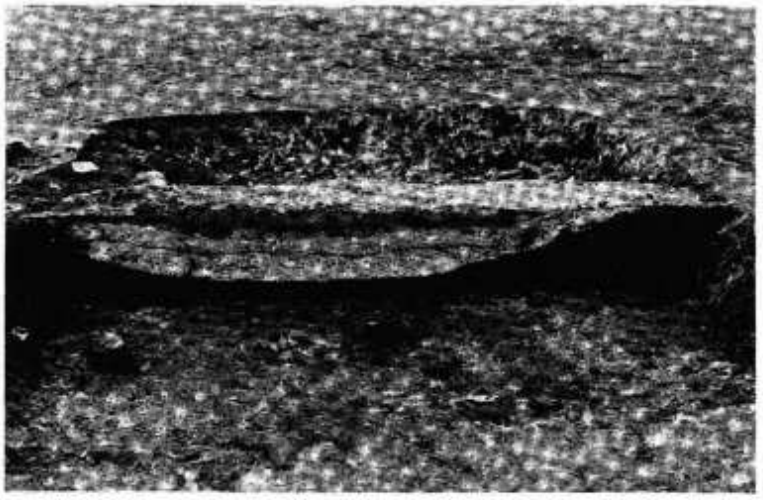


第28号竪穴住居跡

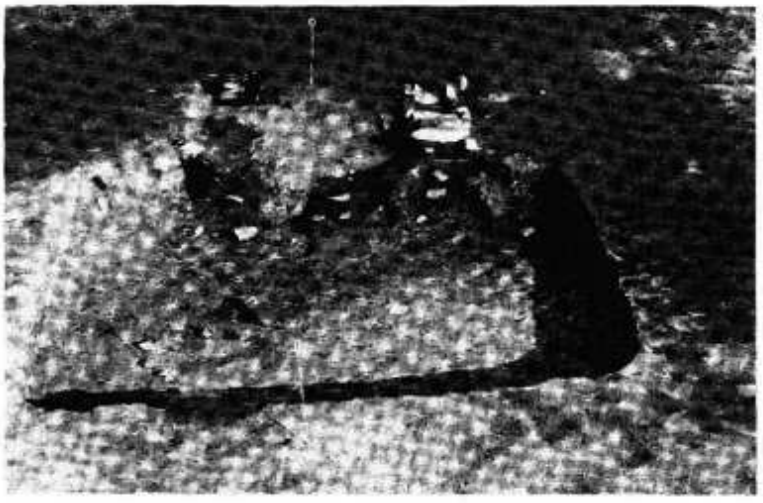


第30号竪穴住居跡

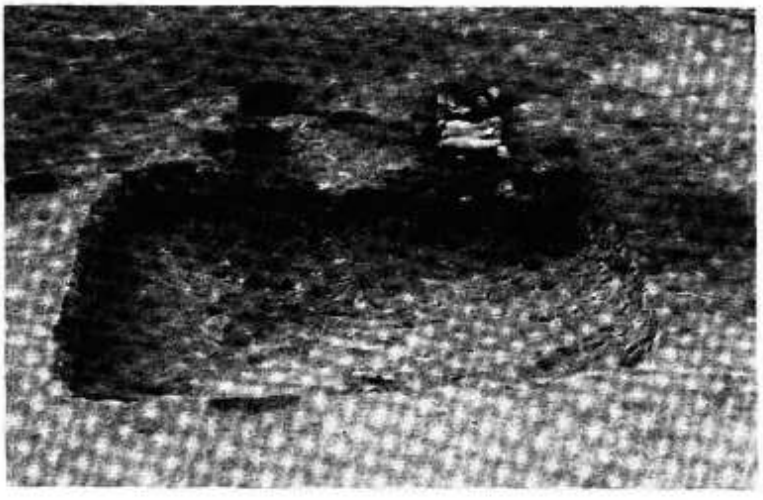
図版 9



第31号竪穴住居跡
土層堆積

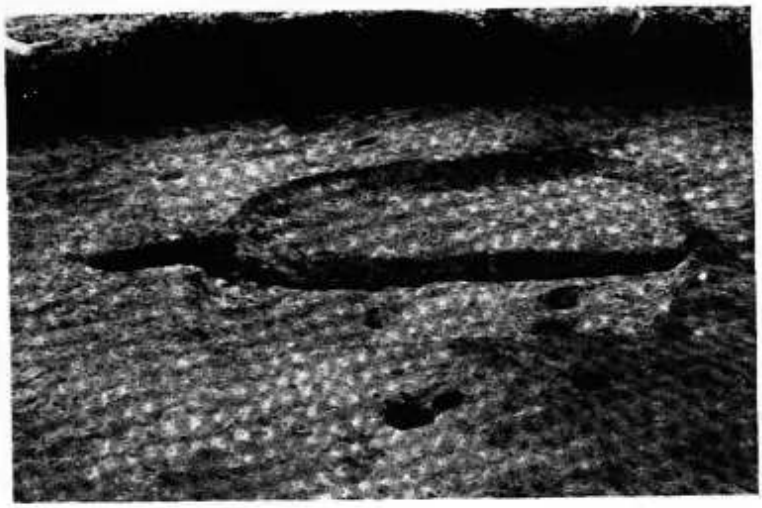


同上　完 掘 前

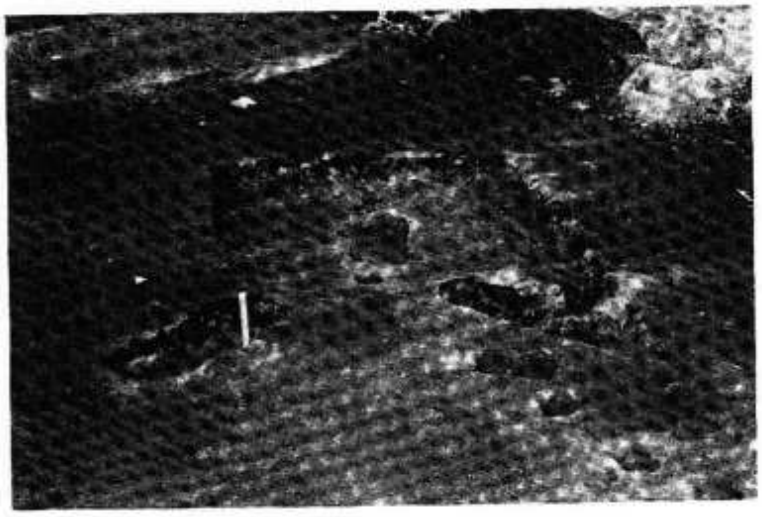


同上　完 掘 後

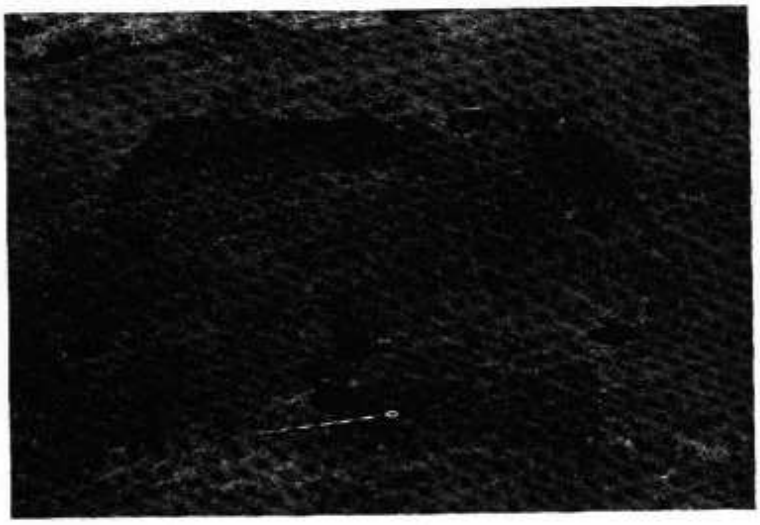
図版10



第2号竪穴遺構と
第1号溝状土壙

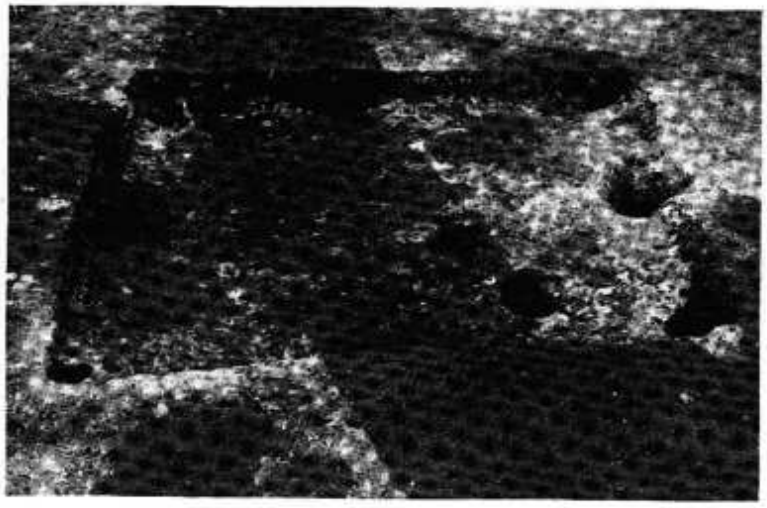


第4号竪穴遺構

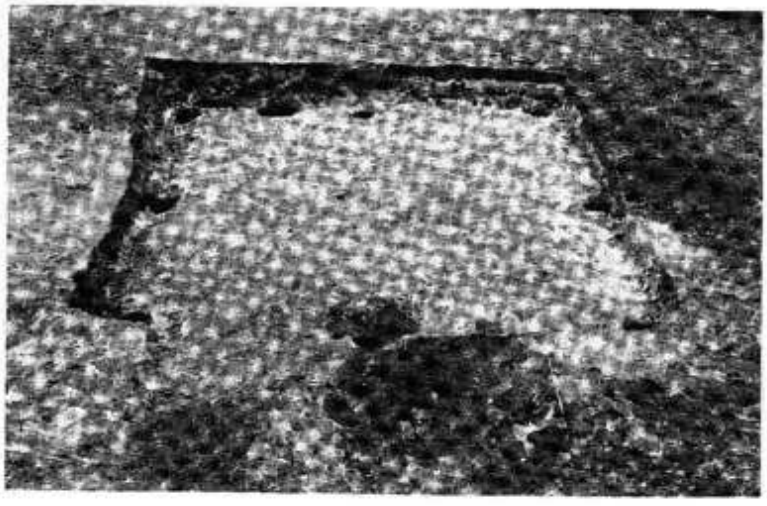


第5号竪穴遺構

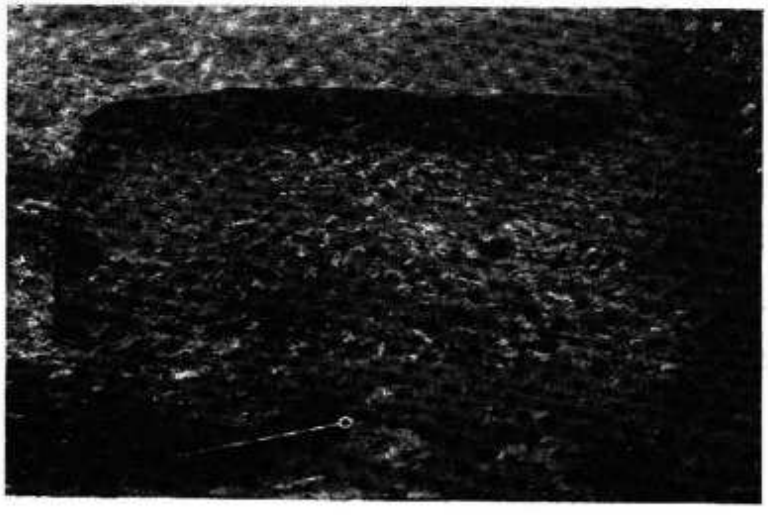
図版11



第６号竪穴遺構

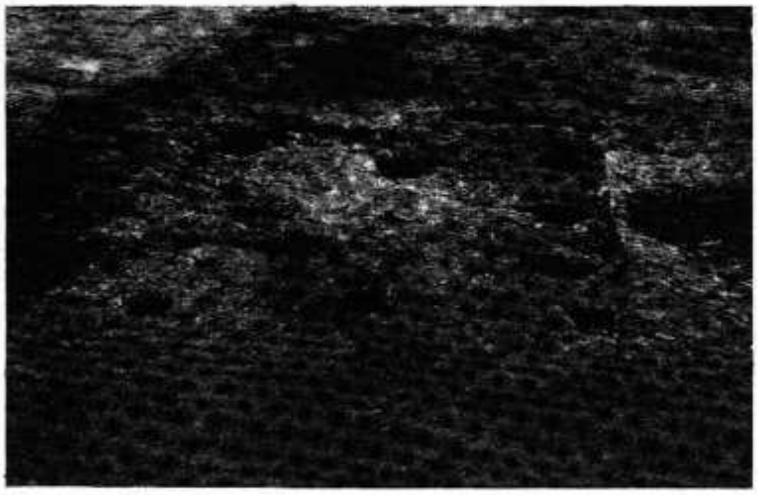


第７号竪穴遺構



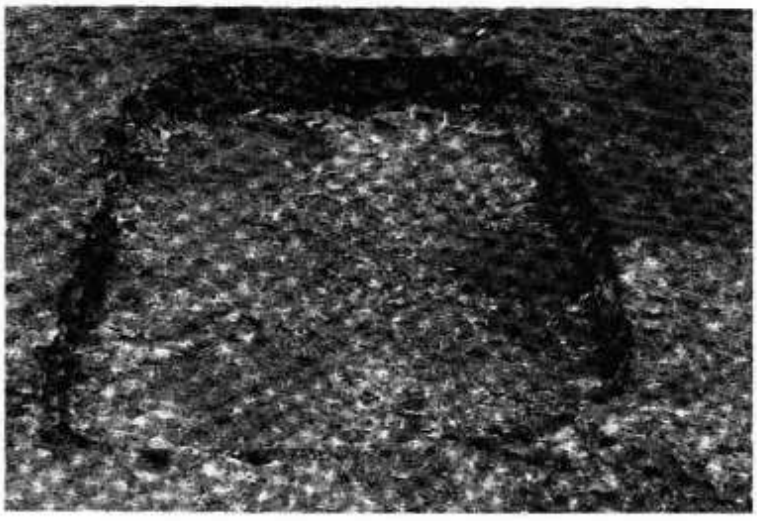
第８号竪穴遺構

図版12



第10号竪穴遺構

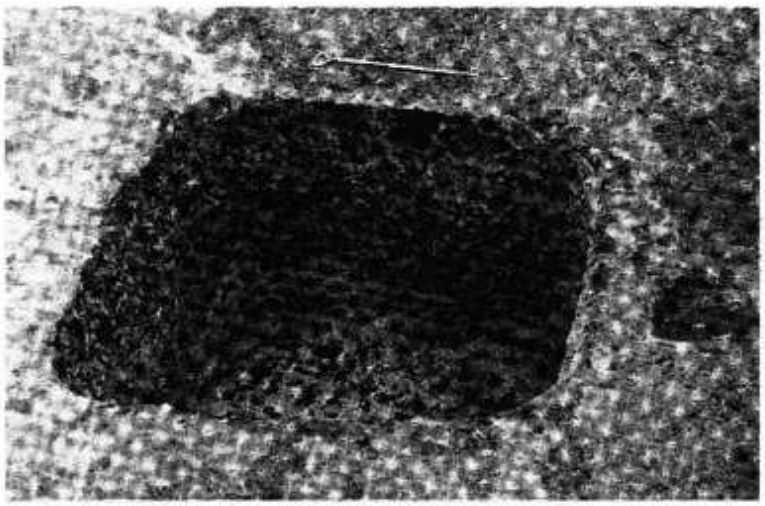
第11号竪穴遺構
石組炉



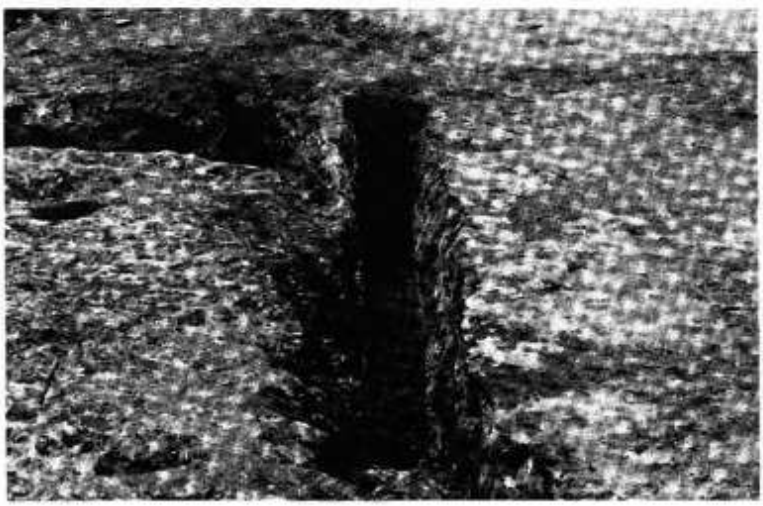
第14号竪穴遺構

図版13

第19号竪穴遺構

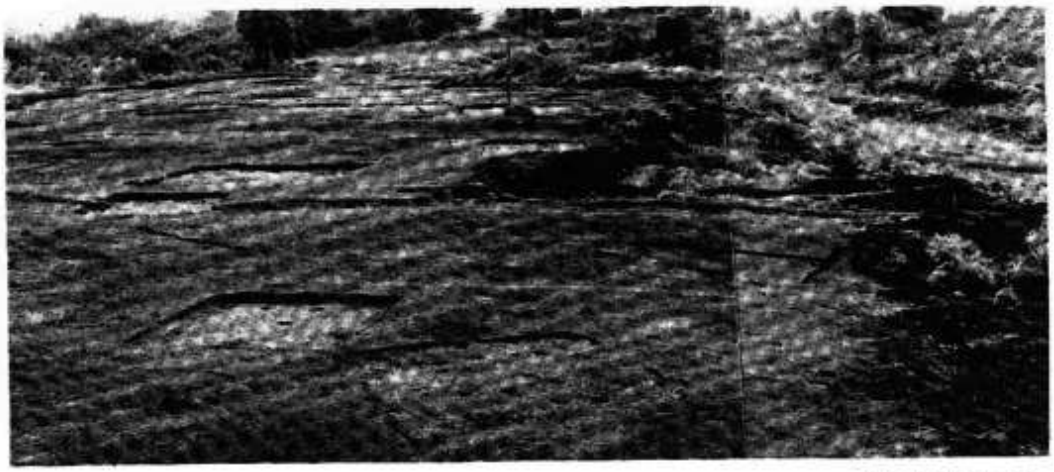


第 1 号 土 壙

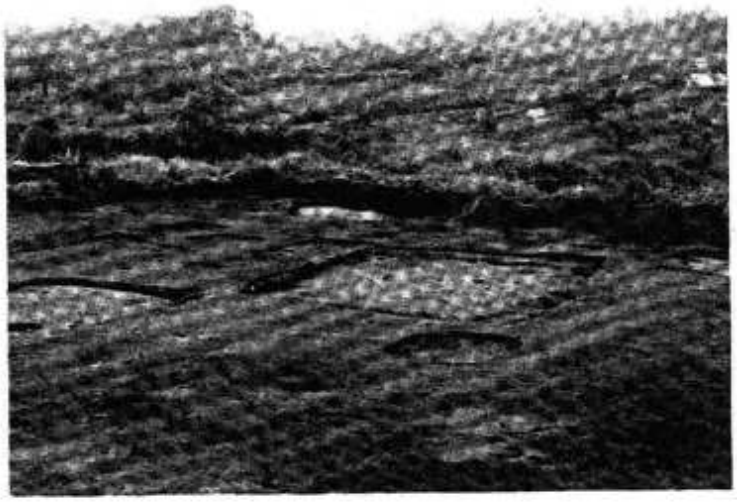


第 1 号 溝状土壙

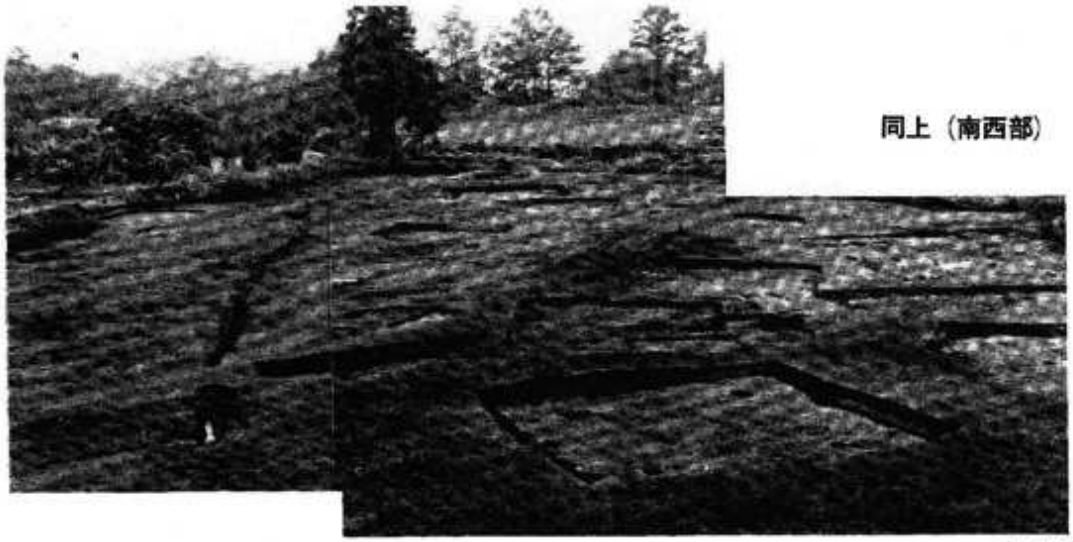
図版14



発掘調査終了後
（西部）



同上（北西部）

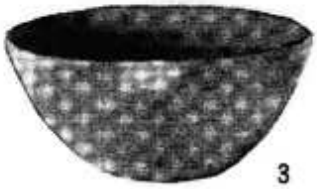


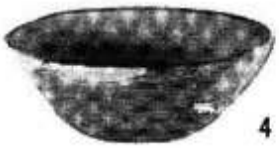
同上（南西部）

図版15

1

2


3


4

5

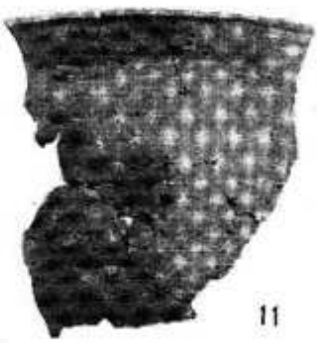
6

7

8

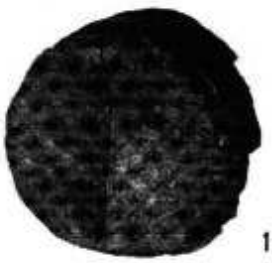
9

10

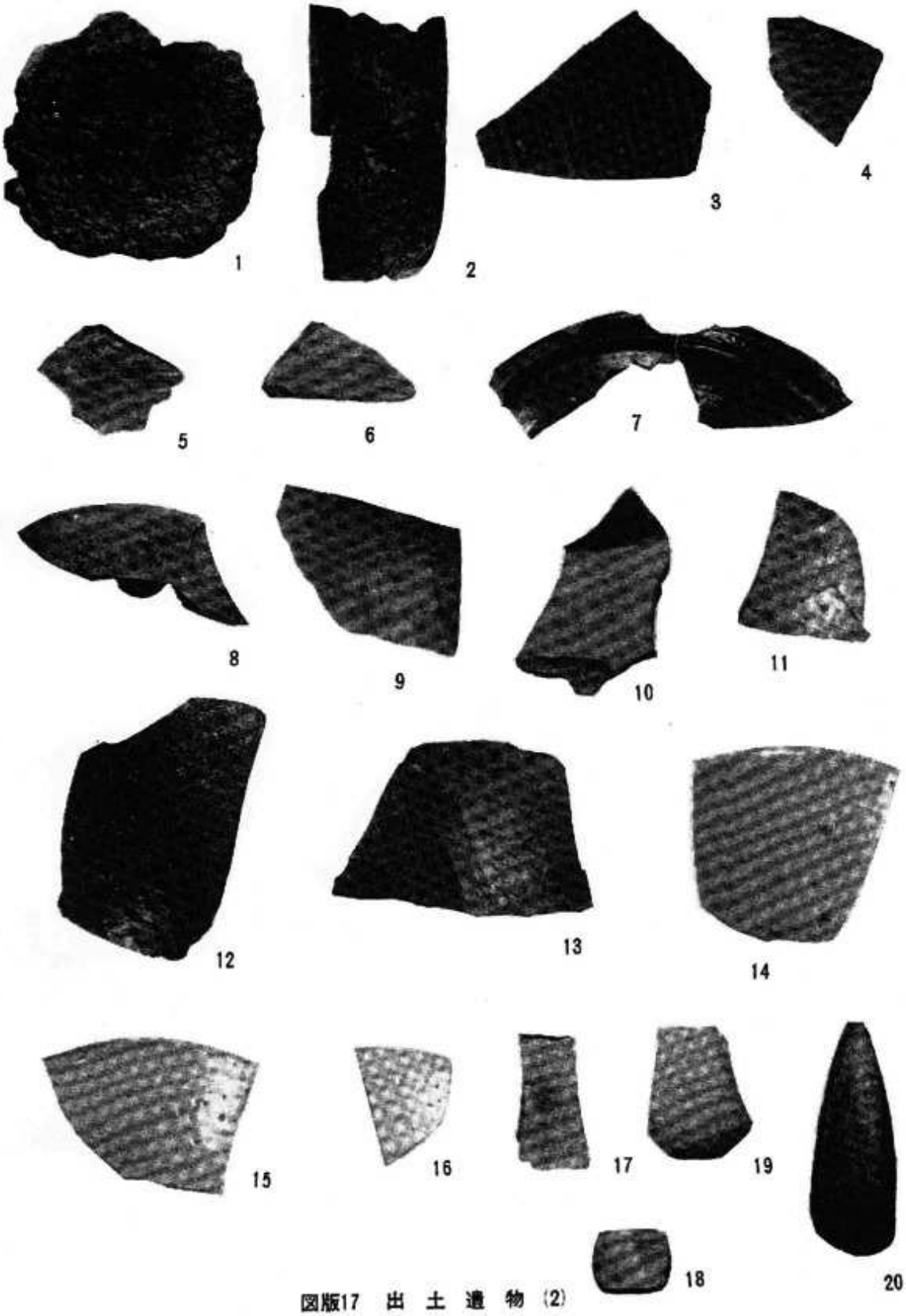

11

12

13


14

図版16　出 土 遺 物 (1)



図版17　出土遺物(2)

図版18　出 土 遺 物 (3)

鹿角市文化財調査資料　22

高市向館跡発掘調査報告書

発行年月日　　昭和57年３月31日

発　行　所　　鹿角市教育委員会
〒　018－53
秋田県鹿角市十和田毛馬内字上陣場19の５
ＴＥＬ　01863－５－4011

印　刷　所　（有）大館孔版社